797-324
1200501607162
797
324

改造文庫

第一部 第二十八百篇

老子の研究

(下)

義析經德道

武内義雄 著

複写

改造社出版

421

納本

改造文庫
第一部
第二十八百篇

老子の研究
道德經析義（下）

武內義雄著

改造社出版

797
334

弁言

序説の第四章において考證した通り、老子道德經は西暦紀元前二百四五十年前後に編纂されたもので、それ以前老子の語は、その後學の間に口から口へと語り傳へられてゐて、まだ竹帛に上されてはゐなかつたものらしい。さうして口傳で傳へられた言葉は兎角傳へる人の主觀が加はつて原義が失はれやすいものであるから、老子道德經の中にも相當後人の語後世の思想が混入してゐるものと考へなければならない。現に老子道德經の中に韻文と散文とが錯雜してゐて思想の矛盾も藏せられてゐるのは、この間の消息を物語るものである。そこで本冊においては道德經の本文を分析して新しい部分と古い部分とを區別し、成るべく後世の竄入を去つて老子の本眞を明かにしようとつとめた。概して有韻の文は口口相傳した時代の舊い形を存するもので古く、散文の部分は後人の敷衍に係るものが多い。そこで道德經全部にわたつた、その押韻を檢して章節を別つて新舊を區別することにつとめた。

しかし押韻を檢するためには、それに前だつて先づ正確な本文を定めなければならない。そこで本書においては本文の次に考異の項を設けて、出來るだけ廣く舊いテキストをあつめて本文の證定を試みた。

解釋は成るべく古典に根據を求めて臆說空論をさけたつもりであるが、著者の淺學なため未だ充分でないところもあらう。

凡例

一、經文は王弼本に據つた。王弼本は道藏本と明和本とを對照し、他書に引かれた王本などを參考して出來るだけ誤を正した。

二、經文中、後人の傳演注解評語等の竄入と判斷せられ且つ前後の文脈に害ある部分は活字を小さくして古い部分と區別した。

三、經文に錯簡あるところは舊態を存しながら出來るだけ之を正すことに努めた即〔〕ではさんだ部分は刪除すべきを示し「」を施した字句は他章から移したことを示す。

四、分章は普通行はれてゐる八十一章の區分に從つたが、それが不條理と思はれる場合は二三章を合せて解釋したところもある。又一章の內でも節段を區別したところもある。

五、經文の中で有韻の部分は韻字の右に圈を附し、韻を轉ずる毎に○と●とを交互に用ゐて識別し得る樣にした。

六、攷異の條にあげた異文は王弼本を證訂し、其是非を判斷することを主眼として博引をさけた。

七、解釋は後世の注釋によらず成るべく周秦の古書に證據を求めて、道家思想の古い面目を發揮しようと努め、判らぬところは判らぬとして牽强をさけた。

老子の研究（下）道德經析義目次

弁言……三
凡例……五
老子道德經上篇……一一
老子道德經下篇……一一五

老子道德經析義

老子道德經　上篇

史記儒林傳に道德經を「老子書」と呼んでゐて、韓非の喩老篇に道德經の本文を「書曰」といつて引いてゐる點から想像すると、漢初までは「老子書」と題したとは思はれるが、後には老子道德經と呼ばれてゐる。焦弱侯の老子翼附錄には之を經と稱したのは漢の景帝が老子を尊信せられ子を改めて經と稱したのを始めとするといつて居るが、元來經は傳（注釋）に對する字で漢書藝文志に「老子鄰氏經傳」等の書をのせてゐるのによつて考へると、經は尊信の爲についた字でなく注文に對する本文の意であらう。而して之を道德經と名づけたのは、史記の老子傳に「老子廼著二書上下篇一言二道德之意一五千餘言」とあるに本づいたもので、道德二字はその內容を示したものであらう。從つて老子道德經は老子が道德の意を述べた本文を意味する。この書題は後世になると或は「老子通玄道德經」或は「道德眞經」など〻變つてゐるが王弼本は老子道德經と題したらしい。尤も唐の時代には王弼注を「玄言新記道德」或は「新記玄言道德」と改題したのもあるが、それは唐の道士が改めた名で王弼本の舊名ではない。王弼の老子注は上下二卷で之を上篇

下篇と呼んだことは第二十章の注によつて明かである。この上下篇名稱は史記の老子傳とも一致するから可なり古い呼び方であらう。一般に上篇を道經と題し下篇を德經と呼んでゐるが、それは河上公本の標題で王弼本には道經と德經とを分題してゐない。後世の注釋家中には河上公本の標題に本づいて上篇は道を論じ下篇は德を述ぶと說明する人もあるが、其內容には決してそんな區別がない。河上公本が道と德とを分題したのは上篇の首に道字があり、下篇の初に上德の字があるからで深い意味はない。今王弼本を主とするから標題も王弼本に從つた。

現在傳はつてゐる王弼本は皆八十一章に區別して居るが、これは河上公本の分章を王弼本に移したもので王弼は如何に章を分つたか明瞭でない。今は便宜通行本の分章を存して檢出のたよりとしたが、その不條理なところは二三章を合せて解したところもある。

第一章

(一)道可レ道非常道、名可レ名非常名、無名天地之始、有名萬物之母。(二)故(三)常無欲以觀其妙、常有欲以觀其徼。(三)此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門。

校異 (一)天地之始史記日者傳に此句を引いて天地を萬物に作り、此下王弼注にも「未形無名之時則爲萬物之始」とあるから王本は天地を萬物に作つたらうと論ずる人があるが、王弼は常に天地を萬物と解釋してゐるから、王本の經本は矢張り天地であつたらう。(二)景龍碑と開元幢には句首に故字がない。王本は故字があつたらしいが、此二句は後人の附加で衆妙之門を說明した語らしく、それが本文に竄入した後に故字が加はつたらしい。

右五十九字を河上公注には第一章として體道章と名づけてゐ、後世の注釋家中には此章は老子全篇の意を簡單に述べ盡してゐるとさへいふものもあるが、果して此章全部が老子の言であ

るか否かは疑はしい。試に其句法を檢して見ると、初の四句は六字句よりなり、次の二句は七字句で最後の四句は八字と四字で句をなしてゐる。而して初の四句は道字始字母字に韻をふんでゐるが、最後の四句には韻がない。又韓非子の解老篇及び淮南子の道應訓氾論訓は初の一句或は二句を引いて說明してゐるが、其他の部分は古書に徵引されてゐない。從つて初四句が古くから老子の言として傳へられたものであることは明瞭だが、最後の四句は老子言でないかも知れぬ。恐らく老子を祖述するもの丶敷衍したものであらう。中間の二句は妙字と徵字と押韻して故字を以て初四句に連接してゐるが、意味の連絡がよくない。無名有名の語を無欲有欲の字を以て受けるには思想の溝渠がある。後世の注釋家は解釋に苦しんだ結果此句を「常無以て其妙を觀むと欲し、常有以てその徼を觀むと欲す」と讀んで無字と有字とで上四句に連絡を求めてゐるものもあるが、此と同じ句法は第三十四章にも見えてゐて、その讀み方の無理なることは既に古人も指摘してゐる。而して第三十四章を熟讀すると此二句と同一句法である「常無欲可名於小」の七字は、後人の文であることが想像せられ、從つて此章此二句も後人の語と思はれる。

(一)初四句の意味は第二十五章の「物あり混成し天地に先つて生ず、寂たり寥たり、獨立して改らず周行して殆からず、以て天下の母となるべし、我その名を知らず、之を字して道といふとある一節と併せ考へて解釋すべきである。その一節によると老子がいふところの道は現象世界の萬物の本體を假りに名げて道といつたもので、現象世界の萬物は時々刻々變化して止らぬものであるが、本體たる道は恒久不變のものであるから、常道と呼び得る。世人は孝とか悌とかを道と呼ぶであらうが、これ等は父子の間昆弟の間に行はるべき道で、老子のいふ常道ではない。乃で老子は道可道非常道といつたのである。老子は假りに之を名けて常道といつたものゝ、これも本體を呼ぶに適當な語でない。凡そ名即人間の言語は相對的の物を呼ぶに用ゐらるゝもので、恒久普遍な本體を呼ぶに都合のよい言葉はない。乃で老子は名可名非常名といつたのである。現象界の天地萬物は相對的のものでそれ〴〵適當な名があるが、天地萬物の源である本體は絕對的で人間の認識を超越し、差別的の言葉でいひあらはし得ないものである。强ひて言ひ表はさうとするならば無名といふより外はない。この意味を老子に無名天地之始有名萬物之母といつたのである。此二句は天地の始は無名で萬物即現象の起るに及んで名がつくといふ意である。

(二)此兩者とは天地の始と萬物の母の二つで、言ひ換れば本體と現象である。即本體と現象は源に溯れば同じであるが、現象と成つて現れると本體と名が變つて來る。然し本體と現象とは本來別でないから同じである。同じであるとはいふものゝ我々が眼に見る現象世界が即道で

はない。此道と現象との關係は人間の思慮を絶したもので玄といふべきである。此の玄中の玄なところは實に諸現象の起るところで衆妙の門といふべきである。(二)は後人の語で衆妙の門に悟入する方法は無欲の二字にあるをいふ。常無欲以觀其妙等とは人が常に無欲であれば此妙門を悟り得るが、反對に欲に蔽はるれば其一邊を觀て偏する。徼の字は古來の注釋家種々に解釋してゐるが、玄宗注に從て邊徼の意と見るがよい。

第二章

(一)天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、故(二)有無相生、難易相成、長短相(較)形高下相傾、音聲相和、前後相隨、(三)是以聖人居無爲之事、行不言之教、萬物作(四)焉而不爲始、生而不有、爲而不恃、功成而不居、夫唯不居、是以不去、

校異 (二)每句相字の上河上公本傅奕本には之字がある。長短相較の較字諸本形に作る。たゞ

王弼本較に作る。此節六句二句ごとに韻をふんでゐるから形字が正しい、若し較に作れば傾字と韻が合はない。(四)萬物作焉の焉字は河上公本景龍碑開元幢景福碑にない。現行王弼本にあるのは謬りであらう。不爲始現行王弼本も其他の諸本も皆不辭に作り、不爲始に作るのは傅奕本のみであるが、第十七章の注によると王弼本ももとは不爲始に成てゐた事が判る。功成而不居の不字河上公本に弗に作る。現行王弼本にも弗に成つてゐるが注文から推測すると王弼本は不に作つたに相違ない。淮南子道應訓に引いた文も不に作つてゐる。傅奕本は此句を功成而不處に作り、景龍碑は成功不居に作り、開元幢と景福碑は功成不居に作る。(五)の不居は諸本皆上の句と同じ文字を用ゐてゐる。

右第二章河上公注には養身章と名けてゐる。然し全章を熟讀すると必ずしも養身を述べたものでなく其句法及意味から考へると大略五節に區分することができる。その中第一節と第二節とは故字を以て連接して後節が前節の結論の如く見えるが、意味から考へると却て後節を前提として前節の結論に達する方が自然である。次に淮南子道應訓に此章(一)を引いて「老子曰、天下皆知善之爲善、斯不善也、故知者不言、言者不知也」とある。現行本老子には「知者不言、言者不知」の二句は第五十六章にあるが、彼章に於て意味が連絡せず此章に移した方がよくつゞ

く。想ふに漢時代の老子は淮南子に引かれた如くつゞいてゐたのだらう。而して莊子の知北游篇に「夫知者不言、言者不知、故聖人行不言之教」とあつて、成玄央の疏には「行不言教」を老子の文と見てゐるから、知北游篇の作者が見た老子は知者不言等の句が直ちに行不言教の句につゞいてゐたものらしい。又現行老子の第四十三章に「不言之教、無爲之益、天下希及之」といふ句があるが、彼章に於ては前にたゞ無爲の益を說いて不言の教に及んでゐないから、もとは此章にあつたものらしい。而して第四節はこの不言の教無爲の益を說いたものである。乃で試に此章の脫佚を補うて順序を正すと次の如くになる。

有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾」音聲相和、前後相隨」生成韻、形傾韻、和隨韻

天下皆知美之爲美、斯惡已、天下皆知善之爲善、斯不善已、故知者不言、言者不知、是以聖人處無爲之事、行不言之教、不言之教、無爲之益、天下希及之」萬物作而不辭、生而不有、爲而不恃、功成而不居」夫惟不居、是以不去」辭有恃居韻、居去韻

右のやうに改定して讀むとその意味が明かになる。即天下の萬物は皆相對的のもので、吾人の認識も亦相對的である。有といへば無を豫想し、難といへば易に對する詞である。有を離れた無もなく、易を豫想しない難はない。高下といひ、長短といひ、音聲（聲は單音、音は音律）といひ、前後といひ又美醜といひ、善惡といふ、皆相對的のものである。然るに世人は美を美

と執し、善を善と執して絕對的のものの樣に誤認してゐる。然しこれは絕對の道からいへば皆誤りである。凡そ絕對の道は吾人の認識を超越し言語を絕してゐるものであるから、本當の知者は何事もいはぬ。言ふ人は眞理を知らぬ人である。乃でこの道を體する聖人は不言の教をたれ無爲の行をなすものだ。實際不言の教が施され無爲の行が履まれたならば、天下これ以上の善き事はない。

道は萬物を生じながら、一言も語らない。また生じたものを己の所有とせない。凡ての變化を爲しながら己の功とせない。實に道は功成つて自ら其功に止らうとせないものである。其成功を據守せないところがやがて恒久なる所以である。

全章の內(二)と(四)とが有韻の部分で古く、他は後人の附加した說明の言葉であらう。全章が同一人の手に成つて居ない有力な證據は最後の二節にあらはれてゐる。即萬物作而不辭以下の四句は辭字、有字、恃字、居字に韻をふんでゐる。詩經等の例から辭有恃の三字が韻に成ることは明かだが、居字が上三字と韻に成るのは老子の特徵である。詩經では居は古聲に從ふ字でキョと讀むが、老子ではキと讀むべきである。列子の黃帝篇に關尹が列子に對して「姬魚語女」といつた言葉をのせてゐるが、莊子の達生篇には同じ事を引いて「居吾語女」としてゐる。

これ關尹列子の頃彼等の住む地方で居を姫と同じ樣に發音した爲で、彼等の師とする老子も居をキと發音したのであらう。然るにこの下の夫唯不居の居字は下去字と韻をふんでゐるから、これは老子の學が中央に波及した後に加はつた敷衍の詞である。老子の中には夫唯云々といふ句が多いが、これ等は皆後學の敷演した部分であるらしい。

第三章

(一)不尚賢、使民不爭、不貴難得之貨、使民不爲盜、不見可欲、使心不亂、(二)是以聖人之治、虛其心、實其腹、弱其骨、常使民無知無欲、使夫知者不敢爲也、爲無爲無不治、

校異 (一) 尚賢景龍碑は上賢に作るが意味に於て變りない。使心不亂の心字の上、現行王弼本には民字があるが淮南子の引文及河上公本景龍碑開元幢景福碑にはない。王弼の注に「可欲不見則心無所亂也」とあるから王弼本ももとは民字がなかつたに相違ない。たゞ傅奕本にだけ民字がある點から推測すると現行王弼本は傅奕本によつて校增せられたものであらう。

(二) 强其骨弱其志の六字現存老子は弱其志强其骨となつてゐるが、この下王弼注に「骨知以幹、志生事以亂」とあるから王弼の據た本文は强其骨の三今が先になつてゐたらしい。且つ此四句を改め た如くにすると腹字と志字と韻をふむことになる。(三) 夫知者不敢爲也の句下景龍碑には爲無爲の三字なく、章末治の字傅奕本は爲に作る。

右第三章河上公本は安民章と呼んでゐて、其內容大體治民の法を說いてゐるから、河上本の章名は適當と思はれる。

此章の大意は莊子庚桑楚の語をかりていへば賢に據れば民相軋け、知に任ずれば民相盜む、民の爭ふは知者賢者を尚ぶからである。盜賊の起るは財寶を貴ぶからである。心靜かに安定せぬは欲があるからである。故に賢を尚ばず財寶を貴しとせず、欲しきものを見なければ盜賊も起らず爭も生せず、心も靜かに安んずる。乃で聖人が天下を治めるには民の心を虛くし志を弱くし無知無欲ならしめて、知者賢者をして政事に與らしめぬ樣にする。かくすれば天下はよく治まる。

此章中有韻の文は(二)の聖人之治、虛其心、實其腹、强其骨、弱其志、といふ句だけで此句は淮南子精神訓に「夫れ血氣能く五臟に專にして外に越えざれば則胃腹充て嗜欲省く」とあ

る文と比較すると、大體嗜欲の爲に血氣を消耗せない樣にすべしとの意で、此等の句は老聃の語であり得るだらうが、此外の散文の部分は畢竟無知を貴び賢を尙ばぬ方針、即愚民政治を主張したもので愼到の主張に一致するから、恐らくは老聃の語でなからう。

第四章

道沖而用之又不盈(滿)。淵兮似萬物之宗。(挫其銳、解其紛、和其光、同其塵。)湛兮似或存。吾不知誰之子、象帝之先。

改異 沖字傅奕本盅に作り、說文に引かれた老子と合する。然し淮南道應訓に引くところの老子は矢張り沖に作つて現在の諸本と合ふ。又字現行王弼本と河上公本とには或に作り、淮南子に引かれた老子、傅奕本景龍碑及び開元幢は又に作る。王弼注に「故沖而用之又復不盈」とある點から推測すると、王弼本も舊は又字に作つたが後に河上公本によつて改められたものであらう。盈字傅奕本に滿に作る、范應元所引王本又同じ。滿と盈とは意味は同じであるが下の存字先字と韻をふんだものと見れば滿字がよい。淵兮似萬物之宗の七字開元幢には淵

似萬物宗の五字に作つて淵字を缺筆してゐて、景龍碑には深乎萬物宗と成つてゐるが深字は唐諱を避けて改めたのであらう。湛兮似或存の五字、景龍碑開元幢ともに湛常存の三字に作る。淵兮湛兮の兩兮字河上公本に乎に作る。誰之子の之字は景龍碑と開元幢とにはない。

右河上公本には無源章と呼んでゐる。大體章意を得た名であらう。然し此章中間の挫其銳以下の四句十二字は第五十六章にもあつて、このところにあつては文章の連屬が不自然に見える。恐らくは錯簡であらう。之を削ると此章隔句滿存先の三字に韻をふむことになる。錯簡と思はれる句は第五十六章に讓つて殘る部分をこゝに說明しよう。

沖或は盅の字は盈或は滿字に對する字で虛の義である。道は眼にも見えず、耳にも聞えず、人間の認識を超越したものであるから沖虛といふべきである。然し其作用は萬物を生々して窮るところがない。乃で第四十五章には、大盈は沖の如く其用窮らずといつてゐる。此章に用之又不盈(滿)といつたのは彼章に其用窮らずといふと同じ意味であらう。又不窮といはずに不盈(滿)といつたのは水に喩へていつたからである。下に淵兮といひ湛兮といつたのも皆水に喩へた語である。道は沖とはいふものゝ決して空虛ではない。萬物は皆この道から生じ凡ての現象は此道の中に含まれてゐる。この意味を「淵兮似萬物之宗、湛兮似或存」いふ二句に言ひ

あらはしたのである。この道は凡ての現象の本源であつて他の物から生じたものでないから、吾不知誰之子象帝之先といつたのである。帝といつたのは天と同じ義である。

第五章

(一)天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗、(二)天地之間、其猶橐籥乎、虛而不屈、動而愈出、(三)多言數窮、不如守中。

校異 (二) 景龍碑開元幢ともに橐籥の下に乎字がない。屈字傅奕本詘に作る。詘は屈と同じ義である。陸德明の釋文によると王弼本は掘に作つた樣に見えるが、注文から考へると矢張り屈に作つたらしい。愈字傅奕本景龍碑開元幢には俞に作る。古は愈字がなかつた爲に俞字を使つたもので、俞の方が古い形である。

右河上公本には虛用章と名づけて一章と見てゐるが景龍碑には第四章から第六章までをつゞけて一章と見てゐる。平心この章を讀むと大體三つに區別すべきである。

(一) 天地不仁、及び聖人不仁の不仁の二字を莊子の大仁不仁の意味に取つて天地聖人は大仁であるといふやうに解釋するものもあるが、この一節は矢張り文字通りに解釋して天地及び聖人は不仁なものだと見るがよい。何故不仁かといへば天地は萬物を以て芻狗となし、聖人は百姓を以て芻狗となして仁恩を施してはゐないからである。所謂芻狗とは芻(クサ)を束ねて狗の形となし之を祭つて過を謝し福を求めるに用ゐられたものである。莊子天運篇に「夫れ芻狗の未だ陳ねざるや、盛るに篋衍を以てし、巾るに文繡を以てし、尸祝齋戒して之を送る。其已に陳ぬるに及んでは、行くものその首脊をふみ蘇(くさと)るもの取て之を爨くのみ」といつたのは即ちこれである。芻狗はそれが祭祀に用ゐらるゝ間は神聖な物として取扱はれるが、祭がすめば草芥としてすてられる如く、天地が萬物を生育し聖人が百姓を愛撫するのも、そのときの必要にかられて之をなすのみで、必要が去ればその後の事は眼中にないものだ。乃で天地や聖人に仁恩があるものとはいへない。淮南子齊俗訓に儒家が禮義を以て世を治むべしと說くを非難して、夫れ禮義は五帝三王の法籍にして一世を風化せる迹也、譬へば芻狗土龍の始て成るや、文るに靑黃を以て送迎し、飾るに綺繡を以てし、纏ふに朱絲を以てし、尸祝は袀袨し大夫は端冕して之を送迎するも、その已に用ひられし後は則壤土草芥のみ、孰か之を貴ばんや」といつて已成の法を排斥して時世に應じた法を制定すべきことを論じてゐるのと比較すると、此章は老子の言と

いふよりも道家から派生した法家者流の說であると見るべきである。

(二) 橐籥は冶工が風を出し火を熾にするに用ふる道具で俗にフイゴと稱するものである。橐籥の構造は空虛な箱から出來てゐるが、之を動かせば風が限りなく續いて出る。天地の間も空虛なものであるが、其作用はいつまでも續いて萬物を生々してゐる。この點フイゴに似てゐる。この一節は前後の節に意味の連絡がない。

(三) この一節は多言を戒めた格言で前節に關係がない。中字には種々の意味があつて、兩端に對して中央の義となる。中外相對するときは內の義となる。又中を當る意味に用ゐることもある。此章守中の二字は多言と相對してゐるから內に知を藏して默する義と解するが適當である。莊子人間世篇に「夫兩喜必多溢美之言、兩怒必多溢惡之言、凡溢之類妄、故法言曰、傳其常情、無傳其溢言、則幾乎全」とあるに考へ合すと多言が溢言で、守中が當を守ること即常情を傳ふることにも解せられる。いづれにしても多言を戒めた訓言で前節に意味がつゞかぬ。

第六章

谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地之根、綿綿若存、用之不勤、

攷異 景龍碑と開元幢とには玄牝之門是謂天地之根の二句を玄牝門天地根の六字に作る。

第七章

天長地久、天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生、是以聖人後其身而身先、外其身而身存、非以其無私邪、故能成其私、

攷異 景龍碑開元幢は長且久者の句に且字がない。非以其無私邪の句、景龍碑には非字と邪の字とないが、開元幢と景福碑とには邪字だけがない。陸德明の釋文に河上公本は非字邪字がないといつてゐるから、景龍碑は河上公本で、王弼本は今の如くであつたらう。淮南子道應訓に引いてゐる文は王弼本と合する。

右二章を河上公本には成象第六韜光第七と呼んで別章となし、後の注釋家も多く之に從つてゐるが、後章は前章を敷衍したもので文は連屬してゐると思ふから、今同時に說明する。

谷神不死以下六句は列子の天瑞篇に黃帝書の語として引用せられてゐる文で、死字と牝字と

韻を合せ門根存勤の四字が又別に韻をふんでゐる。假令老子其人の言でないとしても道家言の古いものだと想像せられる。

谷神の二字は陸德明の釋文によると河上公本に浴神に作るとあるが現存河上公本は矢張り谷神に成つてゐる。但後漢陳邊韶の老子碑銘中に此文を引いて浴神に作つてゐる。然し浴神でも谷神でも意味は明かでない。列子天瑞篇に「生生變化する萬物は、不生不化なる本體から生々變化せしめられてゐるが、本體そのものは他から生ぜられ化せられるものでないこと」をのべて次に黃帝書の語として谷神不死以下の六句を引き、更に「故生レ物者不レ生、化レ物者不レ化」の句で承けてゐる。これによると谷神不死の不死の二字は不生不化を意味するもので谷神は萬物を生々變化せしむる靈妙な作用を指すに相違ない。元來谷字は穀字と同音で古書に通用せられてゐる。漢書の王莽傳に五穀を五谷とかいてゐる。又爾雅の谷風を魏の孫炎が解釋して「谷の言は穀也」といつてゐる。是等によつて谷と穀とを通用された事を證し得る。而して穀には生ずる意味又は養ふ意味があるから、老子の谷神は全く列子の生物者を指すといひ得る。從つて此章の意義は谷神即萬物を生々する神は永久不滅な物で、それが萬物を生々する靈妙な作用を持つて居るから、又之を玄牝といふ。この玄牝から天地萬物が出るから玄牝の門は天地の根本である。この谷神即玄牝は永久不滅で、無限の働きがあるから緜々若存、用之不勤というたのである。

第七章の天長地久は、第六章の天地の根をうけてゐる。この天地が長久な理由は天地は道即ち谷神の形に表はれたので、萬物を生ずるが、自らを生じてゐないからである。他のものを生じて自れを生ぜないのが、道或は天地の長久な原因であるから、有道の聖人は天地の作用に倣つて、その身を後にし、その身を外にして働き、而も其身は存し、他人に先たつ地位にある。その身を外にし後にするは即ち無私の行動で、この無私がやがて私を成就する所以のものである。

第八章

上善若レ水、水善利二萬物一而不レ爭、處二衆人之所一惡、故幾道、〔居善地、心善淵、與善仁、言善信、正善治、事善能、動善時〕夫唯不レ爭、故無レ尤、

校異 景龍碑開元幢而不爭の而字又に作り、與善仁の仁字人に作り、正善治の正字政に作る。傅奕本處居に作り幾於道の下に矣字がある。人字政字景龍碑と同じ。

右河上公本には易性章と名づけて居るが、實は唯不爭の德を述べたにすぎない。その中「居善地」以下の七句は意味が連屬しないのみならず、王弼本にも解釋せられて居らぬ。恐らくは古注が竄入したもので本文ではなからう。蘇子由の注にこの七句は水の七德をあらはすものとし、林希逸の說には、これ皆有道の士の善をいふと說いてゐるが、ともに當らぬ。上善の善の字を說明した古い注語の殘存するものである。

上善若水といふは水は卑きについて物と爭はぬ。この不爭の二字は善中の善なるもので上善である。故に上善若水というたのである。故幾於道といふのは道と水とは不爭の德をそなへてゐる點に於て似てゐるが、道は虛無で水は現象的存在であるから同とはいはれぬ。故に幾しといつたのである。

淮南子原道訓に「夫れ無形者は物の大祖なり、無音者は聲の大宗なり、其子を光となし、その孫を水となす、皆無形より生ず、それ光は見るべくして握るべからず、水は循ふべくして毀つべからず、故に有像の類は水より尊きはなし」といつた一條は道家系統の思想家が水を喩へに取つて言說した意義をよく示してゐて此章を解するに參考となる。

第九章

持而盈不如其已。揣而鋭之不可長保。金玉滿堂莫之能守。富貴而驕自遺其咎。功成名遂身退天之道。保此道者不欲盈。夫唯不盈。故能蔽不新成。以上十七字舊在十五章

校異 不如其已景龍碑不若其以に作る。以もヤムと讀んで已と同義。揣而鋭之傅奕本敝而梲之に作り、其下に敝音揣量也と注す。敝は揣の或體で、說文にはない字であるが、集韻四紙韻の中に載つてゐる。鋭字は釋文によると河上公本だけが鋭に作つて王弼本は梲に作つた如くかいてゐるが、王注の意によると梲に作らないで鋭に作つたに相違ない。梲は段借で正字は鋭である。景龍碑開元幢景福碑皆鋭に作る。滿堂傅奕本滿室に作る。其咎の咎字景龍碑開元幢ともに咎に作る。功成名遂の四字現行王弼本に功遂の二字に作り釋文も功遂の字を出して一本作成と注して居るが、王注によると成字があつたことは明かであるから、今引南子引くところ及び景龍開元二碑によつて改めた。傅奕本は成名功遂に作る。景福碑及び淮南子には道字の下に也字がある。

(二) 保此道者以下十七字は諸本皆第十五章末にあるが彼章に於て文意がつゞかぬ。淮南子の作者が見た老子は此章の末にあつたらしいから改め移した。末句故能蔽不新成の蔽字を淮南は弊に作つてその下に而字がある。景龍碑はたゞ能弊復成の四字に作る。

右河上公本は運夷考と呼んでゐる。全章隔句押韻して意義も亦明晰である。保此道者以下の句を此に移した理由は淮南子の道應訓に次の一節があるからである。「孔子桓公の廟をみる、器あり之を宥巵といふ。孔子曰く善いかな、予この器を見るを得たることと。顧みて曰く弟子よ水を取れと、水至りて之にそゝぐ、其沖なれば正しく盈れば覆る、孔子造然容を革めて曰く、よいかな盈を持するものかと。子貢側にありて盈を持するの意を問ふ、曰く益して損するなりと、又問ふ益して損ずるとは何の謂ぞやと、曰く夫れ物は盛にして衰へ、樂極まれば則悲し、日は中して移り、月は盈て虧く、此故に聰明睿智にして之を守るに愚を以てし、多聞博辯にして之を守るに陋を以てし、武力毅勇にして之を守るに畏を以てし、富貴廣大にして之を守るに儉を以てし、德天下に施して之を守るに讓を以てす、この五者は先王の天下を守りて失はざる所以なり。この五者に反くものは危し、故に老子曰く「服二此道一者、不レ欲レ盈、夫唯不レ盈、故能弊而不二新成一」と、以上は淮南子の文でその持盈をとくは此章の初の持而盈之一條の意を敷衍したもので、これを結ぶに服此道者云々の文を以てしたところ、やがて此一節の錯亂を訂正すべきを暗示してゐるといへよう。

さて此章持而盈之の一句は水に喩へて退一歩の道を說いたもので、その意味は上に引いた淮南子の一節がよく說明してゐる。揣而鋭之の一句は鋒刃に喩へて退一歩の道を說いたものである。揣は捶鍛の義で鋭は磨利即鋒刃を鍛て且つ鋭利ならしむる意である。不如其已と不可長保とは互文で双方にかゝる、即器を持して之を盈すこと鋒刃の鋭利なものは長く保持が出來ないから、むしろ盈すこと鋭くすることを止むがよしといふ意である。金玉滿堂、富貴而驕の句上に準じて知るべし。功成名就身退天之道の二句は上諸條の結論である。而保此道者の此道は即上の天之道を承けて盈を欲することを戒めるのである。

第十章

(一)載營魄抱一、能無離乎、專氣致柔、能如嬰兒乎、滌除玄覽、能無疵乎、愛民治國、能無以爲乎、天門開闔、能爲雌乎、明白四達、能無以知乎、(二)生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德、

攷異 （一） 載營魄冊府元龜唐玄宗天寶五載の詔を錄して曰ふ「頃改二道德經載字一爲レ哉仍隸二屬上句一遂成二注解一と、玄宗が改めた載字は此章首の字であるが、開元幢は未だ改められて居らぬ。この幢は開元二十年に易州に於て刻立せられたもので、天寶後定の注とは同じでない。玄宗の注經として有名な孝經にも開元初注本と天寶重修本との二種があつて、初注本は我國に古鈔本が殘つて居り重修本は石臺孝經を初として種々な板本も多い。而して初注本と重修本と比較するとその修定された點が甚だ多い。之れで推測すると老子の注にも二本あつて可なり相違してゐるものと思はれるが、後定本は傳本を見ない。從つて今攷異中に引くのは開元幢のみである。抱一傳奕本袤一に作る、袤と抱とは同じ意、說文には袤を褱也と注し抱を捊と同じ意味にして兩字の意味を異にしてゐるが、後世の本には袤の義を抱であらはしてゐる。能無離乎の乎字は景龍碑開元幢河上公本にないが、王弼本景福碑及淮南引文にはある。下六乎字皆同じ。專氣致柔の致字傳奕本至に作る、淮南引文亦同じ。能如嬰兒乎の如字景龍碑開元幢になく傳奕本と淮南引文とにはある。現行王弼本は如字を脫してゐるかその注文によつて考へるともとは如字があつたに相違ないから補うた。景福碑にはこの句を能如攖兒乎に作つてゐる。愛民治國の民字を景龍碑は人に作る、唐諱をさけたのであらう。無以爲乎傳

奕本には無以知乎に作つて下明白四達の下の無以知乎を無以爲乎に作つてゐる。景福碑は傳奕本と同じ順序であるが知爲の上に以の字はない。景龍碑と開元幢とは無爲無知に作る。現行王弼本は景福碑と全く同じに成つてゐるが、その注文によると以の字のあつた事は明瞭で、又陸氏釋文に以知乎の三字を開闔の二字より後に出してゐる點から推測すると、王弼原本は今改めたやうに作つたに相違ない。淮南子道應訓に引いた此章の一條も今改定した通りである。能爲雌乎の爲字現今王弼本に無字に成つてゐるが、其注文から推測するともとは爲に作つたに相違ない。現行王弼河上公本以外の諸本はみな今改めた通りである。

（二） この節は諸本皆同じである。但釋文に河上公本は恃を侍に作るとあるが現行本は矢張り恃に作つてゐる。

右河上公本には能爲章と名づけてゐる。（一）と（二）とは句法も違ひ意味も連屬しない。殊に（二）は第五十二章に殆ど同じ文句が出てゐるから、茲には（一）だけを解釋する。

莊子庚桑楚篇に南榮趎といふ人が老聃に衞生の考を尋ねた事を記してゐるが、老聃の答は次の通りである。

老子曰衞生之經、能抱一乎。能勿失乎。能無卜筮而知吉凶乎。能止乎。能已乎。能舍諸人而

求己乎。能翛然乎。能侗然乎。能兒子乎。兒子終日嗥而嗌不嗄。和之至也。終日握而手不挩、共其德也。終日視而目不瞑。偏不在外也。行不知所之。居不知所爲。與物委蛇而同其波。是衞生之經已。

右一段の中主要な部分は抱レ一勿レ失と能く兒子の如くあるべきことで、他はその心境を說明したものである。而して莊子の抱レ一勿レ失は此章の抱レ一無レ離に相當し、能兒子乎は能如二嬰兒一乎に當る。想ふに莊子の彼文と此章の初二條とは同じ訓言の異聞であらう。もしこの想像が許容されるならば此章の初は衞生の道を說いたものに相違ない。

此章中尤も難解とされてゐるのは章首の載營魄の三字である。唐の玄宗はこの解釋に困つた結果載字を哉と改めて前章の終りに移し、後の注釋家も其考に左袒した人もある。然し淮南子道應訓の引文、群書治要の老子、及景福碑等によると前章の終りは也字で結ばれてゐて更に哉字を要せない。それから楚辭の遠遊篇に「載營魄而登霞兮」といふ句がある。これ等によつて考へると秦漢以來載の字を營魄と離さずに解釋せられたもので、之を分離したのは玄宗を初めとする。此點に於て玄宗の說明は取り得ない。日本の中井履軒は營字を衍文と見て、載魄抱一を一句としてゐる。然し楚辭に載營魄の語があり、揚雄の法言には熒魂といふ熟語がある。從つて履軒翁の解釋にも從ひ兼ねる。魂魄の二字は古代の用例をあつめて考へると、魂が精神を表

はし魄は形體を示してゐるから、此章の魄も形體を意味するのであらう。營の字は熒又は榮と通用される字で、素問で榮或は營の字が水穀の精氣或は主血の陰氣、或は血色のよい事を示されてゐる。これ等によつて營の字は人の精氣を意味するものたることが想像される。淮南子俶眞訓に「人が其神を事としながら其精營を煩し、外に智識を求むるのは其神明を失ひ其宅を離れしむるものだ」といふ事を記してゐる。此語老子此章と對照すると老子の營魄は卽精營の氣と形體を意味するものかと思はれる。又莊子の在宥篇に「抱レ神以レ靜、無レ勞二女形一、無レ捨二女精一、乃可二以長生一」とある語と老子のこの章とを對比すると抱神以靜は抱一に當り、無勞女形無捨女精は載營魄に當るらしい。乃で載營魄は人の精氣を消し盡さぬ樣にし形體を勞せぬ樣につとめることで載の字は安んずる意味であらう。卽此一條の意味は人はその身體を過勞せず其精を消耗せない樣にして、靜かに神を守つて神明をしてその形體から離れぬ樣にせよといふのである。專氣とは列子天瑞篇に「在二其嬰孩一、氣專志一、和之至也」といひ、淮南子精神訓に「夫血氣能專於五臟而不外越、則胸腹充而嗜慾省矣」とあるから、嗜慾を去つて喜怒の情を制することであらう。致柔は競爭心をすてることである。嬰兒は嗜慾少なく競爭の念がないから專氣致柔能如嬰兒乎といつたのである。

滌除玄覽とは王弼の注には邪飾を滌ひ除いて極覽に至ると解してゐるが、邪飾といふ意味がこの四字の中に含まれて居ない。河上公注に玄覽を心と解釋し心を洗ひて潔靜ならしむる事だといつてゐる。河上公は玄覽を心と解した理由を說明して心は玄冥のところに居て萬事を覽知するから心を玄覽というたといつてゐる。淮南子の脩務訓に「玄鑑を心に執つて化馳神の若し」とあつて、その注に鑑は鏡だといつてゐる。是は心を鏡にたとへたもので鑑字は監とも通じ監はまた覽と同意味に用ゐられる字だから、玄覽は玄鑑と同じで心を意味するのであらう。即河上公の解釋は當を得たもので、此條の大意は心鏡の塵垢を洗ひのぞく樣に心懸けて鏡に疵瑕なからしめよといふ事であらう。

愛民治國能無以爲乎とは政治の心懸けを說いたもので、第五十七章に我無爲にして民自ら化するといつたのと同じ意味である。河上公本や現行王弼本の如く爲字を知に作るならば、それは愚民政治を敎ふるもので、老子の思想から離れて法家の思想となる。

天門は莊子によると二つの意味に用ひられてゐる。庚桑楚篇に「天門とは無有也、萬物無有に出づ」と云つた天門は玄牝の門とか衆妙の門とかいふのと同じ意で、宇宙現象の生ずる源を

指す。然るに天運篇に「其心以て然らずとなすは天門開かざるなり」といつたのは、精神作用の生ずる本源即心を指したのである。此章に天門開闔といふは後の意味で心の作用が起つたり息んだりすることを意味するのである。乃で此條の義は心が種々の事を考へて嗜慾喜怒の情を起すにあたり常に雌牝の如く柔弱安靜ならむことにつとめよとの意である。第二十八章に「其雄を知りその雌を守れば天下の谿となる」といつたのも同じ意である。

明白四達とはよく事の理を洞察して通ぜざるなきをいふ。即此條の意は荀子宥坐篇に孔子の言として引かれ居る「聰明聖知之を守るに愚を以てす」といふのと同じである。

第十一章

(一)三十輻共一轂、當其無有、車之用。(二)埏埴以爲器、當其無有、器之用。鑿戶牖以爲室、當其無有、室之用。故有之以爲利、無之以爲用。

校異 (一) 廣明幢三十を卅に作る。挺景龍碑景福碑挺に作り、陸德明釋文、開元幢挺に作る。

埏は地の八埏又は墓道の意でこゝには挺に作るがよい。然し唐以後混用されてゐる。(二)初に景龍碑は故字がない。

右河上公本には無用章と名づけられてゐる。此章「當其無有□之用」の句について王弼と河上公とは句の斷りところを異にしてゐる。王弼は無字で句をきり有字を下に屬けて「その無にあたりて□之用あり」と讀んでゐるが、河上公注には有字も上に屬してその有るなきに當つて車之用あり」と讀む。この二つの讀方のいづれが正しいか、(二)に「有の以て利たるは無の用たるを以てなり」と結んだ文に對して見ると王弼が正しく見える。然し河上公の讀方は周禮輪人の鄭玄の注に「轂以無有爲用也」とあつて、賈公彥の疏に河上公注を引いて「無有謂空虛」とあるを思ふと、この讀方は後漢の大儒鄭玄も同じであつたことが知られて輕々に見のがすことが出來ない。且つその用韻を檢すると輻有用、埴有用、牖有用と押韻してゐるから、有字は上に屬する方がよい。老子の文例を見ると、有と無有を對用したものと、有と無とを對用したものとある。即此章(二)の「有之以爲利無之以爲用」の句及び第四十章の「天下萬物生於有、有生於無」の句は有無を對用した例で、第四十三章「無有入於無間」といつたのは有に對した無有である。莊子齊物論に「以無有爲有」といひ、庚桑楚に「萬物出乎無有」といつたのも亦有

に對して無有といつた語である。總じて有に對して無有といつたのは古くて、無といつたのはやゝ後の用法らしい。此章(一)は無有で句を切つて讀めば(二)の有と無とを對用した例に反するが、(一)は有韻の文であるに對し(二)は韻がない點を考へると(一)と(二)とは別人の手に成つた語で(二)は(一)の意味を說明したのであらう。鄭玄河上公が無有を連讀したのは、未だ(二)の添竄されない時代から相傳の讀方で王弼が無字で句を斷つたのは既に(二)が加へられた本によつた爲であるかも知れぬ。

三十本の輻が一つの轂に湊まつて車輪を作るが、車輪は轂の中が空であるから回轉する。粘土をうちかためて器を作るが、器も中が空であるから物を容れ得る。窓をあけて室を作るが、室も內が空であるから室の用をなす。故に總ての利は無の用から起る。

第十二章

五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁田獵令人發狂、難得之貨令人行妨、是以聖人爲腹、不爲目、故去彼取此、

校異 此章諸本皆同じ。

右河上公本には檢欲章と名づけてゐるが、その句法によつて區別すると三段に分つことが出來る。

（一）は盲、聾、爽、狂、妨の字で韻をふんで古い道家言たることは疑ひないが、これと酷似した文が莊子の天地篇と淮南子の精神訓とにあつて而も双方とも老子の言としてゐぬから、果して老子の口から出たか否かは疑はしい。試に莊子と淮南子との文を錄して比較考究の資料としよう。

（莊子天地）

且夫失性有五、
一曰、五色亂目、使目不明、
二曰、五聲亂耳、使耳不聰、
三曰、五臭薰鼻、困慢中顙、
四曰、五味濁口、使口厲爽、
五曰、趣舍滑心、使性飛揚、

（淮南子精神訓）

五色亂目、使目不明、
五聲譁耳、使耳不聰、
五味亂口、使口爽傷、
趣舍滑心、使行飛揚、

此五者皆性之害也　　此四者天下之所養性也然皆人累也

これを老子に比較すると勿論同一ではないが其思想と文章の構造は酷似してゐる。就中初の二句は聲色度を過せば目くらみ耳聾するをいふ。第三句五味人口を爽せしむの爽の字は莊子には厲爽となり、淮南には爽傷に作つてゐるから爽の字は口の病を意味した語であらうが明かでない。馳騁田獵の一條は趣舍滑心に相當するもので人間適意の樂事かへりて心を滑すといふ意味であらう。以上四條は老莊淮南に共通な箇條であるが、最後の難得之貨令人行妨の一條は老子にのみある所である。行妨とは「行いて妨害になる」といふ意味で左傳にいふ所「小人璧を いだけば以て鄉を越ゆべからず」とは此一條の意にあたつてゐる。

（二）腹は物を受け入れるもの目は外物に徇つて動くもの、故に爲腹とは腹を實たして氣を守ること、不爲目とは嗜欲外誘に迷されないことをいふのである。

（三）故去彼取此の彼とは五色以下の三十餘字此とは爲腹不爲目の五字をさすのであらう。

第十三章

（一）寵辱若驚、貴大患若身、何謂寵辱若驚、寵爲上、辱爲下、得之若

驚、失之若驚、是謂寵辱若驚、何謂貴大患若身、吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身、吾有何患、(三)故貴以身爲天下、乃可以寄天下、愛以身爲天下、乃可以託天下、

校異 (一) 何謂寵辱若驚の句陸德明の釋文によると河上公本は若驚の二字を缺くといふ。景龍碑景福碑ともに此二字がないのは河上公本であるからであらう。寵爲上辱爲下の六字景龍碑にはたゞ辱爲下の三字だけしかないが景福碑には六字皆ある。明世德堂刊河上公本は景龍碑と一致するが、日本に傳つた舊鈔河上公本は景福碑と同じである。注文を精しく讀むと河上公本の本來の形は景福碑及本邦所傳舊鈔本と同じであつたに相違ない。傅奕本と王弼本とは寵爲下に作つてゐるが、釋文に王本と河上本の異同を注してゐない事と王注の意とを考へると、王弼本ももとは必ず寵爲上辱爲下に作つたに相違ない。大患者景龍碑には者字がない。爲吾有身及吾無身景龍碑兩吾の字を我に作る。何患の下景福碑及河上本は乎字がある。

(二) 貴以身爲天下景龍碑貴身於天下に作る。乃可以託天下景龍碑若可託天下に作り景福碑は則可以寄天下に作る。淮南子の引文は乃を焉に作る。焉字も亦スナハチと讀むべきであ

る。現行王弼本は若可寄天下に成つてゐるが、注文と合はないから改めた。愛以身云々の句の異同は上の句に應じて知ることが出來る。

右河上公本には厭恥章と題して居るが當らない。その宗旨は第三節にある。(一)は古來の註釋家が二句を竝べて讀んでゐるが、この章の本意は後の句を始の句の原因若しくは理由として「寵辱驚くが如くなるは大患を貴ぶこと身の如くなれば也」と讀むべきである。若驚の二字は楚語に闔閭聞二一善一若レ驚、得二一士一若レ賞とある若驚と同じ意味で恟々としてゐる意である。即世間の人が寵榮、屈辱に對していつもビクく〳〵して安けき心のないのはそも〳〵何の爲かといふと大患を貴ぶからである。大患とは名譽貨財をさすのである。第四十四章に「名と身といづれが親しき、身と貨といづれが多き」といつた樣に世人は名譽貨財を我身より貴きものゝ如く考へて種々の禍患をひき起しつゝあるものである。名譽貨財を貴びすぎるから寵辱の爲に苦勞をするのである。

(二) 然し名譽も貨財も我が身あつてのもの種子で、身がなくては名譽も財產もいつたものでない。從て名や貨にともなふ幸福も禍患もないわけである。乃で本當は身が尤も大切な事を知る人はものゝわかつた人である。

(三) 乃で自分の身體を天下を治めることよりも重しと考へ、愛惜する樣な人で初めて天下の政治を寄託することが出來るものである。

この章中尤も重要なる部分は最後の一節である。この一節は莊子の在宥篇に見えてゐる。其文は次の如くである。

君子不レ得レ已而臨二莅天下一、莫レ若二無爲一、無爲也而後安二性命之情一、故貴二以レ身於爲二天下一、則可二以託二天下一、愛二以レ身於爲二天下一、則可二以寄二天下一

兩の身字の下に於字ある景龍碑と一致して、その意味一層明瞭になつてゐる。然しこの考へ方は老子學說の本來の面目であるか、否やは問題である。楊朱が一毫を拔いて天下の爲にすることは敢て爲さずといつた思想に近い點から推測すると、この一章も或は楊朱學徒の間に傳誦された老子の言であるかも知れぬ。

第十四章

(一)視レ之不レ見、名曰レ夷。聽レ之不レ聞、名曰レ希。搏レ之不レ得、名曰レ微。此三者

不レ可二致詰一、故混而爲レ一。(二)其上不レ皦、其下不レ昧、繩々不レ可レ名、復二歸於無物一、是謂二無狀之狀、無物之象一、是謂二惚恍一。(三)迎レ之不レ見二其首一、隨レ之不レ見二其後一、執二古之道一以御二今之有一、能知二古始一、是謂二道紀一。

攷異 其下不昧景龍碑其字を在に作る。繩々の下景福碑に兮字がある。是謂惚恍景龍碑景福碑開元幢忽恍に作る。世德堂本謂字爲に作る。焦氏考異引くところ龍興碑には此四字なしといふ。景龍碑に迎之隨之の二之字はなく、以御の御字を語に作り、能知を以知に作り、道紀を道已に作る。

右河上公本には玄賛章と名づけて居るが、大體章意に當つてゐる。然し全章を玩味すると略三段に區別することが出來て同じ樣な意味がくりかへしのべられてゐる。

(一) 列子天瑞篇に現象の生起を說明するために太易太初太始太素の四を說いて太初は氣の始、太始は形の始、太素は質の始、而して太易は氣形質が具はつて未だ離れない狀態にあるのだから渾淪ともいふ(渾淪は混沌と同じ意味である)。この渾淪は之を視て見えず、之を聽て聞

えず、之に循て得べからざるものだから易といふと述べてゐる。老子此章の初めの段は列子の大易の説明とよく似てゐる。視之不見名曰夷の夷の字は太易の易字と同じ意である。古、夷と易とは同じ音であつたから通用された例が多い。列子には「易とは形埒なきなり」と云つてゐるが、夷或は易は人間の眼で見えないもの即視覺を超越した狀態をいふのである。聽之不聞名曰希の希は第四十一章に大音希聲といひ、第二十三章に希言は自然といつた希と同じく聽覺を超越した狀態を示す字である。搏之不得名曰微の微の字は微細の意味でこゝでは人間の觸覺を超越しものを示してゐる。老子の道は視覺聽覺觸覺を超越した存在であつて、この夷希微の三屬性を兼ね具てゐる一物であるから此三者不可致詰故混而爲一といつたのである。致詰はきはめる意、故は固假借字、夷希微の三屬性が固より混然一となつて具はり居る意。

（一） 既に述べた如く道は人間の感覺知識を超越した存在であるから道その物が知何なるものか明瞭でない。然しこの道から出た現象は吾人の眼前に横はつて其存在を否定し得ない。乃で其上不皦、其下不昧といつたのである。其上とは現象の根本たる道で其下は現象を指す。此二句は莊子齊物論に「可形已信而不見其形」（あらはるゝ所はハナハダ信にしてその形を見ず）といふと同じ意で本體は認識を超越するもそれから起る現象は歴然として存在する意である。繩々は萬物が生々して已まない貌を形容した語である。即現象の生々は綿々としてつゞいてゐ

るがその本體は認識を超越したものであるから言語で言ひあらはすことが出來ぬ。強て説明せんとすれば無物といふより外ない。乃で繩々不可名、復歸於無物といつたのである。然し無物とはいふものゝ物がないのではない。乃で又無狀之狀無物之象といつたのである。所謂無狀の狀とは人間の感覺を超越した狀を意味し、無物之象とは人間の知識を超越した概念といふ意である。韓非子の解老篇に巧に之を説明して次の如く云つてゐる。曰く「象は南方に産する大獸で、支那の人は生きた象を見た人は殆どない。たゞ死んだ象の骨を見其繒を見て生きた象を想像してゐる。乃で人々が意想するもの即概念を象と呼ぶ樣に成つた。今道は聞見し得ないものであるけれども、それから現れた現象は見聞することが出來る。乃で、この現象に對する言葉で強ひて其形狀を説明せんとして無狀之狀無物之象といつたのだ」と。是謂惚恍とは前二句の意味を肯定的の語で云ひあらはしたのである。

（三） は道が時間的恒久なことをあらはしたのである。迎之不見其首とは過去に於て無限であることをのべたもので、隨之不見其後とは將來に於ても無限であるをいふ。執古之道以御今之有云々は、執は把握の意、御は語の假借、道本來の面目を把握せんとするには先づ今の有即ち現象について語つてその古始（本源）に溯ることが、道を理解する要領だといふ意であらう。

右之節の内第一節は夷希微に韻をふみ、後韻を轉じて詰一と押韻してゐる。第二節は昧物韻、狀象亦別に一韻をなしてゐる。第三節は首後一韻、恍道有始紀乂一韻、全章皆有韻の文で老子五千言中出色の字文である。

第十五章

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識、夫唯不可識、故强爲之容、豫兮若冬涉川、猶兮若畏四鄰、儼兮其若客、渙兮若冰之將釋、敦兮其若樸、曠兮其若谷、混兮其若濁、孰能濁以靜之徐清、孰能安以動之徐生、保此道者不欲盈、夫唯不盈、故能不新成、

校異 (一) 爲士者士字傅奕本道に作り諸本皆士に作る。然し河上公注に此字を注して「得道之君を謂ふ也」といひ、王弼注に「上德の人云々」といつてゐるのを考へると、河上公本と王弼本は上字に作つたかと思はれる。豫兮河上公本に與兮に作る、豫と與とは音が同じ爲め通用されるのである。兮字現行王弼本にこのところだけ焉字に成つて居るが誤であらう。景龍碑開元幢には此章皆兮字がなく兮の字の下其字もない。若客現行王弼本若容に作る、客と容と形が似てゐる爲め誤つたのであらう。冰之將釋の之字景龍碑にない。曠兮其若谷混兮其若濁の二句景龍碑には混若濁曠若谷に作る。景福碑は句の順序は景龍碑と同じであるが兮字其字が加はつて居る。

(二) 孰能濁以靜之徐生、傅奕本孰能濁以澂靖之而徐清に作り、廣明幢は孰能濁以止靜之徐清に作る。安以動之徐生、傅奕本安以久動之而生に作り、廣明幢は以久動之以□□に作る。注文から想像すると廣明幢が尤もよく河上公本の舊形を傳へて居るらしいが、王弼本は右の本文の如くであつたに相違ない。現行王弼本動字の上に缺字があるのは、河上公本によりて添竄されたものらしい。景龍碑は王弼本と同じであるが安字の上に孰能の二字がない。

右河上公本には顯德章と名けてゐる。その内第三節は前にも述べた通り此章につゞかぬ文句で第九章に移すべきである。

(一) の初二句は古の明君主はその德微妙深遠で名狀することが出來ないといふ意、その德を强ひて言ひあらはさんとすれば次の如くいふより外はない。

豫兮若冬涉川、此句の豫字は次の句の猶の字と合せて猶豫といふ熟語になる、猶豫は狐疑と

並べ使はれて決斷のつかぬ有樣を形容する語である。舊來の解釋では猶は犬の一種で犬が主人と外出するときには豫め先に走つてまた主人を迎へにもどる。そこで往きつもどりつして心の定らぬのを猶豫といふのだといふ。又一說に猶は木攀りの巧な動物で人聲がすると豫め木に緣つて上下するから起つた熟語だともいふ。然しこれは牽强附會な說明である。その用例を調べて見ると猶豫は或は猶與とかゝれ或は容與とかゝれ、又此章の如く猶と與とを離して使ふ例も少くない。猶も與も同じ樣な音で一字だけでも遲疑の意をあらはす語である。從つてこゝの猶兮豫兮もともに決心のつかぬ狀態を表した語である。多の川寒くて渡らむとするも渡りかねるものであるから豫兮若冬涉川といつて、古の明君が躁進を憚つた意を表したのである。

豫兮若畏四鄰といふのは四鄰から攻めたてられた君主が趣向すべき道を知らない狀態をかりて、古の聖主が輕々しく自れの才能を炫露しない事をいつたのである。

儼兮其若客とは威儀整つて輕擧なきをいひ、渙兮若冰之將釋とは萬事に執着のなきをいひ、敦兮其若樸とは質朴で飾りのないことをいひ、曠其兮若谷とは心寬くよく淸濁を併せのむ氣象をいひあらはしたのである。而して谿谷が衆流を受ける樣な雅量ある人は一見濁水の如く感ぜられるものだから次に混兮其若濁といつたのであらう。

(二) 凡そ水の濁つたのは之を靜かにさへすれば自然に澄むものであるが、よく萬事を靜かにして澄し得る人は微妙玄通の德ある君主ならでは出來ぬ事である。靜かにするといつて、凡ての活動を阻止してはならぬ、安らけく動かして道の生生作用を滅却せぬ樣に心懸くべきである。然しこれまた微妙玄通の德を具へた人でなければ出來ぬ仕事である。

以上(一)(二)節は通容隔句一韻、川隣一韻、客釋樸谷濁一韻、淸生一韻で老子五千言中古色のある文であるが(三)は意味の連屬が惡く錯簡であらう。

第十六章

(一)致虛極、守靜篤、萬物竝作、吾以觀其復。(二)夫物芸芸、各歸其根、歸根曰靜、靜謂復命、復命曰常、知常曰明、不知常妄作凶、知常容、容乃公、公乃王、王乃天、天乃道、道乃久、沒身不殆。

校異 (一) 致、河上公本至に作る靜傅奕本靖に作る下皆同じ。其復、現行王弼本に其字がない。然し注文によると原本は其字があつたに相違ない。淮南道應訓引文景龍碑敦煌本開元幢河上

公本傅奕本皆其字がある。

（二）夫物傅奕本凡物に作る。芸芸傅奕本跫々に作り景龍碑敦煌本云々に作る。莊子在宥篇にも萬物云々の語がある。各歸二字の間に現行王弼本に復の字があるは衍文、靜謂復命の靜字王弼本是に作る、恐らく誤りであらう。妄作景龍碑敦煌本忘作に作る。妄或は忘は盲字の假借である。容乃公の乃字景龍碑と敦煌本には能に作るが意味は變りない。公乃王の王字敦煌本と焦弱侯引碑本生に作る。韻から見れば生に作つた方がよいが、河上公本王弼本は夙に王に作つたらしい。

右河上公本には歸根章と名づけてゐるが、全章の趣意は歸根といふことでなくて守靜といふ事である。

（一）致虛極守靜篤の二句は守靜の方法として致虛が尤もよい事を說いたもので、虛を致すこと極れば靜を守ること篤しと讀むべきである。虛を致すとは私欲を去ることで欲がなければ心は靜かに成つて亂れないものだから、先づ虛を致すことから初めて守靜に進むべきである。然らば老子は何故に守靜をそれ程重要視したか。それは萬物並作吾以觀其復からである。吾とは老子自らをいふ、老子はこの宇宙間には萬物が生々して變化息むときもないが、然し終極は

靜に復るものである。人も萬物の一たる以上その終極は靜にかへるべき原則にもれぬものだと見たから靜を守るといふ事を敎へたのである。

（二）は萬物竝作して靜に歸るといふ言を承けて之を詳說したに過ぎない。

夫物芸芸各歸其根、芸は香艸の名で叉草木の繁茂する狀態を形容するときに使はれるから、此に芸々といつたのは前の萬物竝作の意味であらう。殊更に作字をさけて芸々といつたのは後の句に其根に歸るといふ根字に對して艸木に緣のある字を使つたのである。河上公注に芸々とは華葉盛也、各歸其根とは萬物枯落して其根にかへり更に生ぜざるなき也、といつたのはよく此二句の意を說明してゐる。一說に芸々は云々と同じ意味で云々は運旋の義、萬物が生じて壯大し壯大して老衰して枯死する經路を示したといふ。此說でも通ずるが根字に對して見ると芸々が正字で云云は假借らしい。從つて河上公注が尤も當を得てゐる。歸根曰靜の靜は動に對する語で、道家では現象界の萬物は動いて息む時がないが、道は靜なるものと考へたのである。莊子天道篇に夫れ虛靜恬淡寂寞無爲は萬物の本也といひ、韓非子揚權篇に虛靜無爲は道の情也といひ、淮南子原道訓に人生れて靜なるは情也といつたのは皆道家者流の考へで、靜を道の屬性と考へてゐる證據である。而して淮南子原道訓に人生れて靜なるは「天之性也」といつたのは道から現出した人間の本性も亦靜だといつたのである。既に靜を道の屬性とし道から賦命さ

れた人の本性も靜だとすれば、人が動をさけて靜を守ることはその賦命に順ふ事になる。乃で靜謂復命といつたのである。さて萬物が靜に歸るべきことは道からいへば萬物に對する賦命即命令であるが、萬物からいへば逃るべからざる必至の運命である。既に必至の運命だとすれば昨日は行はれて今日は行はれないとか、或は甲の物には行はれるが乙には行はれないといふ樣な除外例のあるべき筈はない。常に何處にも行はれる普遍恒久の道である。乃で復命曰常といつたのである。この常道を知る人は眞に聰明な人といふべく、之に反して常道を知らず盲動する人は不吉である。乃で知常曰明、不知常妄作凶といつたのである。妄作の妄は上の明字に對する詞で盲字の假借であらう。

知常容以下は常道を知る效化を說く、常とは萬物に普遍な法則であるから、此法則の下に包容されない物はない。而して此普遍な法則は公平な筈である。乃で知常容容乃公といふ事が出來る。公乃王王乃天の二の王字は舊說では王を歸往の意と解してゐるが、牽强の嫌ひがある。且つ上下の句皆有韻の文であるのにこの二句のみは韻がない。敦煌本には王の字を生に作つて居る。而して生に作れば生と天とは叶韻するから王は生の誤であらう。道は萬物を生々するものであるから、常道に順つて靜を守ることは萬物の生成を助くることになる故に容乃生、生乃天、天乃道といひ得る。而し道は恒久なものであるから道乃久沒身不殆といふことも出來る。

此一章には極篤作復一韻、芸根一韻、靜命一韻、常明一韻、凶容公一韻、生天一韻、道久殆一韻、全章有韻の文で老子五千言中古い部分であるに相違ない。その思想から論じても虛を貴ぶことは列子の中心思想であり、淸を貴ぶことは關尹の根本主張である。列子關尹は老子と殆ど同一の思想を鼓吹したものであるから、よし老子自身の筆に成つたものでなくとも老子に近い思想たるは疑ひない。

此章中特に注意すべきは復命といふ事が說かれて居ることである。命は即賦命で人よりいへば性である。乃で莊子の繕性篇はこの復命の流れを汲んで復性復初の說を述べて居る。而して莊子復性說は宋儒の性理學に深き關係を有つてゐる。

第十七章

太上下知有之、其次親而譽之、其次畏之、其次侮之、(二)信不足、焉有不信焉、悠兮其貴言、功成事遂、百姓皆謂我自然、

校異 (一) 下知の下、吳澄本不字に作り、焦氏は吳本に依てゐるが、唐碑皆下に作り、韓非

子難三も亦下智有之に作る。吳澄本非、親而譽之、河上公本而字之に作る。開元碑景福碑同、景龍碑親之豫之に作る。豫と譽と古字相通ずる。傅奕本親之の下其次の二字あり。其次侮之景龍碑開元幢侮之の上其次の兩字がない。

（二）焉有不信焉景龍碑開元幢兩焉字なし、現行河上公本及景福碑句末に焉字なく王弼本は兩焉字がある。悠兮河上公本景福碑猶兮に作り、傅奕本また猶兮に作り句末哉字あり、敦煌本開元幢はたゞ猶字に作つて兮字がない。景龍碑は由に作つてまた兮字もない。悠猶由古字相通ずる。功成事遂、景龍碑成功事遂に作り、敦煌本成功遂事に作る。謂我自然傅奕本曰我不然に作る、非。

右河上公本に淳風章と名づけてゐる。

（一）太上の解釋に二說ある。一は太古の世といふ意味に解する說で、鄭玄の禮記注及此章河上公注は之に從つてゐる。二は最上君主の意味で此章王弼の注がそれである。愼到の雜民篇に大君は太上也といひ韓非子難三にこの句を解釋して「太上下智有之とは此れ太上の下民は說ぶなきをいふ也。上君の民は利害なし、說くに近きを悅ばせ遠きを來すを以てするも亦舍くべきのみ」といつてゐるのを見ると、王弼の解釋が當つてゐるらしい。即此句の意味は明君は無

爲にして化するから、民に唯君主のあることを知るのみで、別に之を德としてゐないといふ事である。其次親而譽之とは民に仁惠を施すときは民は上を親しみ之を譽めるが、それは太上の次に位する。其次畏之とは民を治めるに德を以てせず刑罰を以てするときは、民は上を畏れる、これは第三等の政治である。而して民が刑を畏れて服する間はまだよいが、民智がすゝむと刑罰を免れることを考へ上を侮る樣になる。これが尤も拙な政治であるといふ意味である。

（二）信不足、焉有不信の焉字は則と同じ意味でスナハチと讀むべきである。此二句は上の其次侮之の句を承けて、民が上を侮るに至るのは上に信誠が足らぬから信用されなくなつたのであるといふ意、悠兮其貴言の句林希逸の口義では上二句をつゞけて、旣に民の信用もないのに安然として、言を貴び號令敎詔を出してゐるは淺間しといふ意に解してゐるが、玄宗注では言字を德敎の言と解釋して民に親しまれ譽められるのは德敎の言猶存するからだと注釋してゐる。而して河上公注では此句を下二句とつゞけて、太上の政治は言を尊重して輕々しく政令を出さぬ意味に注してゐる。功成事遂云々の句は、いづれの注釋家も太上の政治を述べたものとして解釋し、太上政治では不言の敎を重ずるから、ことゞ〳〵しく號令は出さずとも無爲にして化し其結果人民は君上の德を知らず、皆自然にかくあるのだと考へるといふ意に取つてゐる。

右の內第一節は儒敎の德治主義と法家の法治主義とをおとしめて、無爲の治を主張したもの

で、此の如き說は儒敎や法家が盛を鳴らした後に起るべき思想であるから、恐らく老子の言ではあるまい。第二節は古來の注釋家皆第一節と連絡せるものとして解釋してゐるが、首肯しがたきかどが多い。その上信不足焉有不信焉の一句は第二十三章の結末にも出てゐて、この章の悠兮以下の句も彼章に移した方が自然のやうに思はれる。

第十八章

(一)大道廢有仁義、智慧出有大僞、六親不和有孝慈、國家昏亂有忠臣、

校異 景龍碑仁字人に作り、慧字惠に作り、慈字子に作る、恐らくは非。敦煌本、開元幢右に同じ、河上公本廣明幢每句有字の上焉字がある。傅奕本上二句焉字があつて下二句はなく、忠字貞に作る。

第十九章

(一)絕聖棄智民利百倍、絕仁棄義民復孝慈、絕巧棄利盜賊無有、(二)此三者以爲文不足、故令有所屬、(三)見素抱樸、少私寡欲、絕學無憂、

校異 景龍碑仁字民に作る唐諱を避けたのである。此三者の下以字なし。敦煌本また景龍碑と同じ、但三者を三言に作る點異なる。傅奕本智字知に作る。

右第十八十九兩章、河上公本には第十八章を俗薄章と呼び、第十九章を還淳章と名づけてゐるが、思想から見ても文勢から考へても連屬した一章と見るがよい。元の吳澄が定めた定本には第十七章から第十九章までを一章としてゐるが、確かに見識のある見方である。第十七章も此二章と同じ派の思想だと見られるが、此二章ほど不可分の關係はないから今は此二章をつゞけて攷へる。又第十九章の末においた「絕學无憂」の四字は現行本皆第二十章の首にあるが、これは其句法から見ても其思想から見ても此章の結末にあるべきだと思へるから、姚姬傳の說に從つて此に移した。莊子天下篇によると到愼は知をすて己を去ることを主張して天下の人が賢者を尙ぶを笑ひ、天下大聖とするところを非難したといひ、荀子解蔽篇の楊倞の注によると愼到が聖賢を排斥したのは法を重くする爲で、法が明かであれば天下は賢人がなくとも治まるが、法が明かでないと聖賢があつても治らぬといふたのだといつてゐるが、それ等の主張は此

二章に全然一致するから此等は老聃の言でなくて愼到說であらう。而して（一）の末句が意林に引かれた愼子の語と一致するのは右の推測に確かな證據を與へるものといへる。

却說此二章の意は（一）儒家は仁義をすゝめるが、それは大道の廢れた結果現れた敎で完全な物でない。儒家の徒は聖知を尙ぶが人間は知慧が出來れば相僞り相あざむくもので、知慧は尙ぶべきものでなく寧ろ咒ふべきものである。又儒家は忠孝を說くが忠孝は國が亂れ家が不和になつたとき現れるもの、かゝるものの現れるのは寧ろ不祥事である。忠も孝もなくて一家が和樂し一國が安泰であることが望ましい。乃で（二）聖知を絕ちすつれば民の利は百倍し仁義の敎をすてゝ自然にまかすれば即ち孝慈が行はれる。又人の智巧をすて利害をはなれば盜賊も起らぬ。（三）從つて聖知仁義巧利の三者不必要な物である。之が必要とせられるのは法律即文が足らぬ爲である。此に文不足といつた文の字は荀子非十二子篇に愼到が終日文典を口にしたといふ文典の意で、文典は即法典を指すのである。法典さへ完備すれば聖知仁義巧利にたよる必要はなくなる。（四）故に世を治める人は仁義をすてゝ民が素樸にかへる樣にし、巧利を絕ちて少私寡欲に安んずる樣に導き、聖知をすてゝ學を絕ち憂をなくする樣に敎ふべきである。

第二十章

唯(一)之與阿相去幾何、善之與惡相去何若、人之所畏不可不畏、荒兮其未央哉、衆人熙熙(二)如享太牢、如春登臺、我獨廓兮其未兆、如嬰兒上未孩、儽儽兮若無所歸、衆人皆有餘、而我獨若遺、我愚人之心也哉、沌沌兮、俗人昭昭、我獨昏昏、俗人察察、我獨悶悶、澹兮其若海、飂兮若無所止、衆人皆有以、而我獨頑似鄙、我獨異於人而貴食母

校異 （一）何若現行王弼本何若二字誤倒今王注によつて改正した。荒兮其未央哉景龍碑敦煌本及開元碑には兮字と哉字とがない。荒字景龍碑忙に作り敦煌本莽に作る。皆荒字の假借荒或は沇に作り或は茫に作り或は煌に作る、並に廣遠の貌。（二）如享釋文に河上本饗に作るといふが現行諸本皆享に作り敦煌本のみ享に作る、享享饗三字古義同じ。如春登臺坊本多く加登春臺に作る。畢沅は是れ明正統十年道藏玄宗注本以來の誤といふも、杜臺卿玉燭寶典所引老子既に誤り、文選李善注も亦誤る。但し王弼本も河上公本も皆誤倒せないことは注文によつて明

かである。唐碑は皆春登臺と作る。但景龍碑敦煌本此章如字悉く若に作る。廓兮釋文に王弼本廓に作り河上公本泊に作るといふも、現行河上本怕に作り王弼本却て泊に作る。然し王注に廓字を存すれば舊本廓に作るを知る。景龍碑敦煌本廓字魄に作り、其下兮字がない。蓋し怕泊魄廓古音同じくして通用したのであらう。怕は其正字他の三字は假借字である。嬰兒之未咳景龍碑敦煌本開元幢兒下之字なし、釋文咳一本孩に作るといふ、今本皆孩に作る。孩は咳の古文。儽々兮傅奕本儡々兮に作り兮下其不足の三字あり、河上公本乘々兮に作り、景龍碑敦煌本開元幢河上本に同じくして兮の字なし。儽々は垂貌轉じて疲勞の狀を形容する語、儡々はその假借字、乘々恐らくは垂々の誤。而我獨頑遺景龍碑敦煌本開元幢傅奕本而字なし。心也哉景龍碑敦煌本開元幢也哉の二字なし。沌々兮釋文に又怕に作るとある。景龍碑敦煌本開元幢純々に作る。沌怕純は皆惷字の假借で無智の貌。(三) 昭々釋文昭一本照に作るといふ。敦煌本照々に作る。照は動詞に使はれ昭は副詞に使はるゝ字なればこのところ昭に作るを是とする。但晉人は昭を照と書す、王羲之法帖皆然り。敦煌本照に作るは恐らく晉人の遺習を襲うたのであらう。澹兮其若海、河上公本と廣明幢とは澹を忽に作り敦煌本開元幢亦同じ。但其下に兮其の二字を闕く。傅奕本淡兮に作り、景龍碑淡に作る。開元幢海を晦に作る澹は安靜の貌にして淡は味なき意、このところ淡兮に作るは澹の借字、晦亦海の假借忽兮は迷

へる貌、上を忽に作れば下を晦に作るが穩當である。飂兮若無所止河上公本景龍碑、兮を漂に作り、傅奕本飄に作り、開元幢敦煌本寂に作る。釋文によれば梁簡文帝注本は飄に作り、河上公本淵に作るとあるが今淵に作る本を見ない。止字の上現行王弼本所字なし、注文によるとその原本は所字があつたらしい。皆有以景龍碑敦煌本已に作る。而我獨頑似鄙景龍碑敦煌本而字なく、傅奕本似字且に作る。似字以と通用せられて而字又は且字と同義。貴食母開元幢貴求食於母に作る。これ玄宗の改定するところ、よるに足らぬ。

右河上公本には異俗章と題する、大體章旨を得た名である。

(一) の首に絶學無憂の四字があつたが、それは上章の終りに移した。

唯と阿とはともに應答の語で唯は鄭重な言葉、阿は不作法な言葉である。鄭重な詞を使ふと不作法な語を使ふとどれほど相違があらうか、善と惡とは如何程へだたりがあるだらうか、尤も世人の畏るゝところは我も畏れてつゝしまねばならぬが、さりとて煩雜なよしあしの苦勞をするとすれば、茫としてはてしのない話であるまいか。我れは寧ろ世俗と離れて己がじし振舞つて行かう。

(二) 熙々は嬉々に同じく喜ぶ意、太牢を享くるとは滋味を貪る心。春臺にのぼるは氣を舒

暢する所以、廓兮は怕兮と同じく安靜で情欲のなき形容、嬰兒之未咳は未だ笑ひも出來ぬ赤ん坊である。世人は嬉々として太牢の滋味をよろこぶごとく、又春の臺に游晏するごとく、嗜欲の樂しみを求めるが、我れは靜かに欲念の兆さゞる樣つとめて笑ひも出來ぬ赤ん坊の如く向ふべき方角も知らぬ。衆くの人は意欲胸にあふれて餘りあれど、我は無爲無欲にして物遺れせる心地、さてさて我れは愚かもの無分別な事よ。

(三) 昭々察々はさかしくてぬけめのないをいふ。昏々悶々はともにくらく愚なるをいふ。有以とは多才多能の意、頑似鄙は融通きかず花やかならぬをいふ。食母は乳母と同じ天下の母の乳をのむといふ意にて、自然に隨順するをいふのであらう。殊更に食母といつたのは前の嬰兒の語に對するからである。

俗人はさかしく振るまひてぬけめないが我は愚か、愚かな中にも大海原の面の靜かなる如く又行く手定めずたゞよふに似た安靜と自由とがある。衆人はさかしげに働くが我は鄙びて融通もきかず、かく世の人とかけはなれて殊なるは、我はたゞ自然の懷に抱かれて天地の母の乳呑むを希ふがためである。

この章(一)阿と何、惡と若、畏と畏、荒と央と、韻をふみ、(二)熙と臺、孩と歸と遺と韻を合せ(三)昏と悶、止と以と鄙と母と押韻して賦の體に似てゐる。

第二十一章

(一)孔德之容、惟道是從、道之爲物、惟恍惟惚、恍兮惚兮、其中有物、惚兮恍兮、其中有象、窈兮冥兮、其中有精、其精甚眞、其中有信、(自古及今、其名不去、以閱衆甫、吾何以知衆甫之狀哉、以此)

(三)故美言可以市尊、美行可以加人 以上十三字舊本在第六十二章

校異 (一) 恍兮惚兮以下四句河上公本忽兮恍兮其中有象恍兮忽兮其中有物に作り、景龍碑忽恍中有象恍忽中有物二句に作り、敦煌本惚恍中有物、惚慌中有像に作る。現存王弼本は河上公本と似て居るが其注文は「故曰恍兮惚兮惚兮恍兮其中有象也」と云ふから、王弼原本の句の順序は今訂正した如くであつたらう。敦煌本句法は景龍碑に同じであるが其順序は王弼本に同じである。俞樾曰く、惚兮恍兮等の二句は恍兮惚兮以下二句の下にあるべし、其故は上に惟恍惟惚とあればその下直ちに恍兮惚兮の句を以て承くべく、且その押韻先づ道之爲物の

句より以下四句物惚惚物と韻をふみ惚兮恍兮其中有象に至つて韻を變ずる也、王弼注文によればそのよる所の經文恍兮惚兮等の二句を前に置けるを知る」と。今敦煌本の句の順序を見れば、徒兪樾の說信すべきを覺える。恍恍慌通用、惚忽通用、惟字また唯に作る。窈兮冥兮其中の六字景龍碑敦煌本ともに窈冥中の三字に作る。(二) 衆甫敦煌本終甫に作る。衆終古通用、詩周頌振鷺篇に永終譽とあるを漢書崔駰傳に引きて永衆譽に作る、是れその證。狀哉河上公本景龍碑狀字然に作る。廣明幢景福碑も亦同じく且然上之字がない。

右一、二兩節を河上公本には虛心章と名づく。然し第二節の其名の兩字が第一節に連屬しない。淮南道應訓に「老子曰窈兮冥兮其中有精、其精甚眞、其中有信、故美言可以市尊、美行可以加」とある。故美言等の語は今の老子では六十二章にあるが、彼章に於てこの二句は意味がつゞかぬ。想ふに漢時代の經文は其中有信の下にこの二句があつたのであらう。而して第二節の六句は第二十五章に移すが適當である。乃で第一節に美言云々の二句をつゞけて解釋を試る。尤も美言云々の二句は淮南子の人間訓にも出て居て、そこには只君子曰として擧げてゐるから、これ果して老聃の言なるか又後人の敷衍した語であるか明瞭でない。

(一) 孔德之容惟道惟從とあるは大德者の行はひたすら道に從ふといふ意味である。容の字は形容の意味にも用ゐられるがこゝでは搭の字の假借で動作と解するがよい。孟子に動容周旋皆中禮といつた動容も動搭の假借で擧動といふ意味で今と同じである。道之爲物已下の七句は孔德者の從ふ道は如何なるものなるかを說明したもので、第十四章にもある樣に道は眼にも見えず耳にも聞えず手にも觸れる事の出來ない物であるから、恍惚とか窈冥とか形容すべきものである。恍惚窈冥は覺知せられないといふ意味である。恍惚窈冥といつても何もないのでない。人間の認識を超越した法象と精氣とを具有した一物がある。その精氣は至つて實眞なもので、それから現はれる諸現象には一點の欺もなく誠信な物である。乃で其精甚眞其中有信といつたのである。例へば柳綠に花紅に春は榮えて秋に衰へて期節を過たないのは、この誠信の現れた所であらう。

(三) 孔德者の擧動はこの道の誠信な點を學ぶものであるから、自ら人にも信用される。これを故美言以て尊を市るべく美行以て人に加ふべしといつたのである。

第二十二章

(一)曲則全、枉則正、窪則盈、敝則新、(二)少則得、多則惑、是以聖人抱一、爲天下式。(三)不自見故明、不自是故彰、不自伐故有功、不自矜故長、(四)〔夫唯不爭故天下莫能與之爭、古之所謂曲則全者、豈虛言哉、(五)誠全而歸之。〕

校異 (一) 枉則正の正字諸本直に作る。唯淮南子道應訓引老子及傅奕本景龍碑正に作る。第一節四句正盈新と韻をふんでゐるから、正が正しいであらう。但し注文から推測すると河上公本は直に作つたに用違ないが、王弼本は正であつたかも知れぬ。窪字道藏の河上公本には窊に作つて、顧歡本には洿に作つたと釋文に見えてゐる。窊はひくき凹んだ土地の意味で窪と同じ義である。洿は濁水流れざる意で亦濕地をいふのである。いづれの字に隨つても意味は變りはない。蔽字景龍碑及河上公本には弊と成つてゐて傅奕本には敝に作つてゐる。今は釋文に從つた。

(二) は得惑式と韻をふんで第三句をふみ落してゐる。惑の字景龍碑に或に作つて、抱字傅奕本に褒に作つてゐる。

(三) は明彰功長と押韻して之と同じ樣な句が第二十四章にもある。

(四) 夫唯不爭の爭の字道藏の河上公本に衿に作る。老子の文例夫唯何々といふとき必ず前にある字を受けるのが例であるから、道藏本が正しいのかも知れぬが意味からいへば爭でもつゞく。

右河上公本には益謙章と名づけてゐてよく章意を盡してゐる。莊子天下篇に老子を評して人皆な福を求む己獨り曲全すといつたのは恐らくこの章の意味を取つたのであらう。莊子山木篇に孔子が陳蔡の厄に苦しんだとき大任公といふ人が之を弔うて「直木は先づ伐られ、甘泉は先づ竭く、子はそれ意ふに知を飾りて以て愚を驚かし、身を修めて以て行を明にし、昭々乎として日月を揭げて行くが如し、故に免れざるなり。昔我之を大成の人に聞けり、曰く、自ら伐るものは功なく、功あるものは墮し名成るものは虧くと、孰かよく功と名とを去りて衆人に還るものぞ」といつたとあるが、この大任公の話はまたこの章を敷衍したものゝ樣に見える。直木は先づ伐らるといふのはこの章曲則全の意を反對に表した詞で、自ら伐るものは功なしといふのもこの章の不自伐故有功と同じ意味である。而して成玄英の莊子の疏には大成の人を老子だとしてゐる。恐らくはさうであらう。

（一）曲則全とは樹木の曲つたものは用に適せないから自然切られることを免れて天年を全くするごとく、人も才能をつゝみかくしてくらせば災禍を免るゝをいふ。枉則正とは尺蠖の屈するは伸びむが爲である如く、枉ればやがてのびる時が來るをいふ。窪則盈とは地の卑きところに水が流れ込んで淵をなす如く、謙下を宗とすれば德之に歸するをいふ。蔽則新とはよく蔽惡に耐ゆればやがて新鮮なるを得といふ意。

（二）少則得多則惑の二句は上四句の意を承けて天道は滿を損して謙を益すものであるから自ら謙りて少を受け多をさければ惑少なしといふのである。聖人抱一の抱一は第十章抱一と同じで神を靜にするを主義とすることであらう。爲天下之式とは抱一を旨として天下の人から尊敬されるといふ意味である。この四句の中第二句に多則惑とある惑の字は知に對する字であるから、この條は主として多知を求めず、自然に持つて生れた德によるべきを說いたもので、苟子の王覇篇に「知者之知は固より多し、又以て少を守て能く察すること無らむ乎」とあると同じ意味である。

（三）は抱一の效果を說いたもので、自ら見はれもせず、自ら是とせず、自らその功に伐らず、又自らその能を矜らぬが爲に却つて能く彰はれて、その功を收め長く維持することが出來るといふ意。

（四）老子の言は第三節で終つて第四節以下は後學が老子の說を贊歎した語であらう。乃でこの節の終りに古之所謂曲則全云々といつたのである。或る學者はこの節を老子の言と見て第三節以上を古來の格言と解してゐるが、前に引いた莊子天下篇及び山木篇の文によれば第三節以上が老子の語であることは明瞭である。而してこの節に老子の語を古のいふところといつてゐる點から考へると、この節は老子後學の敷衍と見なければならぬ。即この節は上の明彰功長の結果を得るは曲全にあるから古の所謂曲則全とは僞りのない語だといつたのである。

（五）誠全而歸之の五字に似た語が大戴禮の曾子大孝篇にある。曰く、「父母全而生之、子全而歸之」と。想ふにこの五字は古人の評語が本文に竄入したもので、所謂曲全の敎は萬物の母から受けた身體を毀傷せずにかへす事だといふ意味であらう。

第二十三章

（一）希言自然。（二）「故飄風不終朝、驟雨不終日、孰爲此者、天地、天地尙不能久、而況於人乎、故從事於道者同於道、得者同於得、失者同於失、同於道者、道亦樂得之、同於得者、得亦樂得之、同於失者、失亦樂得之」（三）信不足、焉有「不」信焉、

「(四)攸兮其貴言、功成事遂、百姓皆謂我自然」 以上第五章末在第十七章

校異 (一) 希言傅奕本稀言に作る。

(二) 飄風不終朝、景龍碑この上故字なく、孰爲此の下者字なく、尙字上に作り、於人乎の末の乎字がない。故從事於道者の於字景龍碑而に作る。河上公本傅奕本は道者の二字を重ねてゐるが、淮南子道應訓に引かれたこの文には道者を重ねて居らぬ。王弼注に「從事於道者、以無爲爲君、不言爲教、緜々若存而物得其眞、與道同體故曰同於道」とあるから王弼本は淮南子に引いた文と同じであつたらしい。陸氏釋文には「道者於道」の四字を出し「その下に河上於道者絕句」とあつて、淸の盧文弨はこれによつて河上本は「故從事於道於道」と作つただらうといつてゐるが、現今河上本には「故從事於道者同於道」に作つてゐて、その注文を熟讀して見ると舊から盧文弨のいふ樣にあつた筈はない。河上公注の意によると故從事於道者の六字は上の天地も久しきこと能はず況んや人に於てをやの句につゞけて、故に事を爲すには道の安靜なるが如くにあるべし、飄風驟雨の如く暴疾であつてはならぬといふ意味に解してゐるから、陸氏が標出した「道者於道」の四字は「從事於道者」の誤りに相違ない。從つて河上本には道者の二字を疊重してゐた事は疑ひない。要するに王弼本と河上本

とこのところ明かに相違してゐた筈であるが、現今の王本は河上本によつて校改されてゐる。而して淮南子に引いた文が王弼本の原形と一致する以上、王弼本の方が古い經文とせねばならぬ。得者同於得の兩字今の王弼本河上本ともに德字に作つてゐるが、注文によると王弼本は得に作つて河上公本は德に作つたらしい。而して下句「失者同於失」の語と對して考へると王弼本の方が正しい。傅奕本には得者同於得の句と失者同於失の句の上に「從事於得者」及び「從事於失者」の句があり、景龍碑にはこの四句がない。道亦樂得之以下三句景龍碑には每句亦樂の二字なく得を德に作り、且つ失亦樂得之の句を道失之に作る。傅奕本は每句の上同字なく句中樂字だけがない。

(三) 信不足焉有不信焉景龍碑には兩焉字なく傅奕本河上公本には下の焉字だけがない。

(四) はもと第十七章にある句で、其異同は既に述べたから此に略する。

右河上本には虛無章と題してゐるが章意に適せぬ。この中第二節の初にある飄風暴雨の事は列子の說符篇、呂氏春秋の愼大覽淮南子の道應訓に見えてゐるが、ともに老子の語として居らぬ。又同じ節の、道亦樂得之等の句は第三十一章の美之者是樂殺人の句と同人の手に成つた文の如くに見える。而して第三十一章は老子の作でないと既に王弼も疑つた章であるから、この

章第二節全體も後人の注解の語が本文に竄入したもので、老子其人の言でないと思ふ。勿論この中の一部分は淮南子既に老子の語として引いてゐるから、その竄入は可なり古いことは爭はれぬが、列子呂覽の頃までは老子の言となつて居らぬ。乃で第二節を削り去ると殘るところは唯始末の二語だけとなる。而して末の一語は第十七章に同じ詞があつてそれにつゞく文句がこの章に移せば意義が連絡する上に押韻も合ふから、老子の語は恐らく上に訂正した如くであつたらう。

希言自然の希字は之を聽いて聞えざる名づけて希と曰ふの希と同じ意味で、この句は自然即道は默して言はねど、萬物を化生して不言の敎を垂れてゐるをいふ。信不足焉有不信焉の前の焉の字は則字と同じで、如何ほど語つても信がない言葉は信ぜられぬといふ意。悠兮其貴言は開元幢に猶其貴言に作つてゐるのがよい。如何に言を費しても詮なきこととすれば猶何ぞ言ふを要せんやとの意、之に反して言を費さずとも「功成り事なれば人は之を自然と謂ふ故に功成事遂百姓皆謂我自然」といつたのである。

第二十四章

(一)企者不立、跨者不行、(二)自見不明、自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長。(三)其於道也曰餘食贅行、物或惡之、故有道者不處。

敎義 景龍碑不立を不久に作り、跨字は半ばかけてゐる。自見者以下四句皆者の字なく、不處の上また者字がない。其於道也の四字たゞ其在道の三字に作り、惡之の上に有字がある。

(一) 企者不立の上廣明幢には喘者不久の一句があつて、企字を跂に作り景福碑には跨者不行の句を跂者不立の句の前に置いてゐるが喘者不久の四字はない。注文から判斷すると企者に作るものは王弼本で跂に作るものは河上公本である。釋文には企者の二字を標出して河上跂に作ると注して居るが跂は跂の誤りであらう。企と跂とは同じ意味で踵を擧げて立つことを意味する。

(三) 其於道也曰餘食贅行の於字は現行王弼本と傅奕本とには在字に成つて居て河上本及唐碑は皆於に作つて居るが、その注文によつて考へると王弼本が於に作つて河上公本が在であつたに相違ない。曰字諸本皆同じ。但し河上公注に「使此自矜伐之人在治國之道日賦

歛餘祿食爲貪行也」とあるから、河上本は日字に作るべき筈で王弼本は曰字である。

右河上公本には苦恩章と題してゐるが（古鈔本には善思章と成つてゐるのもある）章旨を得ない。魏源の老子本義は吳澄の分章を襲うて、この章を希言自然の章に連屬するものとし、前の曲則全の章は有道者の事を述べてゐて、この章道に反する失を說いてゐる。故に自見者等の四句は兩章ともに之を存して前章には肯定的に說かれ、後章には否定的に說かれてゐるといつてゐる。而して姚鼐の老子章義には曲則全章より此の章の終までを一章と見てゐるが、いづれも無理がある。この章第一節の二句は第二節の四句と句法が同じくないから、必ずしも（一）と（二）とが連屬するか否やも疑問である。而して（一）の二句が諸本と經文を異にしてゐる點から考へると、この二句は元來闕脫の餘で完全な一節であるまい。もし廣明幢の樣に喘者不久の句があつたとすれば希言自然の章にある飄風暴雨の一段はこの節の說明と考へられないでもない。

（二）の四句は明彰功長と韻をふんで、殊に自伐者無功の一句は莊子の山木篇に大成人の語として引かれてゐるから、古い道家言たることは疑ひない。之に反して

（三）は韻もなく殊に物或惡之故有道者不處の二句は夙に老子の文でないと疑はれた第三十一章と同じ筆法であるから、恐らくは老子より遙か下つた時代に加はつた文であらう。

第二十五章

（一）有物混成、先天地生、寂兮寥兮、獨立而不改、周行而不殆、可以爲天下母、吾不知其名、故强字之曰道、强爲之名曰大、大曰逝、逝曰遠、遠曰反、（二）故道大、天大、地大、王亦大、域中有四大、而王居其一焉、人法地、地法天、天法道、道法自然、（三）自今及古其名不去、以閱衆甫、吾何以知衆甫之狀哉、以此、以上二十三字舊本在第二十一章

校異 （一）寂兮寥兮、河上公本寂兮寥兮に作り、現今王弼本も河上公本と同じであるが、傅奕本范應元本は寂兮寥兮に作り、范注に王弼古本に同じと云つてゐるから、范氏の見た王本は今改めた通りで、現今王本は河上本によつて改められたのであらう。景龍碑と次解本とは寂漠に作る。獨立而の而字今の王本にはないが、河上本傅奕本范應元本には皆あつて下周行而不殆の句に對するから而字がある方がよいであらう。景龍碑には兩句とも而字がない。故强字之曰道の故强の二字今の王本にはないが、傅奕本と范應元本にはあつて范注に王弼古本に

同じとあり、韓非子解老篇にも聖人觀其玄虛用其周行强字之曰道とあり、牟子理惑論及禮記中庸疏に引かれ、文にも强字があるから古い王弼本は范本の通りであつたらう。景龍碑にはこの句の下に吾字がある。大曰逝以下三句曰字吳汝論の定本に日に改めてゐるが、何れの本も曰である。曰の字は則と同じ意。遠曰反の反字景龍碑と傅奕本には返に作るが、反に作つた方が正しい。

(二) 故道大景龍碑にはこの節の首の故字、王亦大の亦字及其一焉の焉字がなく居を處に作つてゐるが、淮南子道應訓に引かれた文は略今本と同じで、たゞ居を處に作つてゐる。傅奕本は王亦大の王字を人に作り焉字を尊に作る。尊字は恐らく焉の誤りであらうが、王を人に作つた點は下文人法地等の句と相應じてよい樣である。說文大字の下に「天大地大人亦大焉象人形」とある。小學家の說によると、大の字は人が兩足を開き兩手を張つて立つ象を表したもので人の意である。天と地とは吾人が見るものゝ尤も大なるもので、それに人は萬物の中もつとも貴く且つ其字が大であるから、天地人を大としたのであらう。老子のこの節は小學家の說に更に道大を加へたものであるから、矢張り人大に作つた方がよい。然し王弼本も河上公本も王に作つた事は疑はれぬ。

(三) の異字は二十一章に述べたから此に再說しない。

右河上公本には象玄章と名づけて居るが、大體二節に區分することが出來る。中に於て第一節は有韻の文で古い事は明かであるが、第二節には韻がなくて、稍後の文であらう。而して天大地大人大の句が小學家の言だとすれば、第二節は第一節の名曰大の大字を說明する爲にくはへられた文句で、老子の文ではなからう。而して思想の連絡を考へると第一節と第二節はよく連屬しないから、老子の古い部分は第一節で終つて居るらしい。唯遠曰反で終つていさゝか物足らぬが、これは恐らく第二十一章の末段がこゝにつゞくのであらう。第二十一章の末段は彼章に於ては連屬しないが此章に移せば甚だ自然である。

(一) 有物混成とは道は既に第十四章に說く如く夷希微の三屬性が兼ね具はつてゐて、氣形質が未だ分れない實在であるから混成といつたのである。先天地生とは第四章に象帝之先とあつたのも同じ意味で、道は凡ての現象の根源であることをいふのである。寂寞とは形態のない形容で、道は眼にも見えず、耳にも聞えず、手にも觸れることの出來ないものであるから寂寞といつたのである。寂は聲なきを意味し寞は形なきを示す文字である。獨立而不改とは道は現象界に比較すべきものなく、且つ永久不變の實在だといふ意で周行而不殆とは凡ての現象に行きわたつて普遍的ではあるが、現象の如く時々刻々生滅するものでなく不朽な物だといふ意である。可以爲天下母とは萬物が道から生ずるから母といふのである。この萬物の根源たる道は吾

人の言語で説明できぬものであるが強ひてこれを呼べば道とか大とかいふより外はない。乃で「吾不知其名、故強字之曰道、強爲之名曰大」といつたのである。何故に之を道或は大と呼んだのであるか、それは天地萬物を生じた源で、すべての現象を包ねつゝむから大とよばれる。而してこの大と呼ばれたものは定形に止らずして、日々夜々に運行して凡ての現象を生じ長じ滅して行く、語をかへていへば逝き逝きて道に遠かつて行くが、やがて復もとの道にかへる。その運行して止らない事恰も道路が人を通行させてゐるに似てゐるから道と呼んだのである。

(三) 道は吾人の認識を超越し説明し得ない實在で、之を道といひ大と呼ぶのはかりに定めた名であるが、外に適當な言葉がないので古來その名か用ゐられて廢せられず、凡ての現象を綜へるものとされてゐる。衆甫とは衆父と同じ意味で莊子天地篇に衆父を以て萬物となし、衆父の父を萬物の祖となしてゐるから、こゝの衆甫も萬物即總ての現象を指したもので、閱はすふるといふ意味である。吾人が現象の起る所以を知り得るのは實にこの道といふ名が説かれた爲である。乃で「吾何以知衆甫之然以此」といつたのである。

第二十六章

重爲輕根。靜爲躁君。是以聖人終日行、不離輜重、雖有榮觀、宴處超然、奈何萬乘之主而以身輕天下。輕則失本。躁則失君。

校異 傅奕本靜を靖に作る。河上公本開元憧聖人を君子に作り、宴處を燕處に作る。傅奕本景龍碑君子に作るは河上公本と同じく、晏處は王弼本に一致する。奈何傅奕本如之何に作り景龍碑如何に作り主字の下に而の字がない。輕天下河上公本景福碑及韓非子喩老輕の下に於の字がある。輕則失本河上公本本字を臣に作る。唐碑皆河上公本に同じく、傅奕本は王弼本と一致してゐる。焦竑の老子翼には本を根に作つて、失根一に失本に作り、一に失臣に作る非、今王輔嗣本に從ふと注して居て、焦竑の見た王弼本は根に作つたやうに思はれるが、注文から推測すると、王弼本は本に作つたに相違なく范應元の見た王弼本も本に作つてゐる。

右河上公本には重德章と題して居るが、この中老子の言と思はれるのは唯初の二句と終の二句とだけで、中間の數句は後人の敷演したものらしい。韓非子喩老篇にこの章を説いた一節がある。その文は次の如くである。

制在ㇾ己曰ㇾ重。不ㇾ離ㇾ位曰ㇾ靜。」重則能使ㇾ輕。靜則能使ㇾ躁。故曰重爲輕根。靜爲躁君。故曰。君子終日行不ㇾ離ㇾ輜重一也。邦者人君之輜重也。主父生傳ㇾ其邦。此離ㇾ其輜重一者也。故雖ㇾ有ㇾ代雲

中之樂。超然已無レ趙矣。」主父萬乘之主而以レ身輕二於天下一。無勢之謂レ輕。離位之謂レ躁。是以生幽而死。故曰、輕則失レ臣。躁則失レ君。主父之謂也

右の文によると點を加へた部分は老子の言で他は喩老篇の作者が說明した詞の如く見える。但「君子終日行不離輜重」の句の上に「故曰」の二字があつて此句も老子本文の如く見えるが、よく讀むと「曰」の字は衍文で、もし之を衍文とすると、この句も「主父萬乘之主而以身輕於天下」の句と同じく說明の辭で、老子の本文でないことになる。想ふに喩老篇の作者が見た老子の經文は初二句と末二句のみであつたらう。

單に始末の四句だけが老子の本文だとすれば、この章の意味は輕躁をさけて重靜を守れと敎へたのみで、第十六章に「致虛極守靜篤」と說いたのと同じ主意になるが、中間の數句が入ると政柄を握つて勢位を守るべきことを說いたものとなつて、老子の根本精神から離れて寧ろ法家の主張に近い樣に見える。

第二十七章

善行無二轍迹一。善言無二瑕謫一。善數不レ用二籌策一。善閉無二關楗一而不レ可レ開。

善結無二繩約一而不レ可レ解。〔是以聖人、常善救人、故無棄人、常能救物、故無棄物〕是謂二襲明一。〔故善人者不善人之師、不善人者善人之資、不貴其師、不愛其資、雖智大迷〕是謂二要妙一。

考異 無轍跡釋文この三字を標出し、梁武帝の說を引いて轍字は車邊であるべきだが今イ邊に成つてゐるのは古は字が少なくて轍字がなかつたからだといひ、又跡の字を河上本に迹に作つたと注記してゐるから、隋の時河上本は徹迹に作り王弼本は徹跡に作つた事が明かである。現在王弼河上公兩本ともに轍迹に作つてゐるのは後人が訂正したのである。傅奕本が徹迹に作つてゐるのは河上公本の舊形を存してゐるのであらう。無字の上河上公本、景福碑及び傅奕本には者字がある。下四句皆同じく無字の上に者字がある。瑕謫河上公本開元幢瑕謫に作り景龍碑瘕謫に作る。傅奕本は王弼本と同じく瑕謫に作る。謫は謫の俗字で瑕は瘕の借字である。善數河上公本善計に作る。籌策開元幢籌算に作る。策と算とは同じ意味である。關楗而景龍碑楗下、約下ともに而字なく、救人の下及救物の下の故字而に作り、善人の上に故字なく、下に者字なく、不善人の下にも者字なく、智を知に作る。傅奕本故無棄人の故字の下

に人の字があり無棄物の上に物の字があつて淮南子道應訓に引かれた文と一致して居る。

右河上公注には巧用章と名けて一章としてゐるが疑はしい點が多い。是以聖人常善救人以下四句は唐の傅奕が諸本を校定したとき河上公本にあつて古本にはなかつたといつてゐるが、淮南子の道應訓に既に老子の語として引かれて居る。乃で一部の學者は傅奕の言に從つてこの四句を削除すべきだと考へてゐるが、又一方には淮南子によつて此の言を重く見てゐる人もあつて、古來問題とせられて居る句である。平心この章を熟讀して見るに、この四句は前後に連屬しないのみならず、淮南子によると惡人でも使ひ道があることを述べたもので、老子の精神と一致しないから宜しく削除すべきであらう。

故善人者不善人之師から大迷に至る數句も淮南子及び韓非子の中に老子の言として引かれてゐるが、これも前後の文と連接しない。淮南子道應訓には昔楚と齊とが戰つて、楚の不利に終らむとしたとき、楚將子發の部下に竊盜の巧な人があつて、一夜齊將の幕帳を偸み來り之を子發に渡したら、子發は之を齊にかへした。其翌夜彼の人は又齊將の枕を偸み、その翌夜又齊將の簪を取つてきて子發に渡し、子發は日ごとに之を齊の軍營にかへしたところ、齊將はかくては遂に我が首を取られるやも知れずと恐れて退却したといふ物語をのせて、如何なる細技でも

用ゐ次第で用をなすものだといひ且つ老子が「不善人善人之資也」といつたのもこの意味だと說いてゐる。又韓非子の喩老篇には、昔殷の紂王が周の玉版を得んと欲し、その忠臣を使して索めたところ周の文王は之を渡さぬ、後再びその諛臣を使して之を要求すれば文王は直ちに之を與へた。これは文王が殷の忠臣の信用を落して諛臣の跋扈を自由にし殷を亡ぼさむ計略で、老子が「不愛其資雖知大迷」といつたのは、この意味だと說明してゐる。淮南子と韓非の解は現存老子の解釋として最も古いもので、これに從ふと善人不善人之師以下の語は陰謀家の語で、六韜の文筱篇に載せられた、戰はずして敵國を謀る策と似て居る。而してこれ等陰謀は決して老子の無爲自然の說と一致するものでない。從つてこれ等の句は老子の語が蘇秦の樣な游說家に傳はつたとき竄入したもので宜しく削除すべきである。乃で老子の言として信ずべきは以上二條を除いた殘りの部分である。而して殘された部分は、跡謫策開解で韻をふみ又明と妙とか韻が合するから古くから、道家一派の學者が老子の敎として口傳へに諳誦して來た語であることがわかる。

善行無徹跡の徹は車轍、跡は足跡の義である。眞に善行といふべきものは善惡の評を受くべき轍跡もなくたゞ自然に從ふのみである。善言無瑕謫の瑕謫は呂氏春秋や荀子に瑕適に作る。

瑕は玉のきず、謫は過の義で眞の善言は非議すべき點がないといふ意。善數不用籌策とは凡て物を數へるには籌策即算木によるものだが、本當によく數へるものは算木を要せぬ。善閉無關楗而不可開と楗は鍵と同じく鎖である。門を閉づるには關木や鍵によるが眞によく閉ぢたときは鍵や關木を用ゐないで而も開き得ない。淮南說山訓に至巧不レ用レ劒、善閉者不レ用二關楗一とあつて注によく其心を閉づるが故に關楗せざる也とある。之によれば善閉者とは心を閉ぢて情欲を外に馳せしめない意味で、心には關楗なければよく閉づる人は他人が開き得ないといふ意味である。善結無繩約而不可解とは莊子の駢拇篇に待二繩約膠漆一而固者、是侵二其德一也とあると同じ意で、其天性に任して繩索を以て人爲的に束縛せない事である。要するにこの五句は自然に任して人爲を去ることを說いたもので、この境地に至り得ればこれを襲明とか要妙とかいひ得るのである。襲明とは明に入るといふ意で常然の道に悟入したといふ事である。要妙とは窈眇と同じ意味で、この境地は人智を離れ言語によつて說明出來ぬところであるから要妙といふのである。

第二十八章

(一)知二其雄一守二其雌一、爲二天下谿一、爲二天下谿一、常德不レ離、復歸於嬰兒、

(二)知二其白一守二其黑一、爲二天下式一、爲二天下式一、常德不レ忒、復歸於無極、

(三)知二其榮一守二其辱一、爲二天下谷一、爲二天下谷一、常德乃足、復歸於樸、(四)樸散則爲器、聖人用之、則爲官長、故大制無割

校讀 (一)谿、字景龍碑蹊に作る。釋文によれば又溪に作つた本もあつたといふ。常德、景龍碑常得に作る。下二句又同じ、德と得とは古通用されるが德字が正しい。

(三)樸、字景龍碑朴に作り、玉篇に引かれた文は璞に作る。何れも同じ意味である。

(四)景龍碑には散字の下則字なく、用字の下之則の二字なく故字を是以に作つてゐる。無割を河上公本開元幢景福碑廣明幢皆不割に作り、景龍碑傅奕本及淮南子引文には無割に作る。現行王弼本は河上本に同じであるが、その注文によると、その原本は無割に作つたことがわかる。聖人用之の用字につき兪樾の注文によると、河上公本は用に作り、王弼本は因に作つたらうといふ。或はその說の如くであつたかも知れぬが、今いづれのテキストも用に作つて居るから、そのまゝにした。

右河上公本には反樸章と名づけてゐる。其前三節は韻文であつて古い語と思へるが最後の一節は韻をふんで居らぬ。又莊子馬蹄篇に「至德之世、同乎無欲、是謂素樸、素樸而民性得矣、夫殘樸以爲器、工匠之罪也」とあつて、其殘樸以爲器の語は此章第四節の樸散而爲器の意と同じである。從つてこの節に聖人用之爲官長とあるは儒家は聖人を尊宗するが、聖人の政治は樸にそむくものでよくないといふ意である。果して然らば此節に用ゐられた聖人は非難の的として引かれたもので、老子の古い部分に聖人を理想的の人として賞讃して居るのと趣を異にする。想ふに道家でも初の間は聖人は尊きものと考へられたが、後に儒家を壓する爲に聖人を非難する樣に成つたもので、此章第四節は老聃よりもやゝ後れた頃の道家言であらう。又第四節の末句大制無割の四字は淮南子に引かれた文で、現在第四十九章にある故致數輿無輿也の句と連ねられて居たらしく、恐らくは錯簡でめらう。要するに第四節は老子の言でないらしい。

前三節は第四節に比して古い樣だがこれにも疑問がある。淮南子道應訓に「知其雄、守其雌、爲天下谿」の三句と「知其榮、守其辱、爲天下谷」の三句とを離して引いてあるが、これは恐らく今の章の第一節と第三節とを省略して引用したものであらう。從て漢初のテキストは、今の樣な形であつたらうと思はれるが、淮南子よりも更に古い莊子の天下篇には老聃の言として「知其雄、守其雌、爲天下谿、知其白、守其辱、爲天下谷」の六句を擧げてゐる。この引用文

は、老子この章の第一節の初三句と、第二節第三節を混雜して引いた樣に見える。而して一寸考へると、白は黑に對し、辱は榮に對するは當然であつて、莊子の引用文に白と辱とを對用したのは誤りであるかの如く見えるが、老子第四十一章に「大白若辱」といふ句があつて、老子は矢張り白字を榮字の意味に使つて白辱を對用したらしい。從つて莊子天下篇の作者が見たテキストは守其黑から知其榮までの二十三字がなかつたらしい。試に之等の語を削ると

知其雄、守其雌、爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒、
知其白、守其辱、爲天下谷、常德乃足、復既於樸、

の二節となる。而してかくなると、天下谿と天下谷とがよく對して、修辭上から見ても都合がよい。さてこの二節の意は雄剛を去り、雌柔を守り、榮譽を辭して辱惡に忍ぶことが出來れば天下の歸往する所となつて、自然の德を全くし嬰兒素樸の狀態にかへることが出來るといふ意味である。

もし今本の如く中間に

知其白、守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不忒、復歸於無極、

の一節が加れば、この白黑は榮辱と別な意味に解されねばならぬ。河上公注には白を昭々之智、黑を闇昧の意味に解してゐる。老子第十章に明白四達能無知乎とあつて明白を知の意味に關係

させて居るから河上公の注は當を得たものであらう。而して老子第六十四章に「以智治國、國之賊。不以智治國、國之福。知此兩者亦稽式」（河上公本楷式に作る）といつて愚民政治を賞揚してゐるが、この章の天下式の式は彼章の稽式に當つて、彼此相對照すると此一節も愚民政治を說いたらしく見える。但守黑と愚民とは多少意味も異なるが、要するに智を斥けて愚を執ることになる。乃で吾人の憶說がゆるされるならば、この一節は老子の言が愚民政治を主張する慎到に傳はつて、添竄されたものであらうと思ふ。老子と慎到との間に區別を認めた天下篇の作者がこの句を引いて居ないことは、深き意味あることゝ想像する。

第二十九章

(一)將欲取天下而爲之、吾見其不得已、天下神器、不可爲也、不可執也、爲者敗之、執者失之、(二)是以聖人無爲、故無敗、無執、故無失（不可執也）之四字據選注引文補正、是以聖人以下十四字舊在六十四章）(三)凡物或行或隨、或歔或吹、或强或羸、或挫或隳、是以聖人去甚、去奢、去泰。

校異 (一) 傅奕本吾上者字あり、已下夫字あり。景龍碑は者字も夫字もなく又不可爲の下に也字もない。不可執也の四字は諸本に皆ないが文選于寶晉紀總論李注に「文子引老子曰天下神器也、不可執也、不可爲也、爲者敗之、執者失之」とあつて、この章王注にも「故可因而不可爲也、可通而不可執也」とあるから王弼の據つた本文にはこの四字があつたに相違ないと思はれるから補うた。

(二) 是以聖人以下二句は六十四章にあるのだが、彼章に於て冗句の樣に見え且つ是以の上に、爲者敗之、執者失之の二句が此章と一致してゐるから恐らく此章の句が彼章に竄入したのであらうから試に此に附記した。

(三) 凡の字景龍碑には夫になつて居て、河上公本景福碑開元幢には故に作り、傅奕本は凡に作つて居る。現行王弼本は故に成つてゐるが注文から推測すると凡に作つたらしい。或歔或吹の歔字は河上公本と開元幢には呴に作り景福碑には噓に作つて居る。呴煦は敏と同じ意味で息をもて物を暖める意で吹は寒くする意、噓と歔とも同じでともに息を出すことの緩なるをいふ。之に對すれば吹は急に息を出す意となる。噤は口を閉ぢて言はぬ意、之に對すれば吹は口を開いて氣息を通ずる義となる。いづれにしてもこの二字は反對の概念を竝べたのである。羸字景龍碑羸に作る。恐らく訛であらう。

贏は强に對する字で弱い意である。或、挫の挫字河上公本は載に作り、景龍碑には接に作り、傳奕本は贏字を剉に作つて挫を培に作つて居る。上三句の例によるとこれ等の字は相互に反對の意を持つべき筈である。隳字傳奕本墮に作る。隳は墮の俗字である。河上公注に載を安と解し隳を危と注して居るが隳に危といふ意味はやゝ無理である。陸德明は隳を毀と注して居るから挫は成ると考へねばならぬが挫には成の義がない。載なれば成ると解し得る。從つて此句は河上公本の方が正しく王弼本が誤つてゐるに相違ない。想ふに王弼本の挫字は培字の誤りであらう。培の字は馮字と通用される字で乘る意である。これを乘る意とすれば下の墮字は落つる義と解すべきである。載字も又乘ずる意があり隳字には落つる義があるから、載培いづれにしても通ずる。景龍碑の接、王弼本の挫は恐らく培の訛であらう。

河上公本は右全體を無爲章と名けてゐるが、無爲章と名け得る部分は其前半だけである。後半凡物或行或隨以下は別の意味であらう。

(一) 取天下の取の字は横領する意味でなく、天下の民心を得るといふ意である。天下の民心を得んとして種々人爲的の政治をするのは失敗する原で、眞の善政は無爲であるべきだといふが前半の大意である。その意義からいへば老子の思想に矛盾はせぬが、文體からいへば、比

較的新しい部分かも知れぬ。

(三) の凡物或行或隨等の四句は吾人の經驗する凡ての事實は相對的で、一方に偏すればやがて反對の方面に向ふといふ意を表したもので、第二章有無相生難易相成等の語と同じ考へである。即先行と後隨、緩と急、强と弱、乘と落は皆相對する概念で一方を豫想せずに他を考へることが出來ぬ。其一方を得れば必ず他の一面が伏在してつきまとふ。然るに世人は先を求め强を喜び乘をこのむ。是れ策の宜しきを得たものでない。乃で聖人は甚を去り奢を去り泰を去る。甚とは極端なること、奢とは贅澤なこと、泰とは驕慢な事である。この一節は隨吹と贏隳と甚泰と韻してゐるから古い部分であらう。

第三十章

(一)以道佐人主者、不以兵强於天下、其事好還、師之所處、荆棘生焉、大軍之後、必有凶年、善者果而已、不敢以取强、果而勿矜、果而勿伐、果而勿驕、果而不得已、是果而勿强、(二)物壯則老、是謂不道、不道早已、

校異 (一) 景龍碑佐字を作に作る。作字に作れば人主自ら道を以てする義で、佐字であれば人臣が道を以て人主を輔佐する意味となる。王弼注は後の意味に解してゐるから其本經は佐に作つたに相違ないが河上公注は「人生能く道を以て自ら輔佐するなり」とあるから其本經は景龍碑と同じく作であつたらう。今行河上公本が佐と成つてゐるのは、その注輔佐の字から誤つたものであらう。強於天下の句現今王本には於の字がないが其注文によつて考へると河上本と同じく於字があつたに相違ないから今は補うて置く。大軍之後、必有凶年の二句は景龍碑と道藏次解本にはない。王弼注に此二句を解釋せずして河上公に注がある點より推測すると王本には此二句なく河上本には存在したらしい。陸氏釋文に「凶年」の二字を標出してゐる點から推すと王弼本にも此句があつた樣にも考へられるが、更に釋文の凶年下の注に「天應惡氣災害五穀盡傷人也」とあるは河上公注「天應之以惡氣即害五穀盡、傷人也」を誤り傳へたもので、釋文の例としては河上注のみを引く筈がないから、恐らく陸氏の原本は王本は注に成つてゐるが河上本は經に成つて居て其下注して天應之以惡氣云云とあるとあつたのであらう。景龍碑は大體河上本に本づいて王本で校改されたものであるから、碑に此二句なきは王本によつて刪定されたのであらう。乃で今此八字を小活字にした。善者果而已の上舊鈔河上本景龍碑故字あり、舊鈔河上本而已の下に矣字あつて取强の下に焉字がある。矣字

と焉字とはあつてもなくても意味に關係はないが故字はある方がよい。果而勿驕の句景龍碑は果而勿矜の句上にあるが、王弼注によるも舊鈔河上本によるも碑の順序には合はない。果而不得已の已字景龍碑には以字になつてゐて以字の下是字がある。以と已とは通用される字で、ともに止むと讀めるから碑も諸本と同じであらうが、是字の有無は注意すべきである。このところ是字のあるのは碑のみでなく、傅奕本にもある。又范應元の古本には是字の下更に謂字がある。即是字は上四句を承けて是が即「果而勿强」といふ意だと決語を加へたもので「果而勿强」の四字は上の「善者果而已、不敢以取强」の二句をつゞめたものであらう。從つて是字があれば「果而勿矜」以下の五句は、上の二句の說明になるが是字がなければ最後の一句が上と重複することになる。乃で現今王弼本にも河上公本にも是字が脫してゐるがもとは是字があつたのであらうと思はれるから補うた。(二) 不道景龍碑傅奕本非道に作る。

第三十一章

(三)夫佳兵者不祥之器、物或惡之、故有道者不處、君子居則貴左、用兵則貴右、(四)兵者不祥之器、非君子之器、不得已而用之、恬澹爲上、勝而不美、而美

之者、是樂レ殺レ人、夫樂レ殺レ人者、則不レ可ニ以得ニ志於天下一矣、吉事尚レ左、凶事尚レ右、偏將軍居レ左、上將軍居レ右、言以ニ喪禮一處レ之、(五)殺人之衆、以ニ悲哀一泣レ之、戰勝以ニ喪禮一處レ之、

校異 (三) 夫佳兵の佳字天文鈔河上本餝に作る。これ河上注の意に從つて改めたものであらう。王弼注は佳字を美字で說明して傳奕本は美字になつてゐるが落ちつかぬ。清儒王念孫は佳は隹の誤りで、隹は唯字の古字だといつてゐる。老子の中に「夫唯……故」といふ句法は屢あつて、第八章、十五章、廿二章の如き皆其の例である。王氏の說が當つて居るであらう。故有道者不處の句景龍碑には者字がない。

(四) は武英殿板王注老子の校語によると老子の本文でなく、注文が竄入したのであらうといつてゐる。而して我國の東條一堂の如きもその說を襲うて之を王注だらうと斷じ、此章に王弼注のないのは注文を誤つて本文としてゐるからだといつてゐる。細かに全章を熟讀すると「兵者不祥之器乃至天下矣」の四十八字は此章の章首三句を說明したもので「吉事尚左乃至以喪禮處之」の廿四字は「君子居則貴左、用兵則貴右」の二句を說明した注語であるらしい。乃で今此等注語と思はれる部分を小活字にして本文と區別した。其注文の體裁から推すと東條氏のいつた通り王弼注であるらしい。河上公本には此等の句に注があるから河上本の出來たのは王弼注の後であらねばならぬ。

(五) 殺人之衆景龍碑之衆を衆多に作る。

以上二章河上公本には儉武章、偃武章と名づけて區別してゐるか、魏源の老子本義には二章を合せて一章としてゐる。よく二章の文を熟讀すると魏源の考が當を得てゐるらしい。老子の中に「夫唯……故」を接續する文は必ず上の句を承けて論旨を轉ずるを例とするから、此第三十一章も亦上章を承くべきで獨立すべきでない。

右二章の中有韻の句はたゞ「物壯則老。是謂不道。不道早已。」の三句のみで此三句は或は古語であるかも知れぬが、他は比較的後世の文であらう。此二章の意は用兵の愼しむべきを諭したもので、三略に「夫れ兵は不祥の器、天道之を惡む、已むを得ずして之を用ふるは是れ天道也」といひ、尉繚武議篇に「兵は凶器也、爭は逆德也、將は死官也、故に已むを得ずして之を用ふ」とあると同じ意味であるから、恐らく、兵家言の竄入したもので老子の言でなからう。宋の晁景迂の王注老子跋に「夫佳兵者不祥の器より戰勝以喪禮處之に至るまで老子の言にあらざるを

知る」とあつて王應麟困學紀聞にも晁氏の此言を引いて疑をさしはさみ、宋の董思靖の道德眞經集解第三十一章に「王弼云此章疑非老子所作」といひ、宋の彭耜の道德眞經集注雜說上に、「王弼注道德經、以夫佳兵、民之飢二章疑非老子所作」といひ、近年敦煌から現れた唐寫本玄言新記の注にも王弼が第三十一章を疑つたといつてゐるから、第三十一章夫唯兵以下全部は王弼の時代から疑問とされてゐたものであるが、私は更に卅章をも老子の言でないと思ふ。第三十章中尤も古いと思はれる物壯則老等の三句も、左傳僖公廿八年に「師直爲壯、曲爲老……我曲楚直、其衆素飽、不可謂老」とあるなど思ひ合すと、春秋の頃既に兵家の間に壯老の比較が流行したらしいから、此とても老聃の意であるとは斷じがたく寧ろ兵家言であらうと思はれる。

さて此二章の意は次の如くであらう。

(一) 道を以て人主を輔佐する名臣は兵强を以て天下を取らうとせず、寧ろ出來るだけ退却(還)するものである。凡て戰は人民を害し、田畝を荒して荆棘の原となすものであるから、よく師を用ふる人はたゞ敵に勝つことをさへすればよいので、敢て兵强を誇らうとはせぬ。(果は悍の借字で勝つといふ意)即勝つて、たゞ已むを得ぬ程度に止めて矜らず、伐らず、驕らない、是れがすなはち唯勝つだけにとゞめて强を誇らないといふ意味である。

(二) 何故兵强をさけるかといへば、一體凡てのものは壯を極むればやがて老ゆるもので、

老ゆるのは道にはづれて壯ならむとするからである。道にはづれたものは早く終るものであるから、兵强をさけるのである。

(三) 一體兵は不祥の器で、君子は之を用ふるを惡むものであるから、有道者は之をさけるものである。君子が平常左を貴ぶに、兵時には右を貴び、戰勝つては喪禮を以て之に居り、殺人の多きをかなしむは之が爲である。

第三十二章

(一)道常無名。(二)〔樸雖小天下莫能臣也、侯王若能守之、萬物將自賓、天地相合以降甘露、民莫之令而自均〕始(三)制有名、名亦既有、夫亦將知止、所以不殆。(四)〔譬道之在天下、猶川谷之於江海〕

校讀 右全文を河上公本では聖德章と呼んでゐるが、其文意の連續せない所が多い。想ふに、(二)の括弧内に入れた部分は第三十七章の錯簡で(四)の括弧内の句は六十六章の錯簡であらう。從つて此章の文はたゞ(一)と(三)とのみである。今(一)と(三)との文字の

異同をあらはせば次の如くである。夫字河上公本と景龍碑とは天に作つて碑には天字の下亦字がない。知止の止字河上公本は之になつてゐるが景龍碑は矢張り止字に作つてゐて、不殆の上に所以の二字がない。もし碑の如く作れば第四十四章「知止不殆、可以長久」と同じ句法となるが、此章王弼注に「故知止所以不殆也」とあるから、王弼の原本は所以の字があつたに相違ない。所以の二字聚珍版には可以に作つてゐるが、道藏本と明和本とには所以と成つてゐて王弼注文と一致する。傅奕本此章は王弼本と同じである。

此章の意は第一章と相照して明かにすべきである。道常無名の四字は第一章「道可レ道非二常道一」の意を積極的にのべたもので、始制有名の四字は「無名天地之始有名萬物之母」の意と同じであらう。即道は恒久不變のもので、吾人の言語文字で說明し得ないものであるから道は常にして名なしというたのである。而して此無名の道は天地の始、語を換へていへば凡ての現象の根本であつて、此道から萬物が生ずるを始制有名といつたのである。有名は即萬物の意である。然し萬物は千差萬別であるから、人が之に對するとき必ずそのよきを貴び惡しきを卑しんで名譽心を起させるものである。名亦既有の名は上の名字と意を異にして名譽榮譽などの意であらう。而してこの名を求めることは人を誤らしむる原因となるものであるから、人は宜しく止るを知るべきである。止るを知るは即殆からざる所以である。

第三十三章

(一)知レ人者智、自知者明。勝レ人者有レ力、自勝者强。
(二)知レ足者富、强行者有レ志、不レ失二其所一者久、死而不レ亡者壽。

校異 傅奕本には毎句末也字がある。景龍碑には强行の下に者の字がない。想ふに碑は四字句にする爲に删つたのであらう。

右(一)は明字と强字で隔句韻をふんでゐるが(二)は毎句韻をふんでゐて形式が違ふから(一)と(二)とは必ずしも連續した章でなからう。

(一)は老子に習用されてゐる明字强字の意を說明したものである。明の字は智の字に對して用ゐられる語で、智は他人を知る意、明は自ら知る意である。韓非喩老に智之難は人を見るにあらずして自ら見るにあり、故に自ら見る之れを明と謂ふとあるは此節上二句の意を說いたものである。又强字は普通有力の意と使はれるが、老子は有力は人に勝つもの、强は自ら勝つ

ものとしてゐる。老子五十二章に「守レ柔曰レ強」とあるも之と同じ意で、自れの慾を制して人の欲せざる所卑む所に甘んずるが老子の所謂強である。

(二) 知足者富とは第四十六章「知二足之足一常足」といひ第四十四條に「知レ足不レ辱」とあると同じ意である。強行者有志の四句學者或は中庸の強行を以て解釋するも、恐らくは此章の本意であるまい。此章の強行は守柔して行ふ意で、卑弱自ら持する人は志ありといふべしとの意であらう。不失其所者久とは第十六章「道乃久」の句と併せ考ふべきで、其所を失はずとは道に因循する意であらう。死而不亡者壽は「沒身不殆」の義で、道に因循するものは沒身不殆であるから壽といふべきである。

中井履軒の老子雕題に壽字は古へは富、志、久と諧韻せないから後人の文であらうといつてゐるが、老子第十六章に道久殆の三字協韻して道と壽とは諧韻の字であるから、此章壽字も上の富志久と韻するのであらう。

第三十四章

(一)大道氾兮其可二左右一。萬物得之以而不辭。功成而不二名有一。(二)衣養萬物

而不爲主、常無欲可名於小、萬物歸焉而不爲主、可名爲大。(三)以其終不自爲大、故能成其大。爲大於其細、圖難於其易。

校讀 (一) 氾兮現行本汎兮に作る。釋文によれば王弼本は氾兮に作り河上本は汎兮に作る。傅奕本汎々兮に作るは河上公注によつて汎字を重ねたのであらう。說文によると氾は氾濫する意味で汎は浮ぶ貌であつて、王弼の注に道は氾濫して適かざる所なしといふのは王本が氾字に作つた證據で、舊鈔本河上公注に大道氾々若沈若浮とあるは、河上公は氾字を汎の借字と見て解釋した證據で、釋文の見た河上本は其注義によつて本文を訂正したものであらう。萬物得之以生の句現行王弼本は萬物恃之而生に作つてゐるが、文選辨命論注に引かれた王本によつて訂正した。文選注には此句を引いて其下更に王注を引いて「萬物得道而生」といつてゐる。此れ王弼本が得に成つてゐて恃でなかつた明證である。功成而不名有の句今本には而字がないが、河上公本や傅奕本にはあつて、文選注に引かれた王本にもあるから、今の王本は而字が脫したものであらう。

(二) 衣養河上公本及開元碑に愛養に作り傅奕本には衣被に作る。愈樾は衣と愛とは古音同

じくして、王本が衣養に成つて居るのは河上本の愛養の意味で、傳本の衣被は衣養の義に通ぜない人が改めたのだらうといふ。之に反し馬叙倫は范應元の見た王本は衣被に作つたといひ、易の韓康伯注に「衣被萬物」といふ句があつて、康伯は王弼系の人であるから王本は矢張り衣被に作つたのであらうといふ。今公平に考へるに、舊鈔河上公本及景龍碑皆愛養に作つて、其注によるも河上本が愛養に作つた事は明瞭であつて、陸氏釋文にはたゞ河上本は衣を愛に作るといふのみで養字に言及して居らぬから、王本は必ず衣養に成つて居たに相違ない。想ふに王本は舊來の經文を傳へて衣養に作つたのを、河上公本は衣は愛の借字であるから其本字に改めたものであらう。而して、愛の古音は隱と同じであつたが、齊人は隱を衣と發音したといふから、此節愛養を衣養としてゐるのは此節が齊人によつて附加されたことを想像せしむる。蓋し（二）の四句は（一）を説明した語であるから、老子の古い部分は（一）だけで、老子の學派が齊即今の山東省に傳はつた頃（二）が附加されたものであらう。さて（二）の四句は景龍碑はたゞ「愛養萬物不爲主、可名於大」の二句に作つてゐる。或は此節はもと景龍碑の如く成つてゐたのを、後に今の形としたものかも知れぬ。今本「常無欲可名於小」の七字は、「衣養萬物而不爲主」の句の注釋らしい。（三）はその本文も注文も第十三章と重複してゐるから錯簡であらう。

右三十四章の中で（一）は右、辭、有と韻をふんでゐて古い部分らしいが、他は後世の附益であらう。第一節の「大道氾兮其可左右」の二句は第二十五章周行而不殆の句と同じ意で、道は萬物の本體で萬物に行きわたる意であらう。王弼注に道は氾濫して適かざる所なしといつたのはよくその意を得てゐる。即萬物は道から生々するものであるから萬物得之以生といふのである。かく道は萬物を生成しながら、自ら之を作つたといふことなく、生成者の名譽を保持しようともせぬ、こゝを不辭とか功成而不名有といつたのである。

第三十五章

執大象、天下往。往而不害、安平太。樂與餌、過客止。道之出言、淡乎無味、視之不足見、聽之不足聞、用之不可既。

校異 （一）安平太の大字、河上公本太に作り、傅奕本泰に作る。後世は太と泰とは同じ意に用ゐられて大は別義に成つてゐるが、古は太字なく、大と泰とが通用されてゐるから王弼本はその舊形で、河上本は其義に從つて後人が改作したのであらう。（二）出言の言字王本も河

上本も口に作つてゐて、傅奕本と景龍碑だけは言字に作つてゐるが、此字は下の見聞と諧韻するのであるから言に作るべきである。此章王注に「道之出言淡然無味」といひ、又第二十三章の王注に「道之出言淡兮其無味也」とあつて、ともに出言に成つてゐるから、王弼本も元來は言の字に作つたに相違ない。〔用之不可既〕の可字王弼本には足になつてゐるが、河上公本、景龍碑、傅奕本皆可字に作つて、王注も此句だけは上二句と異つて可字になつてゐるから、すべてのテキストが可字であつたらしい。而して第二十三章王注に此節を引いて「下章言、道之出言、淡兮其無味也、視之不足見、聽之不足聞、然則無味不足聽之言、乃是自然之言也」といつて用之不可既の句を引かず、此章王注によると此上二句は經文と見てゐるらしいが、此一句は寧ろ王注によつて後人が加へた語らしい。其押韻から見ても、言、見、聞の三字が諧韻の字で最後の一句に韻が合はぬから、恐らくは後人の附益の句であらう。

（一）執大象の大象は四十一章の大象無形とある大象と同じ意で、大は道の別名（第廿五章に強ひて之が名をなして大といふとある大字と同義）で、道は定形なきものであるから大象は無形といつたのである。從つて此章の大象は無形の道といふ意で、道を執つて天下に臨めば往として妨害せらるゝことなく、安然で太平であるといふが（一）の意味であらう。

（二）樂は音樂、餌は食物、音樂と食物とを以て饗應するときは、過客（通りかゝりの人）も引つけられて止るが、道から出た言葉は淡然として味なく（餌字に對していふ）見るべき形もなく（大象は無形なるが故に）耳を悅ばしむる音もなく（樂に對していふ）從つて人を引つけることはない。……然し其中に用ゐて用ゐきれぬ功用がある。

第三十六章

（一）將欲翕之必固張之、將欲弱之必固強之、將欲廢之必固興之、
將欲奪之必固與之。（二）是謂微明。柔弱勝剛強。（三）魚不可脫於淵、國之利器不可示人。

敎業 翕字現今王弼本は歙に作り、釋文には傒字を標出して河上本噏に作り、簡文歙に作り、又洽に作ると注して居る。然し傅奕本は翕に作つて范應元の見た王弼本も舊鈔河上公本も、景龍碑も皆傅奕本と同じであつて、韓非子喩老篇に引かれた文も亦翕に作つてゐるから、老子の舊きテキストは皆傅奕本の如くであつて、後にその解釋によつて種々な文字に變つもの

に相違ない。固の字開元碑には故に作つてゐるが、固と故とはともに姑の借字でシバラクと訓むべきである。

將欲廢之以下四句は魏策及韓非說林篇に周書の文として引かれた「將欲敗之必姑輔之、將欲取之必姑予之」の句と略同じで、周書の文は輔予字に於て韻をふんでゐる。

(二) 是謂微明、柔弱勝强剛の二句に於て、柔弱勝强剛の五字は景龍碑には柔勝剛、弱勝强の六字に成つてゐて、傅奕本は碑の文と同じ句法に作つて兩勝字の下に之字がある。韓非子喩老には(一)の四句を解釋した後に、起二事於無形一、而要二大功於天下一、是謂二微明一、處二小弱一、而重二自卑一、是謂二損レ弱勝レ强也一」とあつて、點を加へた部分は老子の語に似てゐるが、韓非の文例から考へると老子の語を引くごとに故曰の二字を冠してゐるのに、此句に之なきは此れ喩老作者の語で老子の本文でなからう。果してさうであれば此二句は古き解說が本文に竄入したものに相違ない。

(三) 國字傅奕本邦に作る、韓非喩老所引と同じ。然し莊子胠篋篇に此語が引かれて國字に成つてゐるから、もとから國字であつたらう。而して說苑君道篇に此句を引いて示字を借に作り、淮南主術訓高誘注に引いた文は假に作つてゐる。

右河上公本には微明章と名づけてゐて、是謂微明の句に重きをおいてゐるが、此句は却て後人の解說の語であるらしく、古い部分は(一)と(三)であるらしい。(一)に於ては初四句張强一韻、次四句も周書の文に從へば韻がある。而して(三)は淵と人とが韻である。此等の文は陰謀家の言らしく、老子の自然自化の說に矛盾するといふので、蘭嵎や履軒は之を疑つてゐる。而して此中に明に周書の語がある。所謂周書は蘇秦が學んだ周書陰符の謀であらうから、此章は蘭嵎や履軒の疑つた通り老子の語でなからう。

(一) の意は說明する迄もなく敵國を弱くするには姑らく强くし、取らんとするには先づ姑く與へよといふ術策である。

(三) は國の利器を人にかすなかれといふ點が主眼である。いふ所國の利器は君主の陰謀術策で、君主は之によつて其地位を保つこと恰も魚が淵水に於て生息する如きものである。君主權謀をはなるれば魚が水を離れたるに似てゐるから、之を人にかすなかれといふ意であらう。果して然らば此節も亦陰謀家の語で老子の言であるまい。

第三十七章

(一) 道常無爲、而無不爲。侯王若能守之、萬物將自化。化而欲作、吾將

鎮之以無名之樸。(二)樸雖小天下莫能臣。侯王若能守之萬物將自賓。天地相合以降甘露民莫之令而自均。(以上三十四字 舊在三十二章) 無名之樸。(三)夫亦將無欲不欲以靜天下將自定。

校異 (一) 侯王の二字釋文によると梁武本には王侯と成つてゐたといひ、現に傳奕本は王侯に作つてゐる。馬氏の老子覈詁には四十二章の王注の中に王侯の字があるから、王弼本ももとは王侯に作つたらうといつてゐるが、東條一堂は十章の王弼注に此章を引いて侯王に作つて居るから、王弼本は矢張侯王に作つたに相違ないといつてゐる。二說を比較して考へると東條氏の說が妥當である。景龍碑は守之の之字なく樸を朴に作つてゐる。(二)は第三十二章の文であるが彼章に於て意味の連絡が悪い。而してその文體は此章第一節に類して、三十二章此節下の王注に或は「抱樸無爲」といひ、或は「此守其眞性、無爲則民不令而自均也」などといつて、無爲の字をくりかへし此章と關係ある如く解釋してゐるから試に此章に移した。

(三) 夫亦將無欲釋文には「吾將鎮之以無名之樸夫亦將無欲」十四字を標出してゐるから莫能臣釋文によると、王弼は臣字の下に也字があつたらしく現行本にも也字があるが、瀧川氏所藏舊鈔河上公本の欄外にあげた王弼本は也字がない。現行河上公本も傳奕本も皆也字が

ないから王弼本もなかつたであらう。河上公本は此三字を不敢臣に作る、不能も不敢も同じ意味である。自均の下河上公本と、傳奕本とには焉字がある。

(三) 夫亦將無欲釋文には「吾將鎮之以無名之樸夫亦將無欲」十四字を標出してゐるからの初に無名之樸の四字がなかつたらしいが、今いづれの本も此四字がある。又釋文によると梁簡文本は無欲を不欲に作つたとするが、現に河上公本も景龍碑も不欲に作り碑には夫の字がない。天下將自定の定字河上公本は正に成つてゐる。

(一) 道は萬物の生成する源であるが無爲無名である。もし侯王が道に從ひ無爲を守ることが出來れば萬物は自然に生々し變化して凝滯せない。然しこの生々變化の過程中には欲が作つて來る。乃でこの欲を鎮壓するために無名の樸を以てする。(二)樸は(或は朴に作る)人工を加へない木皮のついたまゝの材木で之に人工を加へて器となる。器には其用途に從つて種々の名があるが、樸にはたゞ素材のみで別に名がない。乃で之を名無の樸といつたのである。莊子馬蹄篇に「樸を殘して以て器となすは工匠の罪也」といつたのも此の樸である。乃で老莊の徒はこの樸を以て無爲無欲の意をあらはす。莊子天地篇に「無爲復樸」といひ馬蹄篇に「同乎無欲是謂素樸素樸而民性得矣」といふ皆其例である。器にはそれぞれ用途がある如く、一器

の人物はそれぞれ使ひ路はある、素樸の人は一見つまらぬやうにも見えるが人の臣下となつて使はれる底の人でない。もし侯王が素樸を守れば天下萬物は自然に其德に來り歸し、天地も其德に應じて瑞兆を示し、甘露を降してこと〴〵しく敎令を出さなくとも人民は自然に和合するであらう。(均は韻と同じ字で音聲の和諧する意、こゝにてはたゞ和諧の意であらう)(三)樸とは語をかへていへば無欲の事である。乃で無名之樸ならば夫れ亦將に無欲なるべしといふ。欲がなければ心は自ら平靜で治めずして天下は自ら定るものである。此章釋文に「河上者非老子所作也」と注して居るが其意味が明かでない。瀧川氏所藏舊鈔河上公本の欄外に賈大隱の老子述義を引いて「梁簡疑此章非老子所作」と記してある。釋文河上者三字は「梁簡疑此章」の五字の誤りであらう。此章(一)爲爲化韻、作樸韻(二)樸欲韻、靜定韻、今此に移した(二)も臣、賓、均に韻をふんでゐて可なり古い文と思はれるが、梁の簡文帝は之を老子の作でないといつた。此章に於て疑問になるのは侯王の文字である。王侯といへば王と諸侯であらうが、漢人は諸侯を侯王と稱してゐる。諸侯を侯王と稱することは早くとも戰國齊梁が王と稱した以後の事で、老子既に歿した後の事であるから簡文帝の疑ひも一應は尤であらう。

道德經　上篇　終

老子德道經　下篇

第三十八章

上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德、上德無爲而無不爲、下德爲之而有不爲、上仁爲之而無以爲、上義爲之而有以爲、上禮爲之而莫之應、則攘臂而扔之、故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、夫禮者忠信之薄而亂之首、前識者道之華而愚之首、是以大丈夫處其厚、不居其薄、處其實、不居其華、故去彼取此、

校異　上德無爲而無不爲の無不爲の三字を現行王弼本には無以爲に作つて、下德爲之而有不爲の有不爲を有以爲に作つて居るがその注義によると上德の句では無不爲に作つたことが明瞭

で、下德の句は上に對照して考へると今改めた如く作るべきことが推測せられる。韓非解老篇には上句を今改めた通りに作り、傅奕本に下句を無以爲に作つてゐて范應元の見た王弼本も傅奕本と同じであつたといふが、王弼注を熟讀すると現行本下句は經注ともに誤つてゐて今改めた如くに訂正すべきだと思ふ。扔之　諸本仍に作るも王弼本は扔に作る。愚之首也の首字今の王本には始字に成つて居るが解老には首に成つてゐて注によると王氏原本も亦首に作つたらしいから今改めた。要するに此章現行王弼本は河上公本の經文で校訂されて居て、注文と一致しない。今その注義により諸本を參考して出來得るかぎり王本の舊形に還した。

此章は其文體から見ると韻がなく、其内容から考へると儒家に反抗する氣分が濃厚で、比較的新らしい文章らしい。而して失道而後德以下の數句は莊子知北遊篇によると黃帝の言であつて、戰國時代に假託された黃帝書から取つて五千言中に編入された文章であらう。大體に於て道家言であることは疑を容れぬが老聃の言とは考へがたい。

德とは身に得たもので、上德は道から身に得た所のものである。故に上德の人はたゞ、道に因依のみで己の德と思はないが、其己の德と思はない點が即上德たる所以である。故に上德下レ

德是以有レ德といひ、又上德無爲而無レ不レ爲といふのである。儒家の徒は仁義禮智を德と考へて此德を失はざらんことをつとめるが、その所謂德は一方に偏した德で闕くる所がある。是は道家からいへば下德といふべきである。故に下德不レ失レ德、是以無レ德といひ、また下德爲レ之而有不爲といつたのである。仁とは中心から人を愛する德で、上仁の人はその本性の慈愛心に從つて誠心から人を愛するのみであるから、仁を行ひながら自己が仁を行つてゐるといふ自惚れがない。乃で上仁爲レ之而無二以爲一といふべきである。仁は義に較べると主觀的な德であるから仁に安ずる人は道家の上德と差程距離はないが、義になると大分隔つてくる。義は人として當然行ふべき道で、義を行ふには理の當然であるか否やを考慮せねばならぬ。この人間の考慮の加はつた所が、自然の道から隔たる原因であつて、上義の人でも義を行ふには自己が行ふといふ意識が伴ふ。乃で上義爲レ之而有二以爲一といつたのである。仁義は抽象的であるが禮は形式的で、甲が乙に對して禮を行へば乙は甲に對して返禮せねばならぬ。もし返禮を懈ると彼は不都合な奴だと臂をつかんで引張り責める氣分になる。乃で上禮爲レ之、而莫二之應一則攘レ臂而扔レ之といふのである。かくの如く道から德、德から仁義禮と下るに順つて道から離れてくる。乃で失道而後德等といつたのである。仁には未だ忠信があるが禮となると忠信が失はれて形式に傾むき爭の本となる。故に禮忠信之薄而亂之首といふ。前識は人より先に物を識るといふ意で智

者を指す。然し所謂智者は道の本質を知らないで道の華やかにあらはれた末の事を知るものであるから愚の首といふべきである。乃で大丈夫は忠信の厚きを尊んで薄きをさけ、道の本質を守つて英華をさけんとするものである。禮智を去りて德を取るものである。乃で去彼取此といつたである。

第三十九章

(一)「道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物負陰而抱陽、沖氣以爲和。」

(二)四十二章昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下貞、其致之一也、(三)天無以清將恐裂、地無以寧將恐發、神無以靈將恐歇、谷無以盈將恐竭、萬物無以生將恐滅、侯王無以貞將恐蹶。

(四)故貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自謂孤寡不穀、此非以賤爲本邪非乎、故致數譽無譽不欲祿々如玉珞々如石、」

攷異 (一) は第四十二章中にあつて此章にないが彼章に於て文章が連續せないから姚姬傳の說に從つて此に移した。姚氏は其著老子章義に於て此に歸したが其理由を說明して居らぬ。然し文選游天台山賦注に老子の道生一の文を引いて其下「王弼曰一數之始而物之極也」とあるが、此王注は四十二章になくて此章の初めにある。此れ姚說の空論にあらざるを證明するものであらう。此節の首「道生一」の句は淮南子天文訓及精神訓に引かれた文にはない。

(二) 天下貞の貞字河上公本は正に作る。致之一也の一也二字河上公本になくて傅奕本にある。此下王注に各以其一致此清寧靈盈生貞とあるから王本も一也の二字があつたのであらう。

(三) 無以貞の下傅奕本而貴高の三字あり、河上公本と現行王弼本とは皆無以貴高に作るが、范應元の古本には無以貞に作つて而貴高の三字がない。此句は(二)の爲天下貞の句に應ずるのであるから范應元本が尤も正しい。

(四) は他章の錯簡で此章に關係ないらしい。

(一) の道生一の一句は淮南子に從つて刪るべきであらう。一生二の一は即道で、二は陰と陽とで、三は更に沖氣を加へたのである。道が現象となるには先づ陰陽二氣が現れ、二氣の

交合によつて沖氣を生じ、此陰陽沖の三によつて萬物が生ずるといふのが老子の宇宙生成論である。

(二) の「一」の字も皆道のかへ名である。道は數よりいへば一、量よりいへば大、故に老子中には道を一と呼ぶこともあり、大と名づけた事もあり、道家言中には又大一と稱したものもある。天が清くすみ、地が寧に、神が靈に、谷(川谷の意)が盈ち、萬物が生じ、侯王が天下の貞幹となる、皆道によるのである。(貞幹の字は莊子列禦寇篇に見ゆ、易の文言傳に貞は事之幹也とあるから貞幹は政事の主宰者たる意であらう)

(三) 清明でなければ天は毀れるであらう。地に安靜の德がなければ物を藏すことが出來ない(發は發泄の意で物を泄すをいふ)。神に靈妙な德がなければ神は消滅するであらう。川谷に水を盈たす德がなければ枯渴するであらう。萬物に生生の德がなければ萬物は死滅するであらう。侯王に貞幹たるべき德がなければ顚覆するであらう。而して此等は皆一即道から出る德であるから道は萬物の本源である。

第四十章

(一)反者道之動、(二)弱者道之用。天下之物生於有、有生於無。

教案 (一) 天下之物の之字、現行王弼本も河上公本も萬字に作つてゐるが傅奕本では之字に成つてゐる。王弼の注によると其原本は之字であつたらしい。此四句河上公本には去用章として獨立した章としてゐるが、魏源の老子本義には上章と併せて一章となし、姚姬傳の老子章義には下章に連ねて一章と見てゐる。兩說のいづれに從つても落付きがよくない上に、此四句の中上二句には韻をふんで後の二句には韻をふまず、其意味の連絡もよくないから此章は(一)(二)との二つに區別すべきであらう。

(一) は道の動くは反、道の用は弱といふ意味で、主格と賓格を倒においてゐるのは韻を合するが爲である。反とは第二十章に「遠曰反」といつた反字、第十六章に「萬物並作吾以觀其復」とある復字、第五十九章の早服の服字と同じ意味で、四十一章の「進道若退」とあるも此句と同じ意味である。弱とは柔弱卑弱などつゞく語で老子の內に屢々くりかへされてゐる。而して此二句の意味は凡ての現象は道より出でゝ道に反るものであるが有道者は常に反るといふことを忘れぬ。反るを忘れぬ實際の修養法としては弱を守ることであるといふにあるらしい。

(二) は三十九章に「一生二、二生三、三生萬物」といふと同じ意味で彼章では道を數から見て一といつたが此章では道の本質からいつて無といつたのである。

第四十一章

(一)上士聞道、勤而行之、中士聞道、若存若亡、下士聞道、大而笑之、不笑不足以爲道、故建言有之、(二)曰明道若昧、進道若退、夷道若類、(三)上德若谷、大白若辱、廣德若不足、建德若偷、質眞若渝、(四)大方無隅、大器晚成、大音希聲、大象無形、道隱無名、夫唯道善貸且善成、

校異 (一) 大而笑之　現行王弼本及河上公本には大笑之と成つてゐるが牟子理惑論、抱朴子微旨篇には大字の下而字がある。上の勤而行之の句に對照すれば而字のあるのが正しい。傅奕本は上句及此句ともに而字が句の初になつてゐるがこれは顚倒であらう。范應元の古本に上句は勤而行之に作つて、此句は而大笑之となすは上句は正しくして下句は傅奕本の誤りを襲うてゐるのであらう。

(二) の初の曰字は現行王弼本にも河上公本にもないが傅奕本と范應元本とにあつて、范注に河上公本は曰字がないが王弼、孫登、阮咸本は皆曰字があるといつてゐるから、王弼眞本は曰字があつたであらう。若類は河上公本は若類に作る。類は平かならざる意で、夷は平

の義であつて上の句明昧進退相對してゐるから此句も夷と類と對すべきで、河上公本が類と成つてゐるのは誤りである。上德若谷の谷字成玄英は一本俗に作るといつてゐる。永壽靈壺齋所藏敦煌本には谷字を俗に作つてゐる。偸は谷の異體の字で俗に作るは異體の字から誤つたのであらう。大白若辱の辱字傅奕本䎽に作る。辱は䎽の假借で黑い意味である。建德若偸の偸字河上公本には揄に作り、傅奕本𨑓に作る。說文には媮字あつて偸字なく、媮は即偸の古字である。王弼注に「偸匹也、建德者因物之自然、不立不施、故若偸匹」とあるが、その意が明かでない。想ふに王注偸匹は偸竊の誤りであらう。竊は略體を窃に作るから誤つて匹となつたのであらう。河上公注に此字を引と注してゐるから、其本文は揄であつたらう。從つて王本は偸河上本は揄に作つたに相違ない。質眞若渝の渝字、傅奕本は輸に作り又質眞の眞字河上公本には直に作つて質朴之人の義としてゐるが、この下の王弼注には質眞不移其眞」といひ、又第五十章の王弼注にも不以欲渝其眞といふ句があるから王本は眞字に作つたに相違ない。夫唯道善貸且善成　河上公本及現行王弼本は成字の上に善字がないが傅奕本にはある。范應元の見た王弼本には善の字があつたといつて、王弼註によると王弼原本は傅奕本と同じくあつたに相違ないから今補うておいた。

此章は第二十五章と併せて考ふべき章である。第二十五章には老子の所謂道は名狀すべき言葉がないから、かりに道と名づけ又强ひて說明すれば大といふべきだと述べてゐるが、此章(一)は大道は名狀すべからざるものであるから上士でなければ理解出來ぬことを述べたのである。道は名狀すべからざるものであるが、上士は尙よく之を理解して勤めて之を行ふ。中士は之を說明しても明瞭に理解出來ず信疑相半ばす。下士に至つて大法螺だとして笑ふ。然し下士にわかる樣では本當の道でない。下士に笑はれる所が本當の道である。乃で立言者は次の如く說明する。

(二) 大道は光輝あるものなれども光あつて耀なきが故に昧きが如くに見える。道を爲むる人は之を損して又之を損し、無爲に至らんとするのであるから進道は退くが如くに見える。大道は甚だ平夷であるが平夷ならぬやうに見える。道は斯の如く矛盾を包容するものであるから上士でなければ理解が出來ぬ。

(三) 此大道を體得する上德の人は自ら其德を德と思はないから、其心は曠(むし)谷くして谷の如くである。大白若辱、廣德若不足の二句は莊子寓言篇に老聃が楊朱に敎へて大白若辱、盛德若不足といつたのと略同じであるが、大白若辱の四字は前後句に對して唐突な感じがするから、恐らく大方無隅の句の後にあるべきであらう。上の進道若退、夷道若類の二句が傅奕本と後漢

張衡傳注に引かれた老子とに於ては句を前後してゐるのを見ても、此章の句の順序が必ずしも動かすべからざるものでないことがわかる。想ふに大白若辱の句が現行本の位置に來たのは莊子寓言篇によつて後人が改めたものであらう。(そこで此句は後にうつして解釋する)廣德は莊子は盛德に作り淮南子說林訓には大德に作るが皆同じ意味で、德の大なる人はあれどもなきが如く、實れども虛しきが如くであるといふ意、建德若偸の句王弼注によると老子の所謂立德者は自ら立てず、自然に因循するばかりであるから偸(ぬす)むやうであるといふ意。質眞若偸とは道の眞精を會得した人は信あつて變らない筈であるが變るが若く見える。

(四) 上に述ぶる如く、道と道を得た得者とが矛盾を包むのは何が故であるか、これは道が大きいからである。道は大白、大方、大器、大音、大象といふべきである。大白といつても黑と對する白ではないから大白若辱ともいへる。大方であれば隅はない、大器であるから一朝一夕に作られたものでない。大音であるから耳にきくべき聲もなく大象であるから目に見る形もない。無形無聲のものであるから形狀する事も出來ず無名といふより外はない。此無名の道がよく萬物を化育しよく萬物を生成するものである。

第四十二章　七十六章、四十章

(一)「人之生也柔弱、其死也堅強。草木之生也柔脆、其死也枯槁。故堅強者死之徒、柔弱者生之徒、是以兵強則滅、木強則折。強大處下、柔弱處上。」以上舊在七十六章

(二)「故貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自謂孤寡不穀、是其以賤爲本也非歟。」以上舊在第四十章

(三)「人之所惡、唯孤寡不穀、而王侯以自稱也。」故物或損之而益、或益之而損。人之所以教我、而我之所以教人、強梁者不得其死、吾將以爲學父。

攷異　右三節の内今本老子の四十二章にある語は(三)のみで(一)は七十六章の語(二)は四十章の文である。

(一)　草木の上に現行老子の多くは萬物の二字があつて傅奕本のみがない。然し瀧川氏所藏舊鈔河上公本の欄外に賈大隱の述義を引いて「諸家本無萬物字、與河上公本別」とある

によつて考へると、河上公本だけにこの二字があつて王弼及其他のテキストにはなかつたらしい。而して下の枯槁といふ字から判斷すると萬物の二字がない方が正しいと思はれるから之を刪つた。堅強者死之徒以下二句、淮南子原道訓に柔弱者生之幹也而堅強者死之徒也とある。兵強則滅、木強則折の二句道藏王弼本は「兵強則不勝、木強則共」と成つてゐて、聚珍板は共字を兵に作つてゐるが、列子黃帝篇に引かれた老聃の語は今改めた通りである。滅と折と韻が協ふからこれが正しいのであらう。蓋し今本は河上公本によつて改められたもので、河上公本が折を共に作るのは篆文の似て居る爲め折の字が兵に誤り、次に共にあやまり共字に韻を合す爲に滅を不勝にしたのであらう。

(二)　貴以賤爲本の二句舊鈔河上公本には兩以字の上に必字があり、淮南子道應訓群書治要意林等に引かれた句にも必字があつて、淮南原道訓には本の字を號に作つてゐる。不穀は景福碑及舊鈔河上公本には不轂と成つて居る。穀と轂とは古通借された例が多いからいづれにしても通ずる。是其以賤爲本也非歟の句今行王本は非以賤爲本耶非乎に作る。蓋し河上公本によつて改むる所、今范應元所見王本によつて改めた。

(三)　人之所以教我以下二句現今王弼本は「人之所教亦我教之」とあるが、是れは河上公本によつて改められたもので、今范應元の引ける王本によつて校正した。王弼注文によつて

見ると范氏所見本の正しいことが判る。學父河上公本敎父に作るが范應元本は學父に作る。永譽靈壺齋所藏敦煌本及夷夏論引又同じ王本ももとは學父であつたらう。

右第四十二章と七十六章と四十章とを補綴して陳ねたのであるが、その（一）と（二）とを連ねた理由は淮南子の原道訓に此等の語をつゞけて引いてゐて、漢人の見た老子がかくあつたと思はれるからである。試みに淮南子の文を譯載すれば次の如くである。

道を得るものは志弱くして事强く、心虛しくして應當る。所謂志弱しとは柔毳安靜恬然として慮るなく、動いて時を失はず、萬物と回周旋轉して先唱せず、感じて之に應ず、是故に貴者は必ず賤を以て號となし高者は必ず下を以て基となす。小に託して以て大を包ね、中にあつて外を制し、柔を行ひて剛に、弱を用ゐて强く轉化推移し、一の道を得て少を以て多を正すなり。所謂その事强しとは變にあひ急に應じ患を排し難を扞きて力勝たざるなく、敵として凌がざるなく、化に應じ時を揆りて、よく之を害するなし。是の故に剛を欲すれば必ず柔を以て之を守り、强を欲すれば必ず弱を以て之を保つ。柔をつめば剛に、弱をつめば强し。そのつむ所をみて以て禍福の鄉を知る。强は已に若かざるものに勝つも已に若くものに至つては勝つ能はず、柔の己にまさるものに勝つは其力量るべからざるなり。剛を欲すればより以下此に至るまで列子黃帝篇には弱子の語となす　故に兵强け

れば滅し、木强ければ折れ、革固ければ裂け、齒は舌より堅きも舌に先して蔽す、是故に柔弱は生の幹也、而して堅强は死の徒也、先唱は窮の路也、後動は達の原也。

右淮南子の文中今本老子の第七十六章と四十章との語が連引されて志弱事强の說が述べられてゐる點を考へると、漢初の老子は此等の語が連續してゐたと思はれる。假りに一歩を讓つて此は淮南子の作者が離れてゐる二章の文を點綴したものと解しても、漢初の學者が此二節を同じ意味を述べた語と見た事は明瞭である。次に（三）について考へると、その初に小活字に現はした十六字が（二）の注釋とも見られ得ること、及强梁者云々の語が前二節の文と相まちて意味が完全することゝ合せ考へて（三）の（一）（二）との關係を想像することが出來る。そこで今之を合せて此にのせた。然し三節の中有韻の語は（一）のみにあつて、その部分のみが列子の黃帝篇に老聃の語として、引かれてゐるから（一）は老聃の語であらうが（二）と（三）とは後學の傳衍であらう。而して（三）の强梁者不得其死の一語は說苑敬愼篇や家語によると黃帝金人銘の語であるから、此等の節は道家後學が黃帝に假託された語を引いて老子の言を說明したものと思はれる。さてこれらの文の意味は

（一）人の生きてゐる時は柔いが死すれば堅くなる。草木も生きてゐる間は柔いが枯るればかたくなる。乃で生けるものは柔弱、死せるものは堅强といひ得る。兵强きものは戰を好んで

早く亡び、強木は風に折られるのも柔弱が生の徒で堅強が死の徒であるからである。又樹木を例證として考へると強大なる部分即根幹は下にあつて柔弱なる枝葉は上にある。故に強大を欲するならば下にあるべきである。(二)乃で貴は賤を本となし、高は下を基となすといひ得る。侯王の高貴を以てして自ら孤、寡、不穀など稱するのは是れ賤を以て本とするものである。

(三) 故に世の中の事は損することが益すことになつて、益すことが却て損する事になる。これは老子が我に教へた所で、我が後人に教ふる所以も此にある。黄帝銘に強梁者不得其死とあるが此一語は實に吾の處世の教條である。

金人銘には強梁者不得其死、好勝者必遇其敵とある。強梁とは剛強にして跳梁するものの意で、自ら強きをたのみ跋扈跳梁するものは、難に遇ひ變死するもので天命を以て死し得ぬとの意。學父は斅父の省字で教父と同じ意。

第四十三章　第七十八章

(一)天下之至柔、馳聘天下之至堅。天下莫柔弱於水、而攻堅強者莫之能先、出於無有、入於無間。以其無以能易之也、吾是以知無爲之有益也、

(二)不言之教、無爲之益、天下希及之。

校異 (一) の内小活字で示した部分は第七十八章の語であるが、彼章に於て連絡がよくなく寧ろ此章の注解の様に見えるから此に移した(二)。は第二章の錯簡で此所に於て不必要な語である(第二章參照)。出於無有の出於の二字は現行王弼本に缺けてゐるが傅奕本及淮南道應訓に引かれた文にはある。而して此下王注に「氣無所不入、水無所不出。於經」とあるが出。於の二字は本文の注に誤入したものらしいから王弼本ももとは傅奕本と同じであつたらう。天下莫柔弱於水の七字河上公本には天下柔弱莫過於水に作る。莫之能先の先字、河上公本と開元碑とは勝に作つた。傅奕本と景龍碑とは先に作つて居る。王弼には此句に注がないから明かでないが河上公注によれば河上公本が勝であることは明かであるから先に作る方が王弼系であらう。以其無以易之也の上の以字世德堂刊河上本と景龍碑にないが舊鈔本にはある。王弼注に先づ以字を注して次に其字を注してゐるから王本にも以字はあつたに相違ない。

此章に七十八字の語を移し入れたのは淮南子原道訓に

聖人清道を守りて雌節を抱き、因循應變、常に後れて先んぜず、柔弱にして靜、舒安にして

定、大を攻め堅を礪きて能く事と爭ふなし、天下の物水より柔弱なるはなし。然り而して大極むべからず、深測るべからず、脩く無窮を極めて遠く無涯に淪み、息耗減益不營に通ず……是を至德といふ。夫れ水の能く其至德を天下に成す所以のものは、其淖溺潤滑なるを以てなり。故に老聃の言に曰く天下至柔、馳騁天下之至堅、出於無有、入於無間、吾是以知無爲之有益とあるからである。淮南に於て今大活字の部分だけが老聃の言となり、小活字の部分は老聃の語と言明せぬ點は小活字の部分が後人の傳衍解說だらうと想像せしむる所以である。此章は第八章上善若水の語と併せ考ふべきで、道家が水を以て道に譬へたことが知られる。天下の至柔といつたのは即水の事で水は無有即無形なもので無間(極めてせまいところ)にまで浸みこむ。この浸み込む事が出來るのは定形がないからである。そこで水を見て無爲の益あることが知られる。

第四十四章

名與身孰親、身與貨孰多、得與亡孰病、是故甚愛必大費、多藏必厚亡、知足不辱、知止不殆、可以長久、

考異 是故の二字河上公本になく傅奕本と王弼本とにはある。近頃の學者中に此二字は意味がないといふ人もあるが、韓詩外傳卷九は此章を引いて是故の二字があるから、王弼本に此二字あるはその舊形を保つて居るのであらう。此章每句、句中の字と句末の字と韻をふんでゐて古い語である。

身と名と貨とはいづれが貴いであらうか、云ふまでもなく身體は名譽財產よりも貴重である。然るに人は名譽財產を得るに汲々としてゐる。然し得ても失つても同じことである。何となれば餘り吝嗇であれば思はぬ損失を來して一文吝みの百知らずとなる。財產の多い人は必ず損失も大きい。乃で財產はあつてもなくても同じ事である。名譽も亦同じ事である。名譽財產より貴重な身體の長久なるべき道は、知足と知止との二つである。足るを知れば辱められることなく、止まるを知れば危殆に陷る心配はない。

第四十五章

(一)大成若缺、其用不弊、大盈若沖、其用不窮、

(二)大直若詘、大巧若拙、大辯若訥、其用不屈。

(三)躁勝寒、靜勝熱、清靜爲天下正。

攷異 (一) 大盈　傅奕本永壽靈壹齋藏敦煌本大滿に作つて、范應元の見た王本も滿に作つたといふ。第四章釋文に盈一本亦滿に作るとあるから、陸德明が見た本にも盈に作るものと滿に作るものとあつたであらうが、いづれにしても意義に相違はない。此節二句づゝ韻をふむ。

(二) 若詘　今本若屈に作る。傅奕本と韓詩外傳に引かれた本は詘と成つて居る。又韓詩外傳には此節第二句と第三句とを倒にして其次に其用不屈の一句がある。想ふに外傳引くところはその古い形であらう。此節詘訥拙屈韻。

(三) は韓詩外傳に引かれた文にはなくて意味の連絡が惡い。姚姬傳の老子章義には之を第五十七章の錯簡としてゐる。

(一) 大成と大盈とは道をいふのであらう。第二十五章に物あり混成し天地に先つて生ず、强ひて名づけて道といひ又大といふとあるは即此章の大成である。又第四章に道冲而用又不盈

とあるは此章の大盈である。道は天地萬物を包むも形體がないから大成若缺其用不弊といつたのである。道は天地間に盈つれども冲の如く、而も萬物の宗であるから大盈若冲其用本窮といふのである。

(二) 上の四句は道について述べたらしいが、此四句人事についていつた樣に見える。一般に直と詘、巧と拙、辯と訥とは反對のやうに思はれて居るが、大直は詘の如く、大巧は拙なるが如く、大辯は訥なるが如く見える。其詘拙訥なるが如く見えるのが即其大なる所以で、其用はつきざるものがある。

第四十六章

(一)天下有道、却走馬以糞、天下無道、戎馬生於郊。

(二)禍莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足、常足矣。

攷異 (一) は後の文に關係がなく、且韓詩外傳には第四十四章全部と四十五章の (一) と此章の (二) とを連ね引いて此の (一) はない。想ふに此章の (一) は他章の錯簡であらう。

姚姬傳は之を第五十七章の文だといつて居る。

(二)の初に河上公本には罪莫大於多欲の一句あつて王弼本に缺けてゐると釋文に記されてゐる。韓非子解老によると河上公本が正しい樣に見えるが、韓詩外傳に引かれた文は「罪莫大于多欲、禍莫大于不知足」と成つて居るから、河上公本の初一句は咎莫大於欲得の異文であらう。罪と咎とが意近く多欲と欲得とも同義であるから、此の如く重複する句が最初からあらう筈はない。

此章(二)の意は第四十四章知足知止の敎を演說したもので、韓詩外傳が上二章と連引したのは意味ありげに見える。其解釋は別に述べる必要もなからう。

第四十七章

不出戶而知天下、不闚牖而知天道、其出彌遠、其知少、是以聖人、不行而知、不見而名、不爲而成

攷異 而知の二字現行王弼本は而字なくして下句知字を見に作つて居るが、王弼注に「故不出戶闚牖而可知也」といつて居るから原本は右の如くであつたらう。淮南主術訓に此兩句を載せてゐるが之も今改めた所と同じである。舊鈔河上公本は而字を以として傅奕本は可以の二字にしてゐる。而と以は相通ずるが傅奕本に可以に作つたのは王注により後人が可字を加へたのであらう。不行而知の知字畢沅によると一本至に作るといふ。而名韓非喩老に引く所は而明に作る。鬼谷子本經陰符篇に

不出戶而知天下、不窺牖而見天道、不見而命、不行而至

といふ文を典引してゐるが、これ恐くは此章の古い形で(其出彌遠)等の二句は後人の解釋の法が竄入したもので(不爲而成)の一句も上句と關係がないから之も衍文であらう。不行而至の句は畢沅の一本と合し、命は名と音義俱に同じであるからいづれにしても通ずる。而して此章は鬼谷子に典引されて居る點から推測すると、これ恐らくは周書陰符の語で老子の言であるまい。其思想から見ても術策家の言に見える。

淮南主術訓中の一節はよく此節を解釋してゐる樣に見えるから此に之を譯載する。

人主深居隱處、以燥濕をさけ、閨門重襲して以て姦賊をさけ、內閭里の情を知らず、外

山澤の形を知らず、目帷幕の外を見る能はず、耳十里の前を聞く能はず、而も百歩の外天下の物知らざるなきは、其之を灌輸するもの大にして、之を斟酌するもの衆ければなり。是の故に不出戸而知天下、不窺牖而知天道、衆人の智に乘ずれば天下も有するに足り、專ら其心を用ふれば猶身を保つに足らざるなり。

これは此章の古い解釋で、之によれば此章は君主が世を治むるに衆人の智によれば深宮の内にあつて萬事を知ることが出來るといふ意である。

第四十八章

(一)爲學者日益、爲道者日損、損之又損之、以至於無爲、無爲則無不爲、

(二)取天下常以無事、及其有事、不足以取天下。

校異 (一) 現行王弼本は爲學、爲道の下に者字がないが傅奕本にはある。第二十章王注に引かれた此章の語に者の字がある點より考へると、王弼原本には者字があつたに相違ない。

無爲則の則字河上公本には而字になつてゐて、現行王本は河上公本と同じであるが、王注に「故無爲乃無所不爲也」とあつて、乃は則字を解釋したものであるから、王弼原本は傅奕本の如く則字であつたらう。又損之の之字は現今王本にも河上公本にもないが、古書に引かれた文は傅奕本と一致するから今補うた。

(二) は無事を說いて (一) が無爲を說くのと連續しない。想ふに此節は第五十七章の文が此に混じたのであらう。

此章初め一句は儒家の勸學說に反抗して爲道說を主張した樣に思はれる。所謂爲道とは無爲になることで、無爲となる爲に人爲を去ることが損之又損之の意であらう。かくて人爲を去り盡して自然に循ふが即無爲で、無爲となればそこに自然の妙用があらはれるのである。

此章全章韻をふまず比較的後世の語と思はれる。莊子知北遊篇に此章を引いてゐて、知北遊篇が黃帝の語に假託されてゐる所から想像すると、此章は老聃の言でなく、黃帝書の文であるらしい。黃帝書も道家言であるが老聃よりはやゝ後に出來たものらしい。

第四十九章

聖人無常心、以百姓心爲心、善者吾善之、不善者吾亦善之、〔德善〕、信者吾信之、不信者吾亦信之〔德信〕、聖人之在天下、歙々焉、爲天下渾心焉、百姓皆注其耳目焉、聖人皆孩之、

校異 無常心景龍碑無心に作る。河上公注に「聖人貴因循若自無心也」といひ、成玄英の疏にも「聖心無心、有感斯應」とあるから河上公本には常字がなかつたらしい。而して陸氏釋文に王河異同をいつてゐないから王本も常字がなかつたであらう。今諸本ともに常字があるのは以百姓心爲心の句下王注に動常因也とあるによつて誤入したのであらう。

德善及び德信の句舊鈔河上公本と傅奕本には句末に矣字あつて傅本は德字を得に作つてゐる。景龍碑にも得に成つてゐるが句末に矣字はない。想ふに此二句は古い注文の竄入であらう。而して德と得とは古字通用する。

聖人之在天下現行王本河上公本には之字がないが傅奕本にはある。王弼注によると王本ももとは之字であつたらしいから今補うた。又王注によると在は於字となつてゐるが諸本皆在

に成つてゐるからそのまゝにした。

歙々焉、爲天下渾心焉の句、今行王本は兩焉字なく渾心を渾其心に作つてゐるが、今王弼注に引かれた經文によつて改めた。范應元が見た王本も今改めた通りであるといふから此れが王弼本の原形であらう。河上公本は歙々を恍々に作つて、敦煌无注本は惔々に作り渾を混としてゐる。百姓皆注其耳目の七字武英殿板王本には缺けてゐるが明和本にはあつて、王弼注にも「百姓各皆注其耳目焉吾皆孩之而已」とあるから原は此句があつたに相違ない。孩字釋文によると咳であるが咳と孩とは今古文の相違である。

此章河上公本には任德章と名づけてゐるのはよく章意に當つて居る。聖人は固なく我なく無心にしてたゞ自然に因るのみである。換言すれば自然から賦與せられた德に任すにすぎぬ。無心にして自然によるとは更に説明すれば已れの主張をすて天下一般の意志に從ふことである。善きものは勿論善とするが不善者を包容して之を同視し知らず〳〵の間に德に化せしむる。信ある者は勿論之を信とするが不信なるものも之を信者と一視して自然に信に化せしむる。聖人の天下を治むるは歙々焉として天下の善惡信僞を渾して之を同一視する。歙々焉は王弼注によれば無心の形容である。百姓は皆其耳目を注いで聖人を視るが、聖人は善惡信僞を平等視して

自然に化せしむる。蓋し善惡信僞の差別は人間の目的を標準として定められた區別であつて自然から見れば同じであるから、這んな區別を滅棄して無心にして天下にのぞむが聖人の政治だといふ意である。

此章全般に韻をふんで居ないから恐らく後世の文で老聃其人の言ではなからう。

第五十章

(一)出生入死、(二)生之徒十有三、死之徒十有三、而民之生生而動、動皆之死地亦十有三、夫何故、以其生生之厚、(三)蓋聞善攝生者、陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵、兕無所投其角、虎無所錯其爪、兵無所容其刃、夫何故、以其無死地、

校異 (一)民之生生而動等三句、道藏王本、人之生、動之死地、十有三に作る。韓非子解老には今改訂した通りに成つてゐて、傅奕本も之と同じである。王弼注に「而民生々之厚更之無生之地焉」とあるから、王本も傅奕本解老と同じであつたらう。

(三)不被の被字武英殿本には避に成つて居るが、他の本は皆被となつてゐて釋文も被字を標出してゐるから、武英殿板は誤りであらう。錯字今の王本には措に作つてゐるが、解老と釋文に錯になつてゐるから王本は錯で錯は措の假借字、河上公本に至つて初めて正字に改めたのであらう。夫何故の下、聖語藏本に哉字があるが韓非子にはない。

(一)出生入死の四字は全章の意を總括したもので、人は生を求むるものだが實際に於て生を去つて死に入るものがあるといふ意味であらう。

(二)生之徒、死之徒は、舊本老子第七十六章「堅强者死之徒、柔弱者生之徒」(今第四十二章にうつす)の句によつて推測すれば、柔弱者と堅强者との意であらう。即此節の意は、柔弱を守るものは十中三人あつて此等は生の徒であるが、强堅を求むるものも亦十中三人あつて此等は死の徒である。人は生を求め死を避けんとつとめるものだが、實際に於ては生を求めんとしてもがいて死地に入る人が十中三人もある。これは何の故か、是れ生を求めるに急に過ぎるからである。

(三)本當によく生を保持するものは、陸を行くも兕虎の害にあはず、軍に入るも兵戈の厄に遇はぬ。是れ敢て生を求めて兕虎に迫らないから、兕虎も其爪角を用ふる事をせないのである。又敢て生を求めて戰を挑むことがないから、兵戈も其鋒刃を容るゝ餘地がないのである。

かくの如く兕虎兵戈の害を受けぬ理由は其人常に柔弱を守りて堅強をさけるが爲に死地がないからである。淮南子精神訓に「夫れ人の其壽命を終る能はずして中道刑戮に夭するは何ぞや、其生々の厚きを以てなり。夫れ惟能く生を以てするなきは則脩生を得る所以なり」とあるは全く此章の義をのべたものである。韓非の解老と河上公注には此章を養生術として說明してゐるが疑はしい。一體此章は韻をふんでゐないから或は老聃の言でなく、養生家言であるかも知れぬが、第七十六章の文と對照すれば今解釋した樣に說明すべきである。

第五十一章

(一)道生之、德畜之、物形之、勢成之、(二)是以萬物莫不尊道而貴德、道之尊、德之貴、夫莫之命、常自然、(三)故道生之、德畜之、長之、育之、亭之、毒之、蓋之、覆之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

校異 (一)勢字靈壺齋本熟に作つてゐるが他本は皆勢になつてゐる。(二)莫之命の下今本王注に「命並作爵」とあるが、これは王弼の注でなくて古人が他本に校して異文を注したものが王弼注に誤られたのであらう。傅奕本、范應元本及靈壺齋本は命の字を爵に作つてゐるが、河上公注によると其本文が命に作つた事は明瞭であるから、爵と成つてゐるのは王弼本であるかも知れぬ。(三)亭之毒之の二句河上公本には成之熟之に作るが傅奕本范應元本は亭之毒之に作つて、第一章王弼注に引かれた文、及び初學記卷九と文選辨命論注とに引かれた王本も傅奕本と同じであるから亭毒の字は王本に本づくものであらう、蓋之、河上本本には養に作つて現今王本も河上本と同じに成つてゐるが、傅奕本と范應元本と蓋はに成つてゐる。而して初學記卷九及文選注に引かれた王本も蓋になつてゐるから、今の王本が養に成つてゐるのは河上公本によつて校改された結果であらう。而して養字は蓋字の誤りであらう。

(一) 道が之を生じ德が之を養ふときは萬物皆その特有の形を現して、自然の勢によつて、その特質を成就する。

(二) 乃で萬物は皆道を尊び德を貴ぶ。道の尊く德の貴き所以は他から命ぜられる事なくして自然に萬物を化育する點にある。

(三) 道は萬物を生畜し、長育し、亭毒し、蓋覆するが、之を生じても自己の所有とせず、非常な働きをなしながら其功に矜らず、又之を長育しながら自ら主宰者と考へない。この點が

玄德といはれる所以のものである。

此等に於て（一）と（三）とは有韻の文であるが、（二）には韻をふんで居らぬから（二）は比較的後世に附加せられたものであらう。想ふに此章の古い形は（一）から直ちに（三）につゞいたもので（三）の初の故字は（二）が加はつたときに、は入つたものかも知れぬ。又（三）と略同じ文が第十章にあるが彼章に於ては「生レ之畜レ之生而不レ有云々」となつてゐて、生之の上に道字なく、畜之の上に德字なく、其下又「長之……覆之」等の句がない。想ふに第十章此等の語は（三）の異文で此節に於ける故、道、德の三字は衍文であらう。

此章と合せ考ふべきは蓼莪の詩である。詩に曰く、

父兮生レ我。母兮鞠レ我。拊レ我畜レ我。長レ我育レ我。顧レ我復レ我。出入腹レ我。欲レ報二之德一。昊天罔レ極。

と、詩の生鞠長育は老子此章の生畜長育と同じ意味で鞠或は畜は養ふ意である。長は長遂の義、育は覆育の義で例へば草木を培植するものが其根に培うて之を長ぜしめ、其枝葉を覆うて之を育てる樣なものである。亭之毒之の四字は現在王弼本に注がないが初學記卷九と文選辨命論注に王弼注を引いて「亭とは其形を品するをいふ、毒とは其質を成すをいふ」とあつて上の「物形之、勢成之」の意と解釋してゐるやうであるが亭毒の字に王弼が解する樣な意はない。陸氏

釋文によると毒字一本育に作るとあるが、上既に育字があるから釋文の所謂一本は誤りであらう。莊子人間世篇に「無レ門無レ毒」といふ句があつて崔譔本莊子は毒字を毎に作つたといひ、育字は毓にも作るから、釋文に所謂一本が育に作つたのは毒が毎になつて又毓に換られ遂に育となつたものであらう。亭の字は說文に亭は樓なり高の省に从ひ丁聲とあつて元來望樓の樣な建物で、敵情を視察する用に使はれたものをあらはす字であるが、後に轉じて安定の義に使はれてゐる。毒は壔の借字で、說文に壔は保也高土也讀んで毒字の若しとある。蓋し壔は後世の堡守に相當する字で土を高くつんで敵を防ぐに用ゐられたものである。從つてこの毒は堡と同じ義であるが今は保安の意に使はれたのであらう。從つて亭之毒之の句は之を安んじ、之を保んずと讀むべきで詩の拊レ我畜レ我と似た意義となる。蓋之覆之とは王弼注に物各其庇陰を得て其體を傷らずといつた意に相當する。

第五十二章

（一）天下有レ始。可二以爲一天下母一。既得二其母一。以知二其子一。既知二其子一。復守二其母一。殁レ身不レ殆。

(一)塞其兌、閉其門、〔終身不勤、開其兌、濟其事、終身不救〕〔見小曰明、守柔曰強、〕

(二)挫其銳、解其忿、和其光、同其塵、是謂玄同。以上五句十六字舊本在第五十六章」

(四)知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰強。以上四句十七字舊本在第五十五章」

(五)用其光、復歸其明、無遺身殃、是謂襲常。

考異 (一)は傅奕本を採つた。河上公本には始字の下に可字なく、得字を知に作り母字の下の以字を復に作つて殃を沒としてゐて、道藏王本は河上本と同じであるが王弼注を熟讀すると傅奕本の本文が王本の舊形であつたらしい。

(二)の初の二句は第五十六章にもあつて、彼章に於ては此二句の下直ちに(三)につゞいてゐる。(二)と(三)と門忿塵と韻をふんでゐる點から推すと第五十六章の文が老子の原形で修身不勤以下の四句は塞其兌閉其門の二句を傳衍した後人の語であらう。〔見小曰明守柔曰強〕の二句は前後に連絡なく、且韓非子喩老に於ても此二句を獨立して取扱つてゐるから此章にあるべきでなからう。

(三)は五十六章の文であるが彼章に於て意味が通らずして、此章(二)の初二句は彼章

に於ては此等の語の上に重出してゐるから恐らく此にあるべきであらう。

(四)は第五十五章の語であるが淮南子道應訓に此四句を引いて其下「是故用其光復歸其明也」とある。而して用其光云々の語は此章末節の語であるから、道應訓の作者が見た老子は(四)が此ところにあつたのであらう。又文子下德篇に「知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰強、是謂玄同、用其光、復歸其明」とあつて、其文淮南子に本づいたと思はれるが淮南子に比して是謂玄同の四字が多い。而して此四字が此章に移した和光同塵の句下にあることは此章(三)(四)との關係を暗示してゐる樣に思はれる。乃で此章を試に右の如くに整理したのである。舊本は(二)から(五)につゞいたもので(三)見小曰明句が(五)の復歸其明と關係する樣にも考へられるが今訂正したところによると(五)の用其光の句は(三)の和其光に對し、復歸其明の句は(四)の知和曰常の句に對し、而して(四)の知和は和光と關係があらう。而して(五)是謂襲常一句は(三)の是謂玄同と相對する句である。又(五)の用其光の上天文鈔河上公本と龍川本とには目字があるが其他の本にはない。恐らくは目字は河上公注義に從つて後人が加へたものであらう。襲常、河上本習常に作り、傅奕本襲常に作る。今の王弼本は河上公本と一致するが此章第一節の王注が傅奕本と合するより推せば此字も傅奕本か王本の眞を存してゐるのであら

う。襲習同音にして古へは通用された、周禮胥師の注に故書襲爲習といひ、尙書正義に習襲也とある。其例證である。

(一) 天下の母は道を指す。第二十五章「有物混成……可以爲天下之母……字之曰道」とある其證據であらう。天下は萬物の事で道は萬物の生ずる源であるから之を天下の母といふ。既に萬物の母たる道を會得すれば其子たる萬物は知るに易いことは勿論だが、又其子たる萬物を知つて、且其母たる道を守ることが出來れば終身不安はない。

然らば其母を守る方法は如何にすべきか、それは(二)と(三)とが說明してゐる。

(二) 塞其兌閉其門とあるは兌は耳目等の感覺機關で、門は口を指す。從つて此二句の意は感覺機關をふさぎ何事もいはずに居ることであらう。

(三) 挫其銳は情欲を抑へること、解其忿は憤怒を止めること、和其光同其塵とは獨見の才智をつゝんで凡俗と一致することである。この感覺に任せず感情に走らず智慧をつゝんで凡俗に同ずることは玄同と稱すべきことで、これが其母を守る方法である。

(四) 何故に玄同が母を守る方法となるかといへば、玄同はつまり和光同塵で、和を知ることが即常、(恒久の道)常を知るはやがて明といふべきである。益生曰祥の祥字は戕と同音で心

使氣曰强の强は僵の假借、この二句は(二)の「開其兌濟其事終身不救」の句と相應する語で此に必要かくべからざる語でない。或は後人の附益した文かも知れぬ。乃で其光即知慧を外に出さずに內につゝみ和げることによつて其明に復歸して常道を知らば殃をのこす憂はない。故に此の光を和げて明に歸ることは常道に入る道である。襲の字は此ところでは入ると解釋すべきである。

第五十三章

使我介然有知行於大道、唯施是畏。大道甚夷、而民好徑。朝甚除、田甚蕪、倉甚虛、服文綵、帶利劍、厭飲食、而資貨有餘、是謂盜夸、非道也哉、

攷異 〔田甚蕪、倉甚虛〕、は恐らく古い注文の竄入であらう。韓非子老篇に此章を解釋して書之所謂大道也者、端道也、所謂〔貌〕施也者邪道也、所謂徑〔大〕也者佳麗也、佳麗〔也者〕邪道之分也、朝甚除也者獄訟繁也、獄訟繁則田荒、田荒則府倉虛、府倉虛則國貧、國貧而民俗淫侈、民俗淫侈則衣食之業絕、衣食之業絕則民不得無飾巧詐、飾巧詐則知采文、知采

文之謂服、文采、獄訟繁、倉廩虛、而有以淫侈爲俗則國之傷也、若以利劍刺之、故曰帶利劍云々といふ。此解釋の中で老子の本文たるべきは點を施した文字のみで田荒府倉虛等の字は傳衍解釋の文の樣である。從つて今の老子本文に「田甚蕪、倉甚虛」のあるのは此等の文に本づいて竄入したのであらう。一般の說によると、朝甚除、田甚蕪、倉甚虛の三句は除蕪虛の三字で押韻してゐるといふが、かく考へれば其下服文綵等の句が韻が亂れる。私の考へは朝甚除、服文綵、帶利劍、厭飲食、四句を一節と見て綵食の字で隔句押韻したものと思ふ。乃で田甚蕪、倉甚虛の六字を小活字で出して注文と考へた。而資貨の三字は韓非解老の文に從つた。諸本多く財貨に作り范應元本は貨財に作り次解本は資貨に作つてゐる。いづれのテキストに從つても意味に變りはないが解老に而字があるのがよい樣に思ふ。盜夸解老は盜竿に作つてゐるが諸本は皆盜夸に作つて次解本は盜誇となつてゐる。誇は夸の假借であらう。

此章初の十字は知字で句を截つて二句に讀む人もあるが王弼は十字を一句と見てゐる。介然は荀子修身篇に善在身介然とあつて堅固の貌と注せられてゐる。こゝでは自信のある形容であらう。自ら信じて天下に大道を知らしめ行ふ地位に立つとしたら民に唯邪行を畏れしめたい。施は迤字の假借で邪行を意味する。大道は極めて平坦であるが一般の人はこの大道をはなれ細

道を好む。世の君主は賦斂を重くし自ら贅澤をし、宮室（朝）を潔好（除）にし、美しき衣服をまとひ立派な劍をさげて御馳走にあいてゐて而も猶巨額の財產を持つてゐるが、これは盜夸といふものだ。夸は奢侈の意味で盜夸は泥棒をして奢侈をするといふ意である。盜夸は大道にそむくこと甚しきもので、己れののぞむところでない。

第五十四章

(一)善建者不拔、善抱者不脫、子孫以祭祀不輟、脩之於身、其德乃眞。脩之於家、其德乃餘、脩之於鄉、其德乃長、脩之於邦、其德乃豐、脩之於天下、其德乃普、

(二)故以身觀身、以家觀家、以鄉觀鄉、以邦觀邦、以天下觀天下、吾何以知天下然哉、以此、

校異 （一）子孫以祭祀不輟傳奕本以字なく韓非子喩老「子孫以其祭祀、世々不輟」に作る。喩

老の其字は恐らく共字の誤りであらう。王弼注によると王本は右の如くであつたらしい。邦字諸本國に作り喩老と傅奕本とは邦に成つてゐて、下の豐字と韻が合ふから邦が正しいであらう。邦字は漢高祖の名であるから漢人が遠慮して改めたらしく、古書に此例がある。管子牧民篇に「母曰同國、遠者不從」とあつて國は從と韻せないが邦ならば韻をふむことになる。是れその一例である。景龍碑及世德堂本には祭祀の上に以字がないが舊鈔河上本にはある。次解本は兩者の字以の字なく、天下の上に於の字なく乃の字皆能字に作る。但其德乃餘の乃字だけは有字となつてゐる。

(二) 傅奕本此節の末句を吾奚知天下之然哉以此に作る。

(一) よく道に從つて德を立て、心を定める人は外誘に引かれたり情欲に動かされたりせぬものである。之を不拔不脫といふ。この道を以て家を守れば、其家世々たえず、子孫は祭祀をつぎ得るであらう。又此道を以て身を脩めたならば其德は眞、家を脩めても猶餘裕があり、國を脩めれば國豐かに、天下を脩むれば天下に普く行きわたるであらう。

(二) 上節は有韻の文であるが此節は韻がない。而して管子牧民篇に此節と類似した文がある。想ふに此節は道家の思想が齊に流れ込んだ頃即孟子以後に於て出來たもので上節に比し後

に附られたものであらう。其意味は上節をうけて以上の事は身を脩むる人が身に及ぼす效果を見、家を脩むる人が家に及ぼす結果を見、鄉國天下を脩むる人が鄉國天下に來たす結果を見て知ることが出來る。吾が道に從つて天下を脩むべしと知り得た理由は、身家鄉國天下を脩むるもの皆此の道に從へば效果のあるを知るからである。

第五十五章

(一)含德之厚、〔比於赤子〕毒蟲不螫、猛獸不據、攫鳥不搏、
(二)骨弱筋柔而握固、未知牝牡之合而全作、〔精之至也〕終日號而不嗄、〔和之至也〕
(三)〔知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰強〕
(四)〔物壯則老、謂之不道、不道早已〕

校異 (一) 傅奕本厚字の下に者字があつて其下四字を比之於赤子也に作り、范應元本は傅本に比べて之字がないだけである。毒蟲二字釋文によると王本は蜂蠆蛇虺に作るとあるが、そ

の注に「毒蟲之物無犯之也」とあるから王本ももとは毒蟲に作つたに相違ない。河上公本の本文は此と同じで、其注に蜂蠆蛇虺不螫也とあるより察すると、現今王本は河上公注によつて改められたものであらう。傅奕本に蜂蠆不螫といひ、范應元本に毒蟲蛇虺不螫に作つてゐるのは王本と河上公本との相違が出來た後に各取捨を異にしたものであらねばならぬ。

(二) 全字釋文によると河上公本は峻或は朘に作るとあるが、余が見た舊鈔本は皆峻に作る。峻或は朘は玉篇に赤子の陰也と見えてゐるが全の字では意味が通ぜぬ。俞樾は全字は含字のくづれたので陰の意だと解釋してゐるが之によるとよく河王兩本の關係を知り得るとともに此字の説明がつく。不嗄傅奕本嗌不歗に作る。俞樾は歗は嗄の異體の字だとし揚雄太玄經によつて漢代の老子は嗄に作つたといつてゐる。莊子庚桑楚篇に「兒子終日嘷而嗌不嗄、和之至也、終日握而手不挩、共其德也、終日視而目不瞚、偏不在外也」とある此章と似て、傅奕本に嗌字あるは莊子によつて補はれたものと思はれる。而して此章(一)(二)兩節の內括弧內に容れた句をのぞけば、韻文として完全なものであるが此等の句があれば韻が亂れる。想ふに此等無韻の句は莊子によつて補はれたものであらう。

(三) は五十二章に移し(四)は三十章と重複するから今は論ぜぬ。

(一) の內「比於赤子」の四字を削れば此一節は四句韻をふんで、德の厚きを形容して有德の人は蟲も獸も猛鳥も害を加へぬといつたのであらう。第五十章善攝生者陸行不遇兕虎云々といつたのも同じ意である。

(二) は莊子庚桑楚の文と深い關係のある文で、莊子が此と類似の句を衛生の經として述べて居るのによると、此等の語は衛生を説いた古い記錄から材を取つたものであらう。莊子によれば(二)の初めに兒子或は赤子の二字があつたのであらう。赤子は骨柔く筋柔なるも手をかたく握る。未だ男女關係を知らぬも陰根もたつ、終日號いてゐても聲をからさぬ。

第五十六章

(一)知者不言、言者不知、
(二)塞其兌、閉其門、挫其銳、解其忿、和其光、同其塵、是謂玄同、
(三)故不可得而親、不可得而疎、不可得而利、不可得而害、不可得而貴、不可得而賤、故爲天下貴、

攷異 (一) 傅奕本兩句の末也字がある。(二) 解其忿の忿字河上公本紛に作り景龍碑と道藏次解本は忿に作る。現行王弼本は分に作るが王弼此下に注して「除爭原也」と注して居るから分は忿の壞れたのであらう。(三) の初に傅奕本と聖語藏河上公本とは故字がなく、親利及貴字の下に亦字がある。范應元本も傅奕本と同じであつて、范注に河上公本は范本に同じだといつてゐるが王弼本は同じだといつてゐぬから今道藏王本のまゝにした。

此章河上公注には玄德章と名づけて一章と見てゐるが、(一) は莊子知北游篇によると第二章の錯簡らしく、(三) は無韻の文で後人の附益らしく、或は第五十一章の (二) につゞく文かも知れぬ。

(二) の初二句六字は第五十二章にあつて、其下四句は第四章にも見えてゐるから茲に說明する要もない。但此章に於て門忿塵と韻をふんでゐるから此節が尤も古い言葉で、第四章と五十二章とは此語を敷衍したものであらう。

第五十七章　五十八章

「(一)躁勝寒、靜勝熱、淸靜爲天下正、以上舊在第四十五章」

(二)以正治國、以奇用兵、以無事取天下、

「(三)取天下常以無事、及其有事、不足以取天下、以上舊在第四十八章」

(四)吾何以知其然哉、以此、

「(五)天下有道、卻走馬以糞、天下無道、戎馬生于郊、以上舊在第四十九章」

(六)天下多忌諱而民彌貧、民多利器而國家滋昏、民多智慧而邪事滋起、法令滋章而盜賊多有、故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸」

(七)其政悶悶、其民淳淳、其政察察、其民缺缺」以上舊在五十八章

攷異 (一) は舊本第四十五章の終にあるが今姚姬傳の說に從つて此にうつした。躁勝寒三字景龍碑は躁勝塞に作る、恐らく誤りであらう。淸靜の二字文選解嘲注に引かれた老子は知淸知靜の四字に成つてゐて傅奕本には知淸靖に作り、范應元本には以知淸靜に作るが、王弼注によると王本は矢張り右の如くであつたらしい。史記自叙傳に李耳無爲自化淸靜自正とある

も此句の節文であらう。

（二）正字傅奕本には政に作る。政と正とは古へ通用された事が多い。（三）は舊本第四十八章にあるが今馬叙倫氏の説によつて之に移した。（四）何以二字傅奕本奚字に作る。

（五）はもと第四十九章にある句であるが今姚姬傳の説に從つて此に移した。姚氏が之を此に移した理由は此等の語が彼章に於て連屬せずして（六）の初の句と、糞貧昏と韻が合するからである。糞字傅奕本には播に作るが糞と播とは同じ音で通用されたのであらう。又元の吳澄は糞字の下に車字があるべきだといふが、淮南子文選注等に引かれた老子には車字がない。車字を加へるのは文子の文を誤讀した爲である。

（六）民多智慧而邪事滋起の句河上公本には人多伎巧奇物滋起に作つて現行王本も河上公本と同じであるが、范應元の見た王本は今改めた樣になつてゐる。王弼注に「民多智慧則巧僞生、巧僞生則邪事起」とあるから范應元本が王本の原形で、全體に河上本によつて改められたものに相違ない。法令河上公本法物に作るが史記に引かれた文が法令と成つてゐるから王本法令に作るのが古い形である。

（五）と（六）との民字諸本或は人に作るは、唐の太宗の名を諱んだのであらう。

（七）悶々、淳々、察々、缺々、河上公本は淳を醇に作り、傅奕本には閔々、僖々、瞥々

缺々に作る。淳醇相通ず。此節舊本で第五十八章の初にあるが此章につゞくべきである。

舊本第五十七章の文は（二）（四）（六）の三節のみで他は他の章から移した。此改訂が果して古い形であるとも限らぬが舊第に比してやゝ條理ある樣に思ふ。（一）から（四）に至る一段は（五）以下と別に章をなすべきもので（四）の樣な句は老子に於て常に章の末尾にあることは兪樾の云つた通りである。乃で（一）から（四）までを一段とし、（五）から（七）までを別に一段として解釋する。

（一）寒いときでも急がしくして居れば寒さに勝つてあたゝかく、熱いときでも靜にしてゐれば、暑さにたへて凉しいものだ。即人は心の持ち樣により外界を左右することが出來るものであるから、老莊家は清靜を以て天下の正道となす、天下の靜とは（六）の我靜を好んで民自ら正しとあると同じ意である。天下を治むるものはこの正道即清靜を以てすべきもので、たゞ奇道を用ゐるは戰の場合のみである。乃で天下の民心を得るには無事を以てすべきものだ。

（四）凡そ天下の民心を得るものは常に無事を以てするもので、事をなさんとすれば必ず失敗する。吾は何を以て之を知るか、清靜が天下の正道たるを以て之を知るのである（已上一段、此内有韻の文は「清靜爲天下正」句のみであるから、大體此一段は後人が此句を説明した文で

あらう）

（五）天下のよく治まるときは、軍馬が耕作に使はれるが（糞は播の假借で播種の意であらう）戰亂の世には軍馬が郊外に出でてかへらず郊野に子を產む。人主が無爲に從はず種々の禁令などを出して、民生を拘束すると民は貧乏になり、民が兵器を多くそなへれば國家は昏亂するものだ（利器は兵器をいふ）。又民が智慧多くなれば自然に反する技巧が生じて其結果邪事が起る。又法令を嚴にすればするほど之を犯す盜賊も多くなるものだ。乃で聖人は無爲にして民を化し、靜を守つて民を正道に導びき、いらぬ事をせないで費用を節約し、無欲を旨として民を質樸に導く。（七）之を要するに、政治がテキパキせなければ民は淳樸になり、ユセツケば民は失望する。此一段は糞貧昏韻、起有韻、爲化韻、靜正韻、事富韻、欲樸韻、悶淳韻、察缺韻の如く全部有韻の文であるから古い道家言であらう。

第五十八章

（一）禍兮福之所倚、福兮禍之所伏。孰知其極。〔其無正、正復爲奇、善復爲妖〕人之迷、其日固久。（二）是以聖人方而不割、廉而不劌、直而不肆、光而不耀、

校異 舊本は（一）の前に前章（七）があるが今前章に移したから此のところに略する。（一）其無正の下傅奕及范應元本は邪字があるが王本と河上公本とにはない。其無正等十一字は古い注文であらう。韓非子解老によると禍兮句下に「以成其功也」の一句があるがこれ亦古い注文であらう。從つて此章中古注の竄入あるは略想像せらるべく此十一字も亦注文と思はるから、五號で表した。此節伏極久字に韻をふんでゐるがもしこれ等の句があれば韻が亂れる。（二）不劌、河上公本害に作る。王弼注に劌字を傷害の意に用ゐてゐるから河上公本は訓義に從つて改めたのであらう。淮南道應訓に引かれた文も王本と同じであるのは、王本が古いことを證明するものである。耀字釋文は女偏とし、今の王弼本は火偏とするが四十一章注に引かれたのは光偏であつて、而して河上公本は曜に作る。四字皆同意であるが韓非解老篇にも耀となつてゐるから今は四十一章注に引かれた王本に從つた。

（一）禍と福とは相反するものゝ如く考へられるが實は一の物の兩面であつて、禍の後には福があり、福の裏には禍がかくれてゐる。從つて禍福を區別する標準は何處にもない。然るに人は禍を恐れ福をよろこぶ、これは人間の迷ひである。

（二）獨り禍福ばかりでなく、正邪といひ善妖といふが如く相反對する概念は實は、一物の

兩面であるから一面を取つて他を斥するは不自然である。乃で聖人は常に混厚の德を重じて一面に執着せぬ。即聖人は方正を貴ぶが自然を割截して方正ならしむるのでない。(第四十一章に大方は隅なしといつたのも此意である)又聖人は廉稜があつて鋭利であるが自然を傷害して鋭利を示すことはせぬ。又直なるものは伸びるが普通なれど、聖人は直を尙んで而も伸(肆)びようとせない(第四十五章大直若屈といふは即此意である)。又聖人は光輝あるもその光をつゝんで敢て眩示せない。即其光を和して其塵に同ずる。

第五十九章

(一)治民事天莫如嗇。夫唯嗇是謂早復。早復謂之重積德。重積德則無不克。無不克則莫知其極。莫知其極可以有國。有國之母。可以長久。(二)是謂深根固柢。長生久視之道。

校異 (一) 治民の民字、如嗇の如字河上公本人と若に作る。今の王本は河上公本によつて改められてゐるが其注文によると右の通りであるべきだ。是以早復河上公本と傳奕本及解老篇

は早服に作り、今の王本も早服となつてゐるが、釋文は早復に作り范應元集解に「王弼孫登及世本作早復」といひ、王弼注に「早復常也」(今本復を誤つて服となす)とあるは第十六章「復命曰常」とあるによつて注したものの樣に見えるから、王本はもと早復に作つたに相違なく、今本は河上本によつて校訂されたのであらう。又是以の二字諸本是謂に作るが夫惟の字に對するから韓非及傳奕本に從つて是以に作るべきである。克字河上本剋に作る。

此章(一)は全文有韻で古い道家言であるやうだが(二)の二句は神仙養生家の說で老子の言が神仙家に誦傳された時加へられたものであらう。

此章嗇字は晏子春秋問下に嗇と吝と愛との區別を說いて「嗇は君子の道にして、吝と愛とは小人の行なり、財の多寡をはかりて之を節用し、富むも全藏することなく、貧するも假貸せざる之を嗇といふ、積多くして人に分つこと能はず、又自ら養ふこと能はず、之を愛といふ」とあるを注脚と見ればよく解釋がつく。此章の大意は人主が天に事へ民を治むるに當つては、その實力財力の多寡に鑒みて節用すべきことを說いたのである。

嗇とは節用することであるが又主觀的にいへば欲を制することである。欲を制して無欲に至

ることは即第十六章に謂ふ所「至レ虛」ことで、之が即復命の工夫である。乃で「夫唯嗇是以早復」といふのである。早復とは早く性命の原にかへる意である。性命の原にかへることは老子では德をつむことで、自然の德を助長するから重字を加へて重積德といつたのであらう。德をつめば萬事能くせざるなく、萬事皆能くすれば人其君德の窮る所を知らぬ。國民が君德を窮極なしと思へば國を有つことが出來る。有國の道は宜しく長久なるにあるべし(母は道の意)。

以上有韻の文で文脈一貫してゐるが(二)は神仙家言であらう。(一)に於ては國家を治むる道を說いてゐるが(二)になると長生の道となつてゐる。

第六十章

治二大國一若レ烹二小鮮一、以レ道莅二天下一、其鬼不レ神、非二其鬼不一レ神、其神不レ傷レ人、非二其神不一レ傷レ人、聖人亦不レ傷レ人、夫兩不二相傷一、故德交歸焉、

校異 烹小鮮范應元本亨小鱗に作る。景龍碑亨字の下列火なく鮮字鱗に作らず、釋文に亨普庚反不當加火とあるから王本ももとは亨に作つたに相違ない。鱗字は下の神人と韻するも釋文

に鮮音仙とあるから古くから鮮に作つたらしい。莅、天下、釋文に莅古無此字說文作埭とあつて淮南淑眞訓の注に引かれた文も亦埭天下に作る。想ふに後漢以前は莅を埭に作つたらうが王本も河上本も皆莅と成つて居る。韓非子解老に引かれた老子は國字の下に者字があり、非其鬼不神の句及び其神不傷人の句下に也字がある。亦不傷人の人字民に作る。故字則に作る。

大國を治めるに靜虛を旨として躁擾をさくべきである。譬へば小魚を烹るに煩擾すれば必ずくづれるが成るべくいぢらなければよく烹ることが出來ると同じである。もし君主が自然の道に從つて天下を治め民善をなすに無關心であれば鬼神も其神驗を現して善を福する事能はず又民惡をなさゞれば之を害することが出來ない。唯鬼神が民を害すること出來ぬのみでなく、聖人も刑威を設けて民を罪することが出來ぬ。鬼神も聖人も民を害することが出來なければ神聖の德はひろく天下に行きわたる。かくて眞の政治といふべきである。此一章韓非子には全然法家言の如く說明して居るが其文から見ても比較的新らしい樣で老子の言ではあるまい。

第六十一章

大國下流、天下之交、天下之牝、牝常以レ靜勝レ牡、以二其靜一故能爲レ下也、

故大國以下小國則取小國、小國以下大國則取大國、故或下以取、或下而取、大國不過欲兼畜人、小國不過欲入事人、各得其所欲、大者宜爲下、

校異 大國下流傅奕本大國者天下之下流に作つてゐるが王弼本と河上公本には天下之の三字がない。天下之交范應元本天下之所交也に成つてゐるが王河兩本は右の如くである。牝常以下二句景龍碑には「牡常以靜勝、牝以靜爲下」に作るが恐らく誤であらう。以其靜故能爲下也の八字現行王本はたゞ以靜爲下の四字となつてゐるが、恐らく河上公本によつて校訂せられたものであらう。王弼注に「以其靜故能爲下也、牝雌也」云々とあるが、此注の上八字は王弼原本の本文で現行本は之を注と誤解して河上本で補つたものらしい。傅奕本に此句を以其靖故爲下也とあるは王本に從つて能の字を脱したやうである。各得其所欲の上現行王河兩本夫兩者の三字があつて景龍碑には此兩者に作り、傅奕本は兩者の二字あつて此句下故字がある。然し羅鈔河上公本には此等の字なく、此ところ王弼注にも各得其所欲則大者宜爲下也とあつて則字と也字は右文より多くなつてゐるが夫兩者の三字はなかつたらしいから今刪去した。

此章初三句は大國下流すれば天下の交となり天下の牝となるとよむべきである。恰も江海が下にある故衆流の歸するところとなる如く大國が自ら下りて驕らず高ぶらなければ天下小國の歸服する所となり、戰はずして功を收めることが出來る。天下之交とは天下之交會するところの意、牝とは不爭而勝意である。牝常云云の句は牝字を說明したもので牝は常に靜の德を以て牡の躁に勝つ。其理由は牝は其靜を守つて下となり得るからである。要するに卑下を守るといふ事が第一義である。乃で大國でありながら小國に對して驕らず謙遜であれば小國の歡心を得ることが出來、小國にして大國に對し謙下なれば大國に容れられるものである。凡そ大國といふものは多くの人民を兼ね養ふを希望するもので、この目的は卑下を修めて小國の歸服を得ることによつて達せられる。又小國の目的とする所は大國に事へて安堵するにあるもので此目的は又卑下を守ることによつて就げられる。乃で下るといふ事によつて大國も小國も各其目的を達するものであるが、殊に大國たるものは宜しく卑下を旨とすべきである。

此章全文韻をふまぬから恐らくは後人の文で老聃の言ではなからう。その卑下を說くは老聃の主張に本づく樣だが、之によつて國家の安全を計る術とする點は隱君子といはれた老聃の言らしくも思へぬ。

第六十二章

(一)道者萬物之奧、善人之所寶、不善人之所保。〔美言可以市、尊行可以加人〕人之不善、何棄之有、

(二)故立天子置三公、雖有拱璧以先駟馬、不如坐進此道、古之所以貴此道者何、不曰以求得、有罪以免邪、故爲天下貴、

校異 (一) 傅奕本は奧下也の字があるが河上公本には也字は奧下になく寶下にある。范應元本は兩句とも也字なく、景龍碑は寶上所字もなく所保を所不保に作つて居るが、王弼本の原形は范本と同じであつたらう。所保の下括弧に入れた二句は、恐らくは第二十一章の錯簡であらう(第二十一章參照)。此節奧、寶、保、有に韻をふんでゐるのに此二句には韻がない。是れ此二句が此に在る筈のものでない證據である。

(二) 不曰以求得の句河上公本には不曰以求得に作り景龍碑は不曰求以得となして免字を勉に作つてゐるが王弼注によれば其原本は右の如くに成つてゐたらしい。

(一) 奧字王弼は懊字の假借と見て曖い義としてゐて河上公注には藏の義と解釋してゐるが此章は主の意であらう。禮記禮運篇に人情以爲田故人以爲奧也とあつて、鄭玄は奧字を主と注してゐる。此れ奧に主の義ある證據である。道は萬物の主であつて、善人は之を寶として尊ぶが不善人とても亦此道に抱懷されてゐるのである。元來道は絕對的のもので善惡は相對的のものであるが、相對的の善も惡も道から見れば差別がない。故に人之不善何棄之有といつたのであらう。以上は有韻の文で古い道家言であらうが、(二)は無韻の文で後人の敷衍であらう。

(二) 道はかく善不善を超越した貴いものであるから、天子を立て三公を置いて政治をするには此道によるよりよいはない。拱璧を有し駟馬をかつて贅澤な外飾を施すよりは此無爲の道に進むが第一である。古の君主が此道を貴ぶはそもそも何によるか、それは此道は善不善を超越したもので、之を求むれば雜作もなく得ることが能き、之によれば罪あるものもゆるされるからである。

第六十三章 第六十四章

(一)爲無爲、事無事、味無味、(二)大小多少、(三)報怨以德、(四)圖難於其易、爲大於其細、」

(五)天下之難事、必作於易、天下之大事必作於細、是以聖人終不爲大、故能成其大、夫輕諾必寡信、多易必多難、是以聖人、猶難之、故終無難矣以上

第六十三章

(六)其安易持、其未兆易謀。(七)其脆易泮、其微易散、爲之於未有、治之於未亂、

(八)合抱之木生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下、(九)爲者敗之、執者失之、是以聖人無爲、故無敗、無執故無失、(一〇)民之從事、常於幾成而敗之、愼終如始則無敗事、是以聖人欲不欲、不貴難得之貨、學不學、復衆人之所過、以輔萬物之自然而不敢爲。以上第六十四章

右二章の文は錯簡が多く注文が本文に混入したりなどしてゐて殆ど意味が連續しない。例へば（九）の一節は第二十九章の錯簡で此章には連絡がない。又（四）の二句は（五）の注釋であらう。此節「聖人終不爲大、故能成其大」の二句は第三十四節に錯入して居て彼章此二句の下の王弼注に（四）の二句がある。是れ（四）の二句が注から本文にまぎれ込んだ證

據であらう。又（二）の大小多少の四字も韓非の喩老篇に「有形之類、大必起於小、行久之物、族必起於少、故曰天下之難事、必作於易、天下之大事、必作於細」とあるより想像すると、恐らくは（五）の初二句の古い注文が混じて本文と成つたのであらう。其他（三）の報怨以德の四字の如きも此章にあつては刻底連絡のない句である。乃で此等の錯亂を整理して次の樣にすれば大略意味がつゞく樣に思ふ。

其安易レ持、其未レ兆易レ謀、其脆易レ泮、其微易レ散、爲之於未有、治之於未亂

合抱之木、生於毫末、九層之臺起於累土、千里之行、始於足下、天下之難事、必作於易、天下之大事、必作於細、是以聖人終不レ爲レ大、故能成其大、（爲大令其細難於出易）夫輕諾必寡レ信、多易必多難、是以聖人猶難レ之、故終無レ難矣、民之從レ事、常於幾成而敗レ之、愼レ終如レ始、則無敗事、是以聖人、欲不欲、不レ貴難得之貨、學不學、復衆人之所レ過、以輔萬物之自然而不敢爲、

右はたゞ意味のつゞく樣にならべただけで此二章の舊形が果して如此であつたとは斷言できぬ。而してかくならべて見ても一字低くかいた部分は散文で有韻の部分は一字高く印刷した部分だけである。而して恐らく此の有韻の部分だけが古い文であらう。乃で有韻の部分だけを解釋する。

凡そ凡ての事は亂れ初めぬ前即安き間は保持しやすく、亂兆のあらはれぬ前に考へれば解決が容易である。何事でも脆き間には破壞し易く、小さい間には散らしやすいものであるから、宜しく未有の前に事をなし未亂の前に治める樣にせなければならぬ。

乃で聖人は常に亂の本になる欲と知を抑へ、不欲を欲して得がたい貨を貴ばず、學者ぶらずに常に衆人のやつた後ばかりで追うて自ら先んずることをせず、ただ萬物自然の成行に從つて行つて敢自ら事を爲さうとせぬ。無爲無事をつとめて恬憺無味を守つて行く。

一字低くかいた部分は右の意を敷衍しただけで殊更解釋もいるまい。

此章全體として老子の思想にさして矛盾もせないが不欲不學を高調した點から見ると或は愼到一派の傳へた語であるまいか。

第六十五章

(一)古之善爲道者非以明民、將以愚之、民之難治以其多智也、(二)故以智治國國之賊也、不以智治國國之福也、知此兩者亦稽式也、能知稽式是謂玄德(三)玄德深矣遠矣、與物反矣(四)然後乃至大順

攷異 (一) 多智也河上公本智多に作る。現行王弼本は河上公本と同じであるがその注に多智巧詐故難治也とあるから、王本の原形は右の如くであつたらう。傅奕本は智を知に作る。下の智字も同じことである。

(二) の也字三つは今の王弼本にはないが范應元の見た本にはあつたらしく、王注によると范本が正しい樣である。恐らく現行本は河上公本で改められたものであらう。稽式河上公本楷式に作つて法式といふ意に注してゐる。王本は稽式に作つて稽同也と注して古より今に至るまで變らぬ規則といふ意に取つてゐる。能知河上公本は常知に作つて今の王本は河上本と同じであるが注文によると能知に作つたに相違ない。

(四) 然後二字河上本になく、范本と傅奕本とはこの二字がなくて乃字の下に復字がある。文選養生論注に鍾會注を引いて反俗以入道然乃至於大順也とあるから鍾會本は然後二字があつたらしい。然後乃後といふ句は常に王弼が用ゐる句法であるから恐らく注文であらう。

此章(一)と(四)とは韻をふまず、(二)は國賊國福式式德と韻をふみ、(三)も遠と反と韻が合ふから恐らく(二)と(三)とが古い部分であらう。然し全體として愚民政治を高調してゐるから、この章は老聃の語でなく愼到あたりの言であらう。その意は(一)古の有道者は民

知を明にすることをつとめず愚にすることをつとめる。それは民の治めがたきは賢しきにすぎることに原因するからである。(二) 故に智をすすめるのは國家の不祥事で智を排することが國家の幸福である。この智が不祥で不智が幸福だといふことを辨へるべきは政治家の永久變らぬ法則で、よく此法則を呑み込んだ人が玄德者である。玄德とは深遠なる德で一般の事柄と反對に見えるが、この反對に見えることがやがて道理に順ふことに成るのである。

第六十六章　第三十二章　六七十章

(一)譬道之在天下、猶川谷之與江海、以上十三字舊本在第三十二章
(二)江海所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王、是以聖人欲上民、必以言下之、欲先民、必以身後之、是以聖人處上而民不重、處前而民不害是以天下樂推而不厭以其不爭故天下莫能與之爭
(三)天下皆謂吾大、似不肖、夫惟大、故似不肖、若肖、久矣其細也以上舊在六十七章

校異　(一)　はもと第三十二章の語であるが彼章に於て意味がつゞかず、此章の初にあるべき

心地がする。今陶方琦及馬叙倫の說に從つてこゝに移した。道字傅奕本にかけてゐるが恐らくは誤脫であらう。與字現今の王本は於に戚つてゐるが注によると與であつたらしい。恐らく今本は河上公本で校改されたのであらう。

(二)　聖人欲上民現行王本には聖人の二字がないが他本にはある、恐らく今の王本の誤脫であらう。此章王弼本には一字も注がないが(二)の全節に於て是以の二字が三回くりかへされて而も同じ樣な意味の語が重複してゐる。恐らく小活字で印刷した句は注語であらう。

(三)は次の章の初めにある句であるが此章につゞけた方が自然に見える。

(一)と(二)との連絡について(一)は川谷といひ(二)は百谷とあるは不思議であるが、後漢書南匈奴傳にのせられた憲宗の詔勅中に「傳曰、江海所以能長百川、以其下之也」とあつて、其語は老子此章の異文であらう。もし此百谷が一本百川に作つたとして、上の川谷の語を對照して考へるならば老子原本は泉谷に作つたのであるまいか。川と泉とは音が近く泉字が二字に分れて百川となり、百川谷から川字を删つて百谷と成つたものと說明すれば首肯され易い心地がする。百谷或は百川は江海の字に對する成語としては餘り感心が出來ぬが、泉谷ならば江海と對して差支がない。然し今現存諸本の文字を存して敢て改訂せずにおいた。

道が天下に於て卑きに歸することは猶谷川と江海の如き關係にある。江海が谷川より大きい所以は卑いところにあるからだ。故に人が江海の如く卑き地位に甘んずるならば道の歸往する所となる。故に聖人は民上に君臨するも謙讓な言葉を使つて自ら孤寡不穀と稱する。民の先に立たんとすれば自ら謙遜して敢て天下の先とならうとせぬ。乃で天下の人は其德になついて之を上に戴いて安心して行くのである。天下の人は吾を大きくはあるが、一向賢しげに見えぬといふ。然しこの賢しげに見えぬところが大きい所以で、賢しくて知を振りまはす樣なれば小人物だ。此一章は全く無韻の文であるから比較的新しい文かも知れぬが、其思想からいへば道家言に牴觸せぬ。

第六十七章　六十八章　六十九章

(一)吾有三寶一、持而寶レ之、一曰慈、二曰儉、三曰不二敢爲一天下先一。慈故能勇。儉故能廣。不二敢爲一天下先一、故能爲二成器長一。今舍レ慈且勇、舍レ儉且廣、舍レ後且先、是謂二入レ死之門一。夫慈以陳則勝、以守則固、天將レ救レ之、以レ慈衞レ之　以上第六十七章

(二)古之善爲二士者一、不レ武。善戰者不レ怒。善勝レ敵者不レ與。善用レ人者爲二之下一。是謂二不爭之德一、是謂二用人之力一、是謂レ配二天一古之極一。　以上第六十八章

(三)用兵者有レ言、吾不二敢爲一主而爲レ客、不二敢進一寸而退一尺一。是謂行無レ行、攘無レ臂、執無レ兵、扔無レ敵、禍莫レ大二於無一敵、無レ敵則幾亡二吾寶一。故抗兵相如則哀者勝矣　以上第六十九章

校異　(一)　持而寶之河上公本は寶を保に作り保倚の意と注してゐるが王本は其注文から判斷すると寶であつたに相違ない。能爲成器長の句河上本には爲字がないが范應元本にはある。注によると王本にも爲字があつたらしい。舍字傳奕本と景龍碑には捨になつてゐるが、釋文には舍字に成つてゐるから王本は舍であつたらう。舍と捨とは通じて用ゐられる字である。傳奕本には舍字の下に其字があるが河上公本にも王本にもない。その注によると河上公本にはもと其字があつたらしい。是謂入死之門の句河上本も王本も死矣の二字となつてゐるが、傳奕本范應元本は此通りとなつてゐる。門字先字と韻をふんでゐるから今の王河兩本は誤りであらう。

(二) 古之二字今の王本にはないが、瀧川氏所藏舊鈔本の欄外に王本は古之二字あつて河上公本にはないと記されて居る。今范應元本傅奕本に此二字あるは王弼本を襲うたのであらう。不與傅奕本范應元本景龍碑道藏次解本皆不爭に作る。此與字は元來相敵對して爭ふ意味の字であるが、後の人が其意を解せずして爭の字に改めたのであらう。是謂配天古之極の句諸本皆同じであるが、上の句例から推すと一字多すぎる。兪樾の老子平議に天の字を衍文だらうといつてゐる。一體古の字に天の意味があるから天と古とは重複である。而して古之極は此節の初の古之字と應ずるから天字は刪るがよい。

(三) 執無兵扔無敵の二句河上公本には前後を顚倒し扔無敵の句を先にしてゐて今の王本は河上公本と同じであるが、此下王弼の注に「謙退哀慈、不敢爲物先、用戰猶行無行、攘無臂、執無兵、扔無敵也」とあるから王本ももと今改めた如くであつたらう。傅奕本の句次も今改めたのと同じであつて、此四句行と兵と、臂と敵と隔句韻をふみ最後の扔無敵の句は下の句を引き起してゐるから河上本は誤りに相違ない。禍莫大於無敵の無字河上公本に輕字に成つて居て、今の王本は河上本に一致して居るが、王弼の注によるとその本文は無敵に作つたに相違ない。傅奕本に無敵に作るのは王本の舊形を傳へてゐるのである。無字は侮字と音が似てゐるから河上本は無を侮の假借と見て輕侮の意に解釋し、遂に其本文を改めて輕敵と

したのであらう。幾亡吾寶の亡字今の本には王本も河上本も喪に成つてゐるが、注によると王本は亡で河上本は喪である。相如河上本に如を加に作つて兩敵戰也と注してゐるが、傅奕本は如を若に作つてゐる。今の王本は河上本と同じに成つて居るが、其下に注して如當也といつてゐる。加は增加する意重さなる意で當るといふ意がない。當るといふ意は如字の解であるから、王本は如に作つたに相違ない。而して若と如とは同じ義である。哀者凡ての本皆哀者と成つてゐるが意味が通ぜぬ。兪樾の說に從ふと哀は襄字の誤りで讓る意である。

(一) から (三) に至る三節今本は三章に分れてゐるがもともとつゞいた章であらう。注を熟讀すると王弼もこれを一の章と認めてゐることがわかる。

(一) 吾れに三つの寶がある。所謂三寶とは慈と儉と先を爭はないといふことがそれである。慈は慈愛の意で味方を愛する念がつよければ自然勇氣が生ずる。儉は財用を浪費せない事で儉なれば自然餘裕が出來て、其惠澤は廣く及ぶ。先を爭はなくて謙讓を守れば自然人の歸服する所となつて萬事の長となれる。もし慈をすてゝ勇のみを取り、儉をすてゝ其施の廣からんことをのぞみ、後を守らずして先たらんとするならばそれは死地に入るより外はない。三の寶いづれも大切であるが殊に慈が尤も貴く中心慈愛を懷いて陣にのぞむならば必ず勝ち、城を守れば堅固である。要するに慈愛は天道にかなつてゐるから天も之をすくつて慈心を以

て之を加護するであらう。

(二) は上節に慈の德を讃嘆したのをうけて不先の德をのべたものである。古の名將といはれる人は沈勇にして猛捍の失がない。戰爭は威怒に發するものであるが、眞の戰ひに長ずるものは心を落ちつけて容易に怒らぬものである。又眞によく敵に勝つ人は妄に爭はず好く謀つて勝利を得る。よく人の上に立つて下を使ふ人は自ら謙讓を守つて下の心服を得る。此四のものは皆不爭の德に本づくもので人を用ふる祕訣、又天道に順ふ所以のものである。

(三) 用兵者の言に吾は挑戰者とならずに應戰者となり、寸を進まんよりは寧ろ尺を退かんといふが、これは爭ふ意のないことをのべたものである。爭ふ意のないものは行陣すべきところもなく、攘ふべき臂もなく、執るべき兵器もなく、また爭ふべき敵もなしといふべきで戰はずしてかつ道である。凡そ戰爭に於て敵を輕侮するほどの不祥事はない。敵を輕んじて躁進すれば上にのべた三の寶を亡ふことになる。故に兩々相對抗して戰ふ場合には一歩をひかへて讓歩するものが最後の勝利を得るものである。

以上の章は道家言によつて修飾された兵家言で恐らく老子の語であるまい。但しその韻をふんで居る點から考へても可なり古い語であることは疑を容れぬ。

第七十章

(一)吾言甚易知、甚易行、而人莫之能知、莫之能行、(二)言有宗、事有君、(三)夫唯無知、是以不我知、知我者希、則我者貴、是以聖人被褐懷玉、

攷異 (一) 而人莫之能知、莫之能行河上公本景龍碑而人を天下に作り、現行王弼本は河上本に同じであるが、其注に引かれた文は莫字の下に之字があること傅奕本と同じである。想ふに傳本此句は王本に從つたものであらう。從つて而人の二字も王本は天下に作らなかつたらしく、注によると河上本も原は傳本と同じであつたらしい。蓋し而字の篆文は天字に近くて誤り、人字もまた下と似てゐるため誤られたのであらう。

(二) 事有君の君字范應元本は主に作る。注によると河上王弼兩本ともに君に作つた事明瞭で、范本は注義に從つて改められたらしい。(三) は(一)とよく連絡するが其中間に(二)があるため文脉がつゞかぬ。恐らくは古い注語の竄入であらう。群書治要に此六字を刪つたのは意味ある事である。然し此六字は淮南道應訓に引かれた文にもあるから、其竄入は漢以前にあらねばならぬ。

此章（二）を刪れは他は解釋を要せぬ。此章は總じて韻がなく新しい文であらう。但最後「被褐懷玉」の四字は褐と玉とに韻を合せて比較的古いらしい。家語三恕篇に子路問於孔子曰、有人於此、被褐而懷玉何如、孔子曰、國無道隱之可也、國有道則衰冕而執玉」とあるも此語を中心として作り出された物語である。

第七十一章

知不知尚矣、不知知病矣、（夫惟病病、是以不病）聖人之不病、以其病病、是以不病。

攷異 右の全文は傅奕本に從つた。河上公本は尚矣を上に作り、夫惟の上に矣字なく惟を唯に作り、聖人の下之の字なく不吾病を不病に作る。今の王本は河上本と同じであるが、龍川本に引かれた賈大隱の說によれば最後の一句王本は傅奕本と同じだといふから此章は傅本が王本の原形であらう。韓非喩老は不吾病を無病に作る。王本の吾字は恐らく衍字であらう。

此章（二）と（三）の下二句とは略同じである。而して（一）は淮南道應訓に引かれ、（三）は韓非子喩老に引かれて居るが（二）は古書に引用されたのを見ない。而して景龍碑と道藏次解本とには此等の句がない。思ふに（二）は（三）の異文を行旁に記したものが本文に混入したものであらう。

（一）の意味は呂氏春秋別類篇に「知りて知らずとするは上なり矣、過者の患は知らずして自ら以て知となす」とあると同じで、尚は上と同じ義であらう。

（三）は不知知病矣の句をうけて聖人に病（即患）なきは病（即知らずして知とする缺點）を病むからである。聖人は缺點を缺點と知るから缺點がない譯である。

第七十二章

民不畏威、則大威至、無狎其所居、無厭其所生、夫唯不厭、是以不厭、是以聖人自知不自見、自愛不自貴、故去彼取此、

攷異 （一）河上公本には大威の上に則字なく至字の下に矣字があつて狎を狹に作る。景龍碑

は則字も矣字もなく次解本は民字を人に作つて則字だけある。今は王弼注に引かれた本文によつた。傅奕本と范應元本とは至字の下に矣字あること河上本と同じであるが、其他は王本と同じである。

（二）は諸本略同じであるが、傅奕本と范應元本とには自知及び自愛の下にともに而字がある。

右河上本には愛己章と名づけて一章としてゐるが（一）と（二）との間に連絡がない樣である。姚姬傳の如きは（一）の中にも初二句を獨立したものと見てゐるが此二句は下の四句とつゞかぬでもない。而して馬叙倫は（二）を獨立した章の殘存する者と見てゐる。私の考では（一）は錯簡で別に獨立した章らしく（二）は七十三章の終りにつくべきだと思ふ。魏源の老子本義に七十、七十一の兩章を一章と見て、景福碑には七十一章と七十二章とをつゞけてゐて、魏源の見方も尤だと思はれる點もあるが、もし此章の（一）を錯簡と見れば（二）は七十、七十一の兩章の結論とも見られる。先（二）から解釋すると（二）の自知不自見は七十一章の知不知の句に應じ、自愛不自貴は知我者希則我者貴の句に應ずる。即此章第二節の意は聖人は褐を被り玉をいだき知つて知らぬ樣な風をして、衆人が知らざるに知れる如くよそほうて尊貴を求める樣な眞似をせぬといふ事をのべたものであらう。去彼取此といふ彼は聖人の所謂知り易く行ひやすきを理解せず行はない衆人を指したもので、此は自ら知りて其光耀を外に見らはさぬ聖人を指したものであらう。

（一）威とは天命の意で、大威とは刑誅の意であらう。もし人が天より賦與された運命に從はなければ自然刑戮が身に及ぶものであるから、人は宜しく其居に安んじ其俗を樂しみ其食に甘んじ、其服を美として狎れあなどらず厭ひすてずに天分に安堵すべきである。人が自ら天分に安んじて天命を厭はざれば天も亦其人を愛して厭はないであらう。

七十章から此に至る三章は有韻の部分と然らざる部分とあるが、大體に於て道家の思想からはなれてゐない。其無知を說いても絕聖棄知と主張した愼到の說とは大に相違してゐる。

第七十三章

（一）勇於敢則殺、勇於不敢則活。此兩者或利或害。天之所惡、孰知其故。

〔是以聖人猶之難〕天之道不「爭而善勝、不「言而善應、不「召而自來、坦然而善謀」天網恢恢、疎而不「失。」

校異 (一) 是以聖人猶難之の七字は景龍碑と道藏次解本とにはない。而して此章前後ともに有韻の文であるのに此句に韻がなく、且つ第六十三章にも之と同じ句があるなどを合せて考へると此七字は錯簡であるだらう。但し王弼本にも河上公本にもあつた事は疑を容れぬ。

(二) 坦然陸德明の釋文に「繟音闡、坦叶坦反、梁、王尙、鍾會、孫登、張嗣本有此、坦平大貌河上作墠、墠寬也、坦尺善反、又上單反也」とあるがその意が明瞭でない。道藏本彭耜の集注釋文によると、陸本は坦に作り、河上一本墠に作るといひ、茫應元の集註に王弼、梁王尙、孫登、張嗣本は坦に作るといひ、舊鈔河上公本が皆繟然に作つて居るのを合せて考へると、王弼本は坦につくつて陸德明は王本を襲ひ、河上本は別に繟字に作つて河上一本墠に作つたのであらう。從つて釋文の原本は「坦吐但反、今本吐誤作叶今據察沙釋文改 梁武今本脫武字今補正 王尙鍾會孫登張嗣本若此、今本若誤作有今改正 坦平大貌。河上本作繟、繟音闡、寬也、一本作墠、墠尺善反、又單反」であつたらう。蓋し坦然は平坦寬廣の貌でこれが其本義であらうが後に繟墠の字に變化したのであらう。傅奕本は默然に作り、道藏次解本は不言に作つてゐるが其本づくところを知らぬ。

(三) 不失後漢書杜林傳注に引かれた文は不漏に作つてゐる。

此章古來の注釋者が種々に解釋してゐるが太田晴軒は一の疑獄を斷ずる場合を豫想して說明してゐる。此章の初に活殺の二字があつて終り天網恢々の句がある點から推測すれば、晴軒の考へ方が略ぼ當つてゐる樣である。而して列子の力命篇に「老聃關尹に語つて天之所惡孰知其故といへるは、天意を迎へ利害を揣るは其已むるに如かざるをいふ也」とあつて、列子の此一節は此章の解釋と見てよい。乃で此章を解釋すれば次の如くであらう。

此に一つの疑獄があつて、果斷なる人は殺すべしと判斷し、遲疑する人は活すべしと判斷する場合、この果斷者と遲疑者の兩方は俱に利害を謀り考へて判斷するのであるが、かゝる問題は利害の打算で定むべきでなく天意によるべきである。天意は利害の打算から割り出さるべきものでないから果斷者遲疑者のいづれも之を知る事が能きない。所謂天意天道といふものは、爭はずして勝ち言はずして行はれ、呼ばずして自ら從ひ來るもので、寬大ではあるがぬけ目のないものである。言ひ換れば天が善を助け惡をとらへる網は大きくして網目はまばらであるが漏失することはないものである。恢々は大なるかたち、史記滑稽列傳に「天道恢々豈不大哉」とあるは老子此章の文によつて作られた句であらう。

第七十四章

民不畏死、奈何以死懼之、若使民常畏死、而爲奇者吾得執而殺之、孰敢、常有司殺者殺、夫司殺者殺、是大匠斲、夫代大匠斲者、希有不傷其手矣、

成異 右は道藏王本の本文であるが河上公本には孰敢の下に矣字があつて、有司殺者の下殺字がなく夫字の下に代字、是字の下に謂代の二字がある。傅奕本は不畏死の上に常字があつて奈何を如之何其に作り、孰敢の下に也字があつて夫字を而代の二字とし、是の下代字あつて希を稀に作つて傷字の上に自字がある。陸氏釋文に是大匠斲の四字を出してゐるが、それに合するのは道藏王本であるから、道藏王本は大略王弼本の原形に近いであらう。

此章は河上公本に制惑章と呼んで獨立した章としてゐるが吳澄と魏源とは上章とつゞけて一章としてゐる。兩章を熟讀するに吳魏二家の考は當を得てゐるらしい。前章に天網恢々疎而不失と說いた後をうけて此章は天には常に司殺者があるから人君は之に代つて刑罰を重くする必

要はなく、唯民が其居に安んじ其生を樂しむ樣にすればよいといふ意味を說いたものらしい。一體民が死を畏れない樣になれば刑罰を重くしても何の效果もない。之に反して民が生を樂しみ死を畏れさへすれば奇邪の行をなすものを殺すことのみに骨折る必要はない。何となれば天網恢々疎にして漏さず常に善を活し惡を殺す主宰があるからである。この殺を司る主宰者は譬へば巧妙な大工が木を切る樣なもので、これに委ねれば失敗はないが、下手な素人が上手な大工に代つてやれば己れの手を傷ける如く失敗するものである。

以上第七十三四兩章は意味が連續するが、前章は略有韻の文で此章は韻がないから此章は前章の後をうけて後人が敷衍したのであらう。

第七十五章

民之飢、以其上食稅之多、是以飢。民之難治、以其上有爲、是以難治。民之輕死、以其求生之厚、是以輕死。夫唯無以生爲者、是賢於貴生。

校異 右は道藏王本の本文によつたのであるが、傅奕本に多字爲字厚字生字の下に也字があつて求生を生々に作る。河上公本も鈔本によつては也字のある句とない句とがある。此等助字は景龍碑には全部削られた字で、左程重大な問題でもないが求生は生々に作る方がよい。

民の饑るのは上が租稅をとりすぎるからであり、その治めがたきは上が有爲であるからであり、其死を輕んずるのは生にかかわりすぎるからである。生死に超然たるは生を貴ぶよりは遙かに賢明なる人である。

此章飢治死と韻をふんでゐる樣だが、文章はのびすぎた傾がある。彭耜の老子集注雜說、及董思靖の集解によると王弼既に此章を老子の作でないと疑つたとある。全章の主意が貴生を排してゐる點より考へると、楊朱の說が行はれた後に道家一派の人が反駁した文であらう。

第七十六章

人之生也柔弱、其死也堅强、草木之生也柔脆、其死也枯槁、故堅强者死之徒、柔弱生之徒、是以兵强則滅、木强則折、强大處下、柔弱處上、

此章は第四十二章に解釋したから此れは略する。

第七十七章

(一)天之道、其猶張弓與、高者抑之、下者舉之、有餘者損之、不足者補。天之道、損有餘而補不足、人之道則不然、損不足以奉有餘、孰能有餘以奉天下、唯有道者、(二)是以聖人、爲而不恃、功成而不居、其不欲見其賢、

校異 (一) 與河上本乎に作り傅奕本者歟に作る。不足者補之の補字河上公本景龍碑與に作るが傅奕本は王本と同じである。下文に對照すると補に成つてゐる方が正しい。補不足の下河上本は也字があるが傅本と王本とにはない。有餘以奉天下河上公本以の字有餘の上にあり傅奕本と范應元本とは損有餘而奉不足於天下者に作る。唯有道者、傅奕本其惟有道者乎に作る。

(二) 不居現行王本河上本皆不處に作つてゐるが傅奕本は不居となつてゐる。此句と同じ文第二章にもあつて王本は不居であつたらうことは前に述べたが、此の句も亦居に作るべき

であらう。呂氏春秋審分覧注に引かれた文は明かに不居と成つて居る。其不欲見其賢河上本之と同じ。王注に不欲示其賢とあつて王本は見を示に作つたらうといふ人もあるが、注の示字は經の見字を解釋したものであらう。傅奕本此句下耶字あり、景龍碑其字を斯に作り次解本は此句を斯不貴賢に作る。想ふに此六字は古い注文であらう。

此章は易の象傳に「地中有レ山謙、君子以裒レ多益レ寡、稱レ物平レ施」とあると同じ思想である。就中（一）は多をけづりて少きを益すことをのべ（二）に於て謙德がその根本であることをのべてゐる。

弓を張るときは上弭を抑へ下弭をあげて弦をかける。天の道は弓を張る場合と同じ樣に高きものは抑へ、下きものをあげ、餘あるものを削り、足らぬところに補ふものであるが、人の行は之に反對である。もし己れの餘裕を以て天下に奉仕するものがあればそれは天の道に從ふ人である。聖人が爲して恃とせず、功成るも之に止らぬのは即其意味である。

第七十八章

（一）「天下莫レ柔二弱於水一、而攻二堅强一者、莫二之能勝一、以二其無一以易レ之」

（二）弱之勝レ强、柔之勝レ剛、天下莫レ不レ知而莫二之能行一、是以聖人云、受二國之垢一、是謂二社稷主一、受二國之不祥一、是謂二天下王一。〔正言若反〕

校異　（一）は四十三章の錯簡であらう、既に彼章に於て之を説明したから之に再び言及せぬ。

（二）淮南道應訓此句を引く、强字剛字の下也の字がある。而莫之行の句今の王本には而字之字がないが舊鈔河上公本傅奕本淮南子にはある。景龍碑には而之二字なく、其上莫不知を莫能知に作る。想ふに碑は簡約を旨として删つたもので淮南に引かれた文が古形であらう。聖人云、范應元本云を言に作り傅奕本は聖人之言云に作る。受字の上二ヶ所とも淮南には能字があるが他本にはない。主字王字の上范應元本河上公本には之字があるが淮南子にはない。傅奕本も之字があつて不祥の下の是謂を是爲に作る。天下王の下范本には也字がある。淮南道應訓に引かれた文も天下王に終つて下に正言若反の四字がない。恐らく正言若反の四字は評語の本文に混入したものであらう。

柔弱が强剛に勝つといふことは、人もよく知る所であるが實際に行ふ人は少ない。そこで聖人は教へて、能く國の垢を受けて社稷の主となり得べく、よく國の不祥をうけて天下の王とな

り得べしといはれた。受國之垢とは莊子天下篇に「人皆先を取る己れ獨り後をとりて天下之垢を受くをいふ」とあるから、進取せず退守する意であらう。不祥も亦垢と同じ意義である。

第七十九章

(一)和大怨、必有餘怨、可以爲善、是以聖人執左契、而不責於人。〔有德司契、無德司徹〕

(二)天道無親、常與善人。

校異 (一) 此章諸本異同少なく、但傅奕本と范應元本は有德司契の上に故の字があるが恐らく衍字であらう。而して有德司契以下八字は上文左契字の注釋が本文に入つたものであらう。

(一) 此章の意は捕促しがたい。但し執左契三字で略想像がつく。禮記曲禮上篇に「獻粟者執右契」といふ句があつて、其意味は粟即粱稻の類を獻ずる場合は其容積が大きく且何時までおいても腐敗せない物であるから、實物を持つて行かずに證券を獻ずるが禮であるといふ意。

古の證券は符契か質劑かを用ひたもので、符契は二枚の割符、其右契をもつ人は額面の物品を受け取る權利を有し、左契はその引合せの證據となるもので、これを所有する人は右契を持つ人の要求に應じて物品を渡す義務があるわけである。乃で此章聖人執左契の一句は、第八十一とを聖人「盡以與人」といふ意と同じで、聖人は自ら財産を積まうとせず、常に人に與へる章の考へるといふ意であらう。而して有德司契の四字は「聖人執左契」と同義で、無德司徹の徹の字は剝ぎ取る意であるから、司契は施し與へること、司徹は剝ぎ取ることであらう。剝ぎ取ることを計畫すれば怨を受ける。怨を受けて後調和をやつても必ず餘怨が殘るに定つてゐるから、聖人は人に與へて剝取をさけるものだといふが此節の主意であらう。

(二)は(一)と連絡ない一節で、天道は親疏の區別なし萬人に平等で、たゞ善人に與みするといふだけの意であらう。

第八十章

小國寡民、使有什伯之器而不用、使民重死而不遠徙、〔雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之、使民復結繩而用之〕甘其食、美其服、安其居、樂其俗、